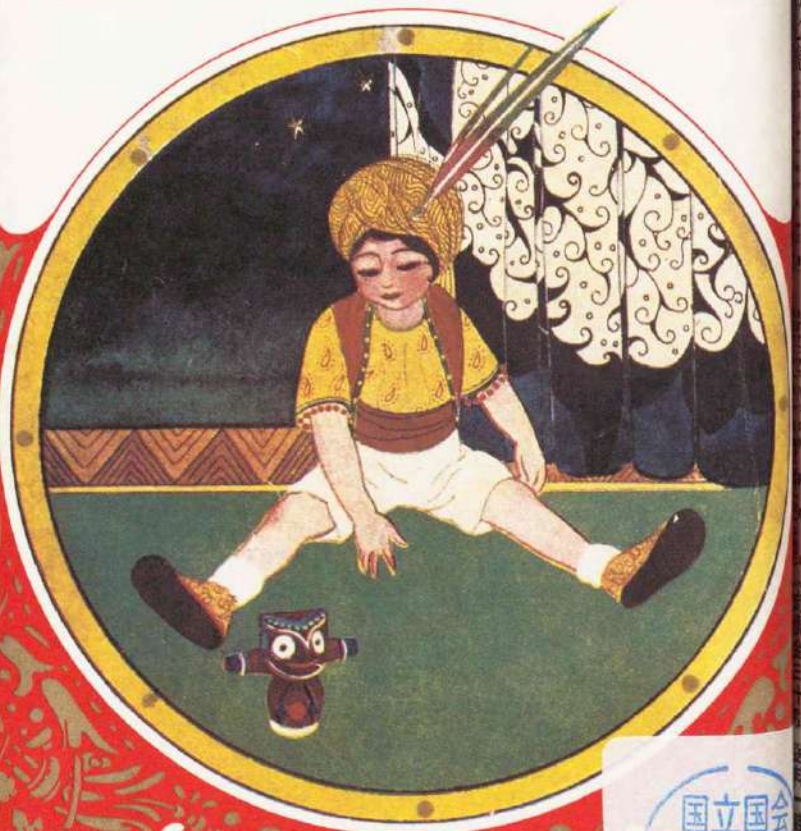
Z32-B88

金の星

八月号



第五卷　第八号

国立国会
8. 3. 26
図書館

右發行一月八年二十正大　本誌印刷日六月七年二十正大
大正十一年六月十三日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

東京上野 松坂屋いとう呉服店
（振替東京五八〇〇番）

夏のよろこびは旅！
御用品は松坂屋へ

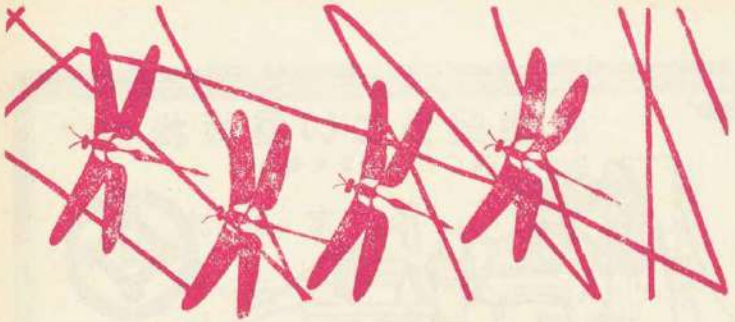
▽飴色柳製服入鞄
二四……十九圓
二二……十六圓七十錢
尺八……十三圓
▽バスケット
六十五錢以上各種
▽千代田袋
三圓三十錢以上各種
▽同籠底
七圓十錢以上各種
▽膝掛
自……七圓
至……三十圓
▽ステッキ式洋傘
自……六圓六十錢
至……十圓三十錢
▽折疊式洋傘
十四圓七十錢均一

▽海水着
自……一圓二十錢
至……二圓五十錢
▽浮袋
自……一圓八十錢
至……二圓十錢
▽登山袋
自……二圓九十錢
至……七圓七十錢
▽ゲートル
並……一圓三十錢
上……四圓三十錢
▽マホー瓶
一合七勺……一圓六十錢
二合七勺……一圓九十錢
▽水筒
並……一圓三十錢
上……二圓

御旅先からの御注文はお葉書一本で迅速にお間に合せいたします。

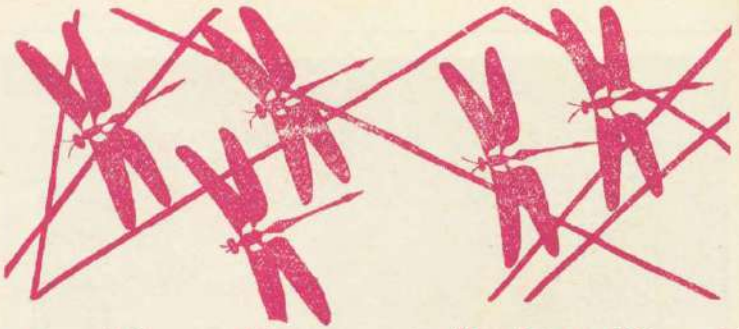
快よき夏の滋強飲料
カルピス
まごころ
こめた
おくりもの

顧問 三宅驥一理學博士
製造元 東京ラクトー株式會社
小壜、大壜、徳用壜、あり



目次

愛らしい王子（表・原色版）……蕗谷虹兒
王女と魔法使（口繪・三色版）……寺内萬治郎
三ヶ月さん（童謡）……四 野口雨情
同 作 曲（作曲）……二 本居長世
猫の居ない村（童話）……六 沖野岩三郎
ドン・キホーテ繪物語……一〇 水島爾保布
牢 破 り（長篇童話）……一四 西條八十
天邪鬼小僧……一九 齋藤佐次郎
海 の 怪（童話）……二〇 長田秀雄
樽の王女（童話）……二六 三宅房子
六代御前（歴史物語）……三一 茅野雅子
彦四郎狐（振鹿童話）……四〇 八ッ代春村
河童の子（童謡）……四一 蕗谷虹兒
三 毛 猫（諸國奇談）……四六 中川杏果
イワンの馬鹿（世界名作物語）……四八 山野虎市
天狗退治（童話）……五五 小島政二郎
ハンニバルの話（歴史物語）……五七 楠山正雄
水 滸 傳（長篇）……七一 宮島資夫
魚のとぶ海（童話）……八〇 若山牧水
沖野岩三郎先生講演便り……八三
螢の子（童謡）……八六 野口雨情選
夏 服 効 果（自由畫）……八八 若山牧水選
姉 ス（綴方）……八九 山本鼎選
大懸賞傳說物語募集……九九 編輯部選
（附 錄）
長篇物語 鈍栗山（第七回）……一〇四 沖野岩三郎
挿畫……寺内萬治郎 水島爾保布



王女と魔法使（口繪解説）

魔法使はびつくりして見てゐるカヌテーラ姫を、おどすやうにいひました。

『私のいふことをよく聞け。お前はこの廐の中で、七年の間、私の歸りを待つてゐるのだぞ。』

（「樽の王女」の二十九頁を御覽下さい。）

▼▼野崎小蟹先生著　愛國美談長編童話　水兵と其母　愈出來　定價金一圓也　送料金十三錢

雨聲を得た今日の名書
情先生がる三大著

童謡集 十五夜お月さん

▼▼▼台覽　文部省認定濟

▽野口雨情先生作謡　四六判箱入美本
▽本居長世先生作曲　定價金一圓三十錢
▽岡本歸一先生挿畫　送料書留十五錢

●苟も童謡を口にする者にして未だ本書を知らざる者は恰も井戸にゐて海洋を論ずる●蛙ッ徒と謂ふべし。吾國最高の權威ある本書の好評日を加ふるに從ひ益多きを加ふ。

民謡集　別後

今日多くの青年子女によりて愛誦されつゝ有る唄は殆ど野口氏の作品である本書の價値を知に足る袖珍箱入天金美本　金九十錢　送料金十三錢。

童謡作法問答

新らしい童謡作方書として内容の最も充實した書は此の書以外にあるまい。本文約三百頁に及ぶ說明は凡て問答體にて一讀誰方にも判りやすく說述してある、定價金壹圓　送料金十三錢。

▼▼藤森秀夫先生著　小曲集　若き日影　愈出來　定價金九十錢　送料金十三錢

交蘭社　東京替振市口座神田區猿樂町十七番　東京仲區四谷二〇九番

沖野岩三郎先生著

長篇物語 父戀し

定價金壹圓

四六判箱入美本
送料十二錢

岡本歸一先生
裝幀及挿畫
大好評四版發賣

少年少女名作物語の第一篇『父戀し』は驚くべき大歡迎を受けて、遂に第四版を發行いたしました。此の版からは岡本先生が裝幀に一層新工夫をこらされたのでいよ〳〵美くなりました。或學校では『父戀し』を最も理想的な課外讀物として指定したさうです。これを見ても此の本がどんなに面白い、爲めになる本であるかゞ知れます。父を尋ね歩くあはれな姉と弟に流す涙は必ず皆さんの魂を清めるでせう。

沖野岩三郎先生著 童話讀本 **赤い猫**

三五判美本
定價八十五錢
送料十二錢

本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠
人買船 **一つお星さん**

菊判木版刷美本
各冊金六十錢
送料金四錢

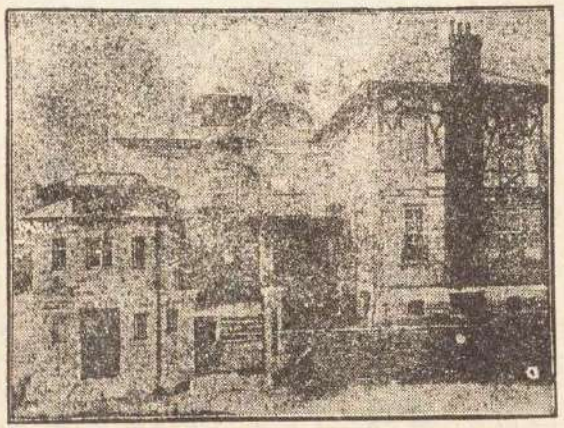
東上野公園下 東京谷前 金の星出版部 振替電話 東京六一七〇一番 下谷六八二三番

天下の青年は何故に爭ふて **大日本國民中學會に入會する乎**

講義が新いから
會費が廉いから
指導が良いから
學制が正いから
基礎が固いから
講師が善いから
卒業が早いから
成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 澁澤榮一 理學博士 山内繁雄 新渡戸博士 三宅博士 井上博士 浮田博士 岡田前文部大臣

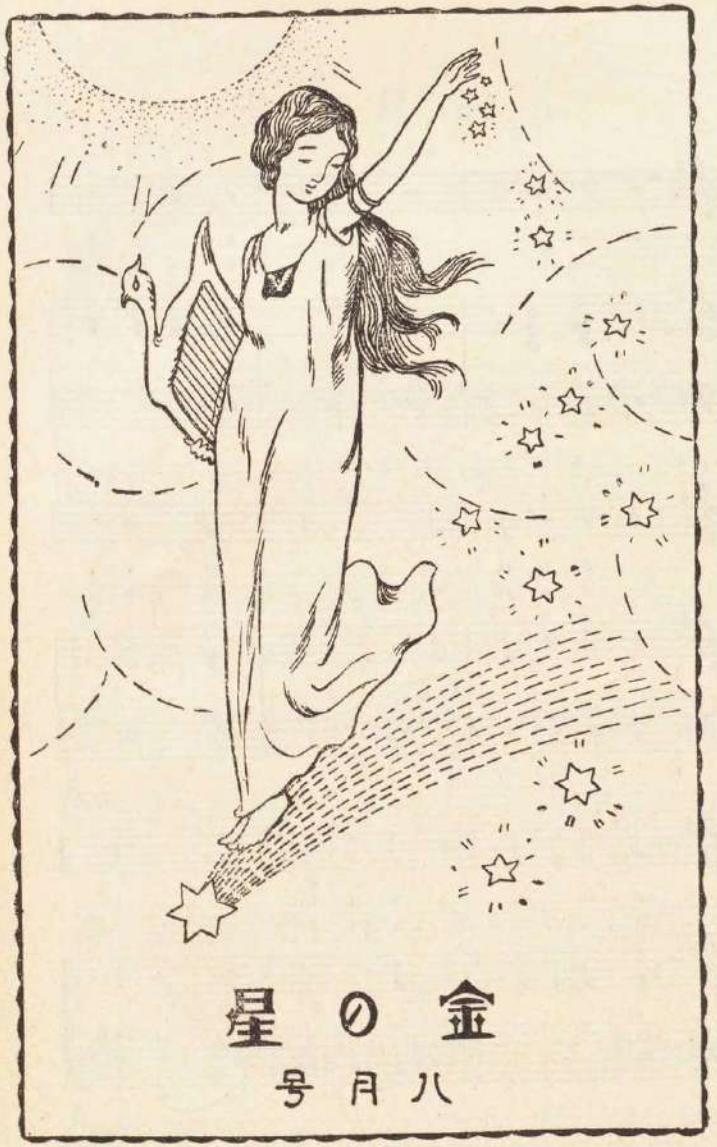


一人前の男となるには
どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育、學力のないものはどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケ敷い。俳し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

創立以來二十一年 記念大特典提供 目下新學期開講 **入會の絶好機**

講義錄一本つき
規書無料進呈



雨情先生の童謡教育論

定價四十錢 送料二錢

（最新刊）

「童謡の正風とはどんなものか、教育上どれだけの効果があるか」といふことを正確に知るには、童謡教育の創始者である、野口雨情先生の述べられた本書によるより外にありません。

本書は四六判七十頁の小册子ではあるが、よく童謡の眞髓を極め誰にもわかる樣に一々實例を擧げて說かれてあります。

野口雨情先生序
高野盛義著
童謡踊りの指導
作曲
定價一圓廿錢 送料六錢

粟野柳太郎著
野口雨情先生補遺
童謡教育の新研究
定價一圓廿錢 送料六錢

雨情先生序
黑田正著
童謡教育の實際
價一圓廿錢 送料六錢

著者は童謡教育に就いて教育會より表彰された人、從來盛んに實際と理論とのそつのない築績だけを發表し、指導上より獲た生きた經驗なり、世界の研究資料に供したものである。

雨情先生序
童謡研究部編
兒童童謡
傑作撰集
ゆきぼうし
定價七十錢 送料六錢

本居、中山兩先生曲譜八面初山冬木兩氏童謡畫十一葉。東京を初め全國の各大家と、全國の若き作家たちの敢て世に問ふ傑作を集めたもので、「童謡私觀」の二論文と、二百餘利の童謡圖書が附いてあります。

正午社編
純童謡
傑作集
影繪のお國
價一圓廿錢 送料六錢

小學兒童がふだんの生活をうたつた土の詩である。土の上から生れて來たものでなければほんたうの日本の童謡とは言はれません。小供達はかういふ童謡を見なくてはなりません、本文中には兒童書が澤山あります。

藤田紫水編
新作
童謡
銀のつぼ
定價九十錢 送料六錢

著者は永い間教育界に居て子供達を指導する爲めに新作された二百餘編が本書である、童謡を作らうとするものには絶好の參考書である。

雨情先生序
兒童童謡作曲部編
若柳校
童謡集
蝙蝠の唄
定價九十錢 送料六錢

斯界の大家雨情先生曰く、今日迄に日本國中を通じて若柳安の童謡ほど傑出した者はない、と。眞に本書は全國兒童の創作として第一に發表された大膽な童謡集である。

雨情先生序
松波正著
童謡と
曲畫集
玉虫と人形
定價一圓 送料六錢

山田耕作先生曲 露谷虹兒先生裝幀、貴族的ふるゝ五十編の童謡とオフセット印刷の挿畫數十枚と、作曲とが入つて居るから子供さん方には勿論、先生方にも一般童謡愛好者にも最好の良友である。

須川敎太郎先生序
松波正明編
課外の
童謡のお話と劇
定價七十錢 送料六錢

著者は在來の童謡集に慊たらず、それに關連せる童謡を一作し、兒童及一般父兄の爲めに面白く童謡趣味を吹せ、と意を用ゆ。其の今日の學校教育と造ひ、兒劇に至りては無趣味なる今日の教育にして大いに人情美を發揮す。

川須正明曲
可愛らしい
童謡のお話と劇

發行所 東京市神田區錦町一ノ一番地 振替東京五二三三九番 米本書店

三日月さん

本居長世作曲

Andante[M.M.♩=144]

やまのうへのみかづき
やまのうへのみかづき

さんはほそいこ
さんはほそいこ

やなぎのはよりもほそい
つむいだいとよりほそい

こーさすすきーにー
こーさすすきーにー

きられたすす
きられたすす

きーにー きられた
きーにー きられた

三日月さん

野口雨情

山の上の　三日月さんは
細いこと
柳の葉よりも
細いこと
薄に切られた

薄に切られた
山の上の　三日月さんは
細いこと
つむいた糸より
細いこと
薄に切られた
薄に切られた

猫の居る村

沖野岩三郎

紀州の海岸に軍藏といふ船頭がありました。或日の事自分のお船に木炭を一ぱい積込んで、それをお隣りの國へ運ぶために、元氣よく港を船出いたしました。

其日は大變い、天氣で、浪も穩かでしたから、軍藏は船に帆を張つて、鼻歌を歌ひながら炭俵の上に胡座をかいて、變り行く美しい景色を眺めてゐました。

やがてお船は潮の岬といふ浪の荒い所へ差かゝりました。すると俄かに西風が強くなつて、お船は木の葉のやうに浪に飜弄られ始めました。で、軍藏は周章て帆を卸しました。そして一生懸命に櫓を押してゐましたが、どうしても思ふやうにお船をやる事が出來ません。

『なァに、これしきの浪を押切れないといふ事があるか。』

自分で自分を勵ましながら、一生懸命にお船を漕いでゐましたが、不圖氣づいてみますと、自分のお船から五六間向ふに、大きな千石船が見えました。と、同時に、

『あぶなーいッ！』と呼ぶ聲が聞えました。

軍藏は衝突させては大變だと思つたので、自分のお船を右の方へ方向を轉じようとしましたが、波が高いので思ふやうになりません。

彼是するうちに千石船はもう二三間向うに見えました。

『あぶなーいッ！』と呼ぶ聲が二度目に聞えた時は、もう軍藏のお船と千石船とは、どすんと！　打ッつかつてゐました。

見る〳〵お船が海の中へ沈んで行くので、

『助けてくれえ……』と叫んで、千石船の方を見ますと、千石船もぐつと左の方へ傾いでゐました。帆柱の上に二三人の船頭が攀ぢ上つて、軍藏と同じやうに、

『助けてくれえ……』と呼んでゐました。

軍藏は水泳が達者でしたから、拔手を切つて泳ぎました。けれども山のやうな大浪が襲つて來る度に一間も二間も水底に沈められるので、何度も何度も、もう駄目だと思ひました。

其のうちに少しく浪が靜になつたので、さァ今のうちに岸へ泳ぎつかねばならないと思つて、軍藏は一生懸命に泳ぎましたが、もう腕が疲れてどうする事も出來ませんでした。

『あァ悲しい事だ。もう此所で死ぬのか知ら？』と思つて泳いでゐると、眼の前に黑いものがチラリと見えました。

『何だらう？』と思つて手を伸しますと、それは幅一尺長さ一間程の板でありました。

軍藏は思はず『しめた！』と云つてその板に取縋らうとしましたが、板の上には口髭の長い眼のキラ〳〵光る者が、四つの足を踏ん張つて、ぢつとこちらを眺めてゐました。

吃驚したのは軍藏でした。けれども其の板に取縋らないなら、自分は溺れて死んでしまふのだと思ふと、たとへそれが、どんなお化であらうと追ひ除けて、その板を自分のものにしなければならないと思つて、勇氣を出して泳ぎ寄つて見ますと、板の上に乘つてゐるのは一疋の鼠でした。

『鼠か？　馬鹿に大きく見えたのは、俺の眼の迷ひであつたか……鼠、俺にその板をおくれ、ね、頼むよ。』

軍藏はさう云つて、右の手を板にかけると、板は一尺ばかり水の中に沈んで、上に乘つてゐた鼠は波の上に浮かされて、小い四つの足で水を搔きながら必死に泳いでゐましたが、偶と氣づいたやうに、軍藏の頭の上に、ごそ〳〵と這ひ上りました。

『ひやァ！　氣味が惡い。それだけは免してくれ！』と言つて軍藏は頭を掉りましたが、鼠は一生懸命に軍藏の髮を攫んでゐるので、掉つても振つても鼠は海へおつこちませんで

した。

岸の方では村の人達が多勢出て來て、

『難船だァ、難船だァ、助けてやれと……』口々に呼んではゐるが、あまり波が高いので、誰一人船を漕ぎ出さうとする者もありませんでした。

彼これするうちに、黒いものが岸の所へ打ちあげられたので、

『人だ人だ！　人が打揚げられたぞ！』と云つて五六人の若者が、走つて來て其處に打揚げられた男を抱き起しました。

男は軍藏でした。軍藏はもう半分死んだ人のやうにへとへとになつて、物も何も言へませんでした。

『軍藏だ、軍藏だ、隣村の軍藏だ！』と一人の若者が言ひますと、

『さうだく、おゐい軍藏、しつかりしろ！』と言つて一人の若者が、軍藏の背を力任せに一つ殴りました。その時軍藏の背中で、ちゆ、ちゆと鳴いたものがありました。けれども若者は何とも思はないで、又た、

『おゐい、軍藏、しつかりしろ！　もう岸へ打揚げられたのだぞ！』と言ひますと、始めて氣づいた軍藏は、

『鼠は、鼠は……』、と言つて自分の頭を頻りに撫でました。

『何を言ふんだい、海の中に鼠が居るものかい？　お前は今海から波に打揚げられたのだぞ！』

若者は軍藏の肩を搖ぶりながら言ひました。恰度其時、軍藏の頸筋のところへ、着物の中から大きな鼠がぬつと顔を出しました。

それを見た若者達は本當に吃驚しました。皆なキャーツ！と言つて逃げ出さうとしますと、一人の老人が其處へ來て、

『吃驚するには及ばぬ。それはあの十石船に棲んでゐた鼠だらう。二艘のお船が破れて沈んだ時、鼠一疋と軍藏一人とが助かつたのだ。大事にしてやれ、大事にしてやれ。』と申しました。

若者達も始めてワケが解つたので、

『おゐい、軍藏さん、鼠も助かつたぞ。お前も助かつたぞ。確かりしろい！』と言ひますと、軍藏も安心したやうに、

『さうですか、俺は鼠の乗つてゐた板を奪つたのだが、鼠も助かつて呉れたか、それで安心した』と申しました。

それから軍藏を村の家へ伴れて行つて着物を着換へさせましたがその鼠は軍藏の頭に載つかつたまま、ちつとも逃げませんでした。

鼠は軍藏が着物を着換へると直ぐ、頸筋の所から、背中へもぐり込んで、時々襟の所や袖口の所から可愛い頭を出して外を眺めてゐました。軍藏は人間に物を言ふやうに、

『おい鼠！　お前と俺とは不思議に生命を助かつたのだ。これから俺と一緒に仲よく暮さう。俺はお前の友達になるぞ。』と申しました。

軍藏が生命を拾つて村へ歸りますと、村の人達は、

『軍藏さん、よくまア助かつたものです、お目出たうございます。』と云つて、多勢お見舞やらお祝ひやら解らない挨拶に來ました。すると軍藏は鼠の乗つかつてゐた板に縋つて生命を助かつた事を詳しく話して、

『この鼠と俺とは不思議に生命を拾つたのです。どうぞ皆さん、俺の無事を祝つて下さると同時に、この鼠のためにも祝つてやつて下さいまし。』と申しました。

それを聞いた村の人達は、軍藏の優しい心に感心して、其後この村では何所の家にも決して猫を飼はない事にしたといふ事です。（をはり）

ドン・キホーテ繪物語

（一）

水島爾保布

むかし、イスパニヤのラ・マンチヤといふ村にアロンザ・クイザノといふ讀書好きの紳士がありました。讀書好きにもいろいろありますが、この人の好んで讀む本といふのは大昔の騎士たちの事を書いたもので、それには光り輝く鎧甲に身を固め、たてがみの長い駿馬に跨がつた武者修行の騎士が、惡漢共を打ち平げ、妖怪變化を退治したり、お姫樣を助けたり、……その外さまざまの勇ましい物語が敍述してありました。

老紳士は毎日毎日かういふ本ばかり讀みつゞけてゐるうちに、いつしか其物語にあるいろんな光景が、活動寫眞のやうに目の前に現はれて來るやうになりました。しまひには、カーテンの風に搖れるのを魔法つかひが來たといつて、劍をぬいたり、壁にうつる自分の影を敵の勇士だといつて槍を振つたりするやうなことが幾度となくありました。

（二）

老紳士は自分で自分の武勇にすつかり感心して、さうして到頭『わしも一つ武者修行に出よう。』と思ひ立つやうになりました。

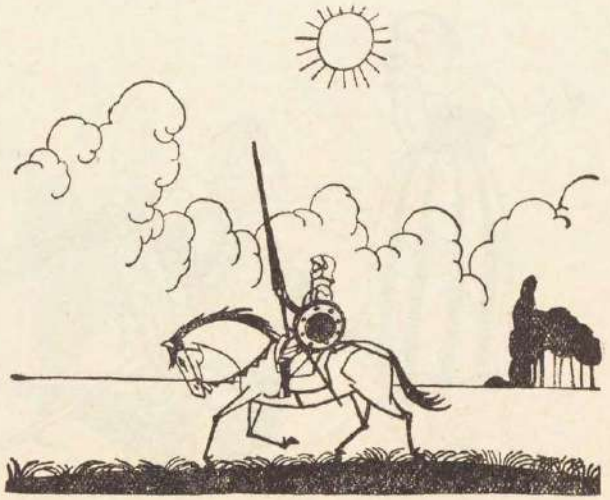
老紳士の家には三代ばかり前のお祖父さんがつかつたといふ古い鎧や兜がありました。それら廣には一疋の老耄れた痩せ馬がつながれてありました。老紳士はその鎧を體につけて、先かう名乘りをあげたのであります。

『ラ・マンチヤの住人ドン・キホーテとは我事なり。』

そしてその痩せ馬の平首をたゝきながら、

『今日より汝を愛馬ロシナンテと呼ばん。』と、嚴に申しきかして、『これでよろしい。……が、古への騎士には必ず美しい一人の姫君があつて、その姫君の爲めに惡魔の城へ乘り込んだり、惡漢共と大格闘をしたりすることになつて居る。わしも騎士になる前に、一人の美しい姫君を見つけなければ本式でない。』と、氣がつきました。

ちやうど近邊の百姓家にロレンゾといふ可愛い娘があつたので、それをタルシニア姫と呼ぶことにしました。



三

鎧兜に身を固め、圓楯と長槍をたづさへて、愛馬ロシナンテに打ち跨り、勇氣凜々として朝まだきに家を出たドン・キホーテは、武者修行第一の記錄を飾るにふさはしい大きな手柄を立て、さうして、正式に騎士の位を受けなければならないと、どこへといふ目的もなく廣い原つぱを只ひたすら急ぎに急ぎました。

時はちやうど七月中ばの炎天で、太陽は頭の上からカンカン照りつけました。

ただでさへ重い鎧甲はまるで火のやうに熱くなりました。

ドン・キホーテの體からは瀧のやうに汗が流れました。まるで茹でられるやうな今にも目が眩みさうな氣持でしたが、かういふ苦しみを耐えるのも騎士の資格を得る一つの試驗だと考へて、フーフーいひながら我慢をしました。かうして暑さに苦しめられた上に、長い夏の一日を飲まず食はずで歩きつゞけたので、流石のドン・キホーテも、愛馬のロシナンテも、その日の夕ぐれほとほとヘトヘトになつて了ひました。

(四)

よろよろになつたロシナンテを勵しながら倘行さますと、遙か彼方にあたつて、構へ嚴めしい一つの城廓が見えました。

『愛馬ロシナンテよ。今宵の宿は近づけり。急げ！』

と、ドン・キホーテは急に元氣づいて、人形芝居の豪詞のやうな句調でいつて、ポンとそのロシナンテの腹腹を蹴てさて、ゲイと反身になつて手綱をかいぐりました。

ちやうどその時城からは、その昔の物語にある通り、騎士の到着を迎へる合圖の角笛が聽えて來ました。

ドン・キホーテが城廓と見たのは小商人や馬方などが泊る安宿で、それから角笛ときいたのは、夕飯の仕度を知らせる合圖のラッパだつたのでありました。

けれども、ドン・キホーテはどこ迄もそれを城だと思ひ角笛だと思ひ込んで居りました。

そして、その安宿の店先に立つてゐる二人の女中は、城主がいひつけられて自分を迎へに出て來た高貴の婦人だと信じたのでドン・キホーテは馬から下りて威儀を正して挨拶をしました。（つゞく）

ヂェラール中尉の冒險談

長篇

牢破り

西條八十

前號の梗概。佛國騎兵ヂェラール中尉は英國軍のために捕へられて、遂に英國のダートムーアの牢獄につながれる事になりましたが、どうかして牢を破つて出たいと相棒の、砲兵少尉のボーモントと機會をうかがつてゐました。

三、腰拔武者

牢やぶりに都合のいい機を、今日か明日かと狙ひながらも、

僕は心の中でなほ二三日の前に横はつてゐる困難を切りぬける方法を考へてゐた。第一は牢を破つてから首尾よくおもてへ逃げ出すまでにどうしても越さねばならぬ二重の石塀だ。

まづ内側の石塀は煉瓦で出來てゐて、高さが二間ほどあり、そしてつるべんに尖つた鐵の杙がズッと植ゑてある。外側の石塀は、運動場の門が明いてゐた時に、一二度チラリと見かけただけだが、高さはほゞ内の塀と同じ位らしく、やつぱり上に鐵の杙が植はつてゐた。

それでこの二つの塀の間の距離は、四間ほどもあらう。もつともこの間には、門の處にしきや番兵は居ないのだ。だが、いよいよ二つの塀を越した外には、大勢の英國兵が隊をなして絶えず見張つてゐるのだ。諸君！察してくれたまへ！この蟻の這ひ出る隙間も無い嚴重なかためのなかを、僕が赤手空拳でもぐり出ようと云ふのだ——。

いろ〳〵と腦味噌を絞つたあげく、僕はまづ相棒のボーモントの背高なところに目をつけた。この先生の身丈は、少くとも六尺餘はあるから、もし僕がこの男の肩へ乘つて石塀の鐵杙さへ握ることが出來れば、塀は樂々と越せやうと云ふもの

だ。だが、それからどうする？　どうやつて今度は殘つたボーモントを引上げる？これは至極厄介な問題だつた。

男子の意地としても、自分だけ一人助かつたからと云つて、相手をのめ〳〵そこへ置き去りにすることは出來ない。若し自分だけは塀を攀つて、ボーモントが後に續かなかつた場合には、僕の氣象としては、あきらめてもとの牢獄へ歸るよりほか仕方がない。で、僕はこの事を何よりも氣にしてボーモントに豫めいろ〳〵と相談したが、彼はどう云ふものか大して苦勞にもしてゐない樣だつた。それで、僕は、これは奴さんに何か別なうまい工夫があつてのことだらうと解した。

それからもう一つ殘る重大な問題は、夜、どの番兵が窓下に來てゐる時刻に逃出さうかと云ふことだつた。この選定はなか〳〵大切なことだつた。番兵は夜中二時間毎に交代して不寢番を務めるのだが、それを毎夜窓から眺めてゐると、おなじ役目をつとめてゐても、かれらの間に非常な違ひのあることがわかつた。ごく眞面目な奴になると、お役目大切と瞬きもせず見張つてゐるから、鼠一疋でも見咎められずに運動場を通り過ぎるわけには行かない。と　ろがなまけものになると、銃を寢臺かなんぞのやうに心得て、それに凭れて早速、前後構はぬ大鼾で寢込んでしまふから、たいへん始末がいい。中でも殊に一人、肥つた豚のやうな番兵は、いつも來るなり石塀の蔭へ行つて、役目の間二時間たつぷりをさも氣持よささうに眠込んでしまふのだつた。僕は一二度窓から漆灰のかけらを彼の足下へ抛つて見たが、一向白河夜舟だつた。しかも仕合せなことにその番兵の來るのは、眞夜中の十二時から二時までと云ふ屈竟な時刻なのだ。で、僕はこの番兵の時刻を牢破り決行の時刻にすることに決めた。

愈々萬事の手筈が定まると、僕はむやみに、神經が昂奮して、一寸でもヂットしてゐられない氣がした。まるで籠の中の廿日鼠かなんぞのやうに、室の中を走り廻つてばかりゐた。何かの拍子で、欽め込んだ煉瓦が崩れ落ちて番兵に氣付かれやしまいか、誰か窓の外を通つて、漆喰のかけらがこぼれおちるのを變に想やしまいか、さうして大事が破れるやうなことはあるまいか、そんな事ばかり恐ろしく氣になつてきた。

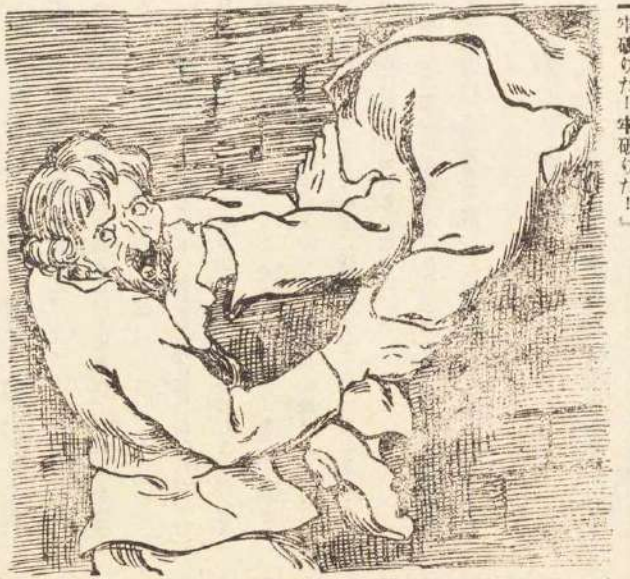
ところで相棒のボーモントはと見ると、かれは寢臺の端に腰をかけて、なにかしきりと深い思案に耽る體であつた。時

時横目で僕の顔を見ては、せつせと指の爪を嚙んでゐた。
『おい、しつかりせい。一月經たぬ間にわれ〳〵はもとの古巣へ戻れるんだぜ！』と、僕はかれの肩を敲いた。
『ウム、そりやあ結構だが……』
と、かれは至つて氣の浮かない調子で、
『だが、ここを脱け出てから、君はどつちの方へ逃げるつもりだね？』
『海岸へさ。』
と、僕は答へて、
『精神一到何事か成らざらん。僕等はまつすぐに聯隊へ歸らうぢやないか。』
『何だね君は聯隊よりも窖の方へ眞直に行きさうだよ。』
ボーモントは顔もあげずにかう云つた。これまで牢破りを企てて失敗した連中は、伴れ戻されるが最後、今度は窖へ抛り込まれるのだつた。そして彼等は、じめ〳〵した黴臭い地の底で、日光も仰がず、土龍のやうに暮さなければならなかつた。ボーモントは僕に向つてこれをほのめかしたのだつた。
『苟くも軍人が一度「進め」と號令をかけたからには、後を振向くことは許されない。今となつてそんな事を云ふのは君のやうな腰抜武士だけだよ。』
僕はすこし癪に觸つたから、直ぐかう云ひ返した。
するとボーモントの土色の兩頰には急にサッと血の色がのぼつた。明かにかれは立腹したのだつた。と、彼は矢庭に傍に在つた水瓶に右手をかけた、――僕に投付けでもするやうに。――が、直ぐにまた思ひ返したらしく手を離して、床のうへに蹲まつた。さうしてボツリボツリ再び爪を嚙み出した。
僕はヂッと流目にこの實にわけの解らない男の樣子をしばらく見まもつてゐた。神ならぬ身の僕は、この時どんな恐ろしい企みがこの獸のやうな男の胸に生れてゐたか夢にも知らなかつたのだつた。

四、ギヤーツといふ悲鳴

たうとう大事を決行する夜が來た。日暮から少し風立つてゐたが、夜が深むにつれ、風はだん〳〵はげしく吹きすさびはてはおそろしい疾風となつて、ダートムーアの廣い野いちめんを荒れ狂つた。窓から眺めると、大空には一點の星かけ

も見えず、眞黑な雲が縱横に吹き飛んでゐた。
やがてザーッと音をたてて、盆を覆へすやうな大雨が降つてきた。はげしい雨のひびきと、吼え狂ふ風の音とで、窓下を歩く番兵の靴音も聞えなかつた。
『あいつらの足音がおれに聞えないとすれば、おれの方の音もあいつらの耳に入らないわけだ。』
かう僕は考へて、直ぐにも、窓から脱け出たかつたが、むりにぢつと押へて、まづ看守の夜の見廻りが濟むまで待つてゐた。
看守の髭面が例の窓格子からチット内部の樣子をのぞいて、それなりコッ〳〵廊下に靴音をさせて行つてしまふと、あとは再び風と雨の世界になつた。
おもての闇の中を窺ふと、番兵の影も見えない。たぶん暴風雨を避けて何處その隅っこにもぐり込んでゐるのであらう。
『この時だ！』と僕は思つた。
そこで手早く窓の鐵棒を引外し、煉丸をとりのけた。さうして、まづ先に抜け出すよう手眞似で、ボーモントを招いた。
『イヤ僕は後がいい。』
と、かれは妙に尻込みした。
『なぜだい？なぜ先に出ないんだ？』
と、僕が訊ねると、
『君にやり方を見せて貰つた方がいいから。』
と、彼が答へた。
『ぢやあ蹤いて出たまへ。だが、音を立てないやうにだぜ、大切な場合だから。』
かう彼に云つた時、僕は闇の中で彼の齒がカチカチぶつかり合ふ音を聞いた。で、僕は今までこんな命がけの仕事をやるのに、こんな臆病者を相棒にした者があつたらうかと疑つた。
しかし、今はすこしでも猶豫する場合では無い。僕は例の鐵棒を右手に握り、腰掛けを踏臺にしてまづ首と兩肩とを窓の穴に突込んだ。それからいろ〳〵に身體をねぢつて、やつとのこと腰の邊までおもてへ潜り出たと思ふ途端、何思つたか相棒のボーモントはいきなり後から僕の兩脚を押へた。さうして大聲で嗷鳴りたてた。



「牢破りだ！牢破りだ！」

諸君！この時の僕のびつくりさ加減を察してくれたまへ！もちろんこの驚差に、僕はボーモントの心中の惡企みをのこらず見てとつた。かれは僕と腹を合せて牢を破ると見せかけて、實はその途中で僕を擒まへ、それを手柄に申し立てて、うまく英國軍から放免されようと最初からもくろんでゐたのだ。

僕はボーモントを薄野呂とも憶病者とも思つてゐたが、まさかにかうした心からの卑劣漢とは考へられなかつた。

どうせかうなれば破れかぶれだ。僕は夢中になつて、彼に押へられたまま、もとの窓の中へもぐり落ちた。さうして眞暗闇の中で、奴の胸倉をとると、右手に持つた鐵棒で、奴の横面とも想はれる邊を、力一つぱい、二度ほど殴りつけた。

最初の一撃で彼は足を踏んづけられたドラ猫のやうなギャーッといふ悲鳴をあげたが、二度目に擲りつけると、ウーンといふおそろしい呻き聲を立てて、バッサリ床の上に倒れてしまつた。

僕は兩腕をしつかと拱いたまま寢臺の上に坐つた。さうして今の聲を聞きつけた番兵が駈けつけて來て、それからどんな重い刑罰が自分の上に加へられるか、觀念した氣持でチッと待つてゐた。（つゞく）

海の怪

長田秀雄

相模灘の濃い藍色の潮を抱くやうに腕をひろげた三浦半島のあるところに起つたお話です。

花子さんはお父さんや、お母さんと一緒にその海邊へ避暑に行きました。從姉の弓子さんとその妹の幸子さんも一緒でした。

八月ももう末になつて、避暑に集まつた東京のお客さんたちはぼつぼつ引上げはじめました。

花子さんの一家族は、そこで一番古い旅館に陣取つてゐたのです。一パイだつた旅館が段々空間が多くなつて淋しくなつて來ました。

ある晩、花子さんたちが夕御飯をすますと、お父さんとお母さんとは、東京へ歸る日取の相談をはじめました。

どうした譯か、花子さんは、東京へ歸りたくないのです。默つて凝乎とお父さんやお母さんの話をきゝながら、また、花子さんは、あの恐い漁師のお爺さんの事を考へてゐます。

そのお爺さんを見ると、花子さんは何時も顏色を變へます。そして、急いで逃げて歸るのです。

どう云ふ譯で、花子さんは、そのお爺さんをそんなに嫌ふ

のでせう――お爺さんは、五尺ない位の小男です。そして、片眼でした。

花子さんは、そのお爺さんの片方の死んだ魚の眼玉のやうな眼で、凝乎と見つめられると、もう足がすくんで動けなくなるのです――それでゐて、この海邊から離れたくはないのです。

お爺さんは一人者でした。海岸の磯馴松の並んだ砂丘の後の漁師小屋にたつた一人で住んでゐました。誰もこのお爺さんの生れ故郷や素性を知つてゐる者はありませんでした。

村の人たちにきくと、誰でも同じ事を答へます。

『あゝ、あの漁師小屋の爺がね。あれや變屈者で仕様がねえだ。三十年ばかり前の秋の大嵐の晩に、この沖で艇船が一艘沈んだだ。その時、あの爺一人助かつて濱へ流れついただ。』

とかう云ふのです。

だが、海の事にかけてはお爺さんはまるで神さまのやうでした。魚の群が何處に來たか今日の天氣はどうだか――そんな事ならお爺さんは掌をさすやうによく知つてゐました。

そこで村の漁師たちは、この身よりのないお爺さんを、海岸の小屋に住ませて、魚の群の見張りをさせて置いたのです。

花子さんはこの海邊へ來た翌日、海水着をきて、お父さんやお母さんや從姉たちと一緒に、大よろこびで海へ入つたのです。その時ふと顔を上げてみると、沙濱の中央に、ぬつと、突出した大きな岩の上に、そのお爺さんが木像のやうに身動もしないで、つゝ立つてゐたのを見たのです。

死んだ魚の眼玉のやうな氣味の悪い眼は凝乎と花子さんに注がれてゐました。思はず花子さんは聲を上げて、お父さんに抱きついてしまひました。

『何だ――恐い。』とお父さんは、海に馴れない花子さんが浪を恐がるのだとばかり思つて、にこにこしながら抱いて下さいました。――それからと云ふものはお爺さんの氣味の悪い顔は、花子さんの心にしみついてしまひました。

花子さんの一家族は、毎日、日ざかりに海に入りました。花子さんは、それから一度もお爺さんの顔を見ませんでした。すると、それから十日ばかりたつて、ある夕方の事です。花子さんは、濱で遊び疲れて、一人で、とぼとぼ、家の方へ歸つてゆきました。夕陽か恰度、海の中へ、沈まうとしてゐたときです。金と紅とに輝く旗のやうな長い雲が、水平線のところに、たなびいてゐました。海の水は、氣味の悪い程靜かに、夕陽の光りを反射してゐました。物の蔭影が長く長く、地にうつつてゐました。

花子さんは、其時、磯馴松の太い幹の蔭に、一軒の茅屋を見つけました。あたりには、人の陰も見えません。しいんとした、氣味の悪いほどの靜かさです――花子さんは、いふにいはれぬ、淋しい心持になりました。

『お母さん。』と花子さんは、泣き聲を出して、我れ知らず叫びました。すると、その途端に、茅屋の戸が、ふいに開きました。そして、その中から、例の氣味の悪いお爺さんが、顔を出しました。死んだ魚の眼のやうな眼で、お爺さんは、花子さんを凝乎つと見つめました。恰度、鷹に掴まれた小鳥のやうに花子さんは、ハッと思ふと一緒に、身動が、出來なくなつてしまひました。

お爺さんは、やがて、煙草のやにで、黄色く染つた口を開けて、

『お嬢さん。私と一緒に、海へ

行かないかね。きれいなところを、見せてあけるよ。』といひました。そして、ニヤリと笑ひました。

花子さんは、恐くて恐くてたまりませんでした。大きな聲なのけて、お父さんや、お母さんを呼びたいと思ひましたか、これはまたどうしたのか、喉がかれふさがつたやうで、ちつとも聲が出ません。冷たい汗が、額からタラ〳〵と流れて來ました。お爺さんは、家の中から出て、花子さんのそばに、寄つてきました。そして、花子さんの、肩をむづと、荒荒しく攫みました。

『どうだ、一緒に行くか。行かないと、お前は、ひどい目にあはなきやならないぞ。』

お爺さんの眼は、凄い光りを放ちました。花子さんは、ただふる〳〵震へて、まつ蒼な顏をしてゐました。

その時、遠くから、從姉の弓子さんと、幸子さんとの聲で、『花子さん。』と叫ぶのが聞えました。二人は、花子さんの歸りが遲いので、心配して、探しに出て來たのです。

その聲を聞くと、お爺さんは、さも忌々しさうに舌打ちをして、

『とんだ邪魔がはひりやがつた。でも、これつきりぢやすまないよ。この次に、また會ふからな。』かういつて、お爺さんは、家の中へはひつてしまひました。

弓子さんと、幸子さんにつれられて、家へ歸つた花子さんは、その晩から、ひどい熱が出て、二日ばかり、寢てゐました。

花子さんは、怪しいお爺さんの事ばかり考へて暮らすやうになりました。

あの時、お爺さんが見せてやると云つたきれいな處と云ふのは、何の事だらう——かう思ふと、花子さんは、恐い恐いと思ひながらも、あの時、お爺さんにつれられてそのきれいな處へ行つて見たかつたと云ふ氣がしないでもありません。金と紅との横雲の輝きがしみじみと思出されてきたのです。かうして花子さんの心は、段々深くなつて行きました。

お父さんやお母さんは、花子さんが沈んで行くのを見て、心配して訊ねましたが、花子さんは、決して怪しいお爺さんの話をしませんでした——もし、お父さんやお母さんに話したら、恐ろしい罰が來やしないかと云ふ心持がしたからです。

花子さんのお父さんとお母さんとが、東京へ歸る相談をすまして、寢床に入つたのは、もう十二時近くでした。

避暑地の夜は淋しくふけて行きます。月があかあかと輝きわたつて虫の音が何處からとも知れず響いてきます——花子さんはどうしても寢られませんでした。死んだ魚の眼のやうな片眼で凝乎つとこつちを見つめてゐるお爺さんの顏形をまじまじと大きな眼を見張つて何時までも心の底に見てゐました。何時となくだうだうと浪の音が響いてきます。あたりは死んだやうに靜かです。金と紅との横雲の輝きをうけて、怪しいお爺さんは活動寫眞のやうに花子さんの心の内でにやりと笑ひました——花子さんはぶるぶると身顫ひをしました。

夜が明けました。

お父さんは朝御飯を食べながら、

『さあ、明朝は東京へ歸るんだぞ。さぞ暑い事だらうな。』と云ひました。

『まだねえ——何しろ東京は殘暑がきびしう御座んすからねえ。』とお母さんが答へました。

花子さんは何だかそこに落付いてゐられないやうな氣がしてきました。もしこのまゝ、お父さんやお母さんと一緒に東京へ歸つてしまつたらあの執念深いお爺さんはきつと追ひかけてくるに違ひないと思つたのです——これはどうしても、もう一度あのお爺さんに會つて、よく話をしてからでないと歸れないと花子さんはかう考へをきめて、そつと家を飛出しました。恰度お母さんは髪を結つてゐらつしやるしお父さんは横になつて新聞を見てゐらつしやいました。從姉の弓子さんと幸子さんは、裏の方で唱歌をうたつてゐました。

花子さんがまつ蒼な顏をして磯馴松の傍のお爺さんの小屋のところへ行きますと、誰とも知れず後からむづと花子さんの肩をつかまへました。

『あれ、お母さん。』と泣聲を出して、花子さんは振返りました。それは例の怪しいお爺さんです。

『たうとうやつてきたな。』とお爺さんは齒をむき出してどなりました。花子さんは悲しさうな聲で、

『お爺さん、あたしたちは明朝東京へ歸るのよ。』と、かう云ひました。お爺さんはそれをきくと、また意味深く笑つて、

『お前は歸れない。』と、かう答へました。そして、

『まあ、こつちへお出で。約束の物を見せてやるから。』と云つて、花子さんの手をつかんでぐいぐい海の方へひつぱつて行きました。花子さんは、魔法にでもかゝつたやうに呆やりしてお爺さんに引つぱられたまゝ海の方へ行きました。

お爺さんは花子さんを濱の中央にぬつと突出した大きな岩の上につれて行きました。

その岩の一方は遠淺で誰でも泳ぐところで、一方は深い深い淵になつてゐます。

波は大へん靜かでした。白い夏の入道雲が藍色の水の上に牛乳のかたまりのやうな影を落してゐます。

『さあ、この深いところを凝乎つと覗いて御覽——何が見えるか。』と、お爺さんは恐い顏をして云ひました。花子さんは岩の上から海の中を見つめました。

黑いビロウドのやうな藻がひらひら底の方に見えます。その他には何も眼にとまる物もありません。

『お爺さん、何も見えなくつてよ。』

『今に見えるやうになる。』

少時すると、花子さんは海の底の方から浪の打ちよせる音にまじつて、何だか女の聲のやうな物がきこえてくるのを氣付きました。やがて、熱心に見入つてゐる花子さんの眼に白い透きとほるやうな物がちらちらと見えてきました。

『おや。』と云つて花子さんは岩の上から乘りだしました。

白いちらちらする物は、みるみる内に美くしい女の顏になりました。髪が海艸のやうに亂れて美くしい顏のまはりを取りまいてゐます。美くしい顏は血の氣もないのか、蒼白く澄んだ色をしてゐます。やがて、その女の顏はにこりと笑ひました。

花子さんはこの時、もう我を忘れて、

『お母さん。』と叫んだまゝ、ざぶりと海へ飛込んでしまひました。可哀さうに、花子さんはまだ泳ぎが出來ませんでした。みるみる中に、藻艸に手足をからまれて深い深いところに沈んでしまひました——あとには、幾重ともなく波紋の渦が湧きおこつてひろがつて行きました。

お爺さんはもうその時は、その岩の上には影も形も見えませんでした

この海岸の人たちにきいて御覽なさい、その岩には昔から魔の岩と云ふ名がついてゐるのです——誰でも、その岩の上から深い淵になつた方の海を凝乎つと覗いてみて、人の聲がきこえたり、蒼白い顏が見えたりしたら、もう、その人は救からない、きつと、死神にとられて死なゝければならないんだと、答へるでせう。

お爺さんがどうして花子さんをそんな恐ろしい處へつれて行つたか、何故花子さんが、お爺さんを恐がりながら、ついて行つたか、それは誰にも分りません。

花子さんの死骸は、その翌朝濱へ打上げられてゐました。

（九ほり）

樽の王女

三宅房子

一

ある國の王樣の御殿にあつたお話です。この王樣もよくお話にあるやうに、國はよく治り、お金は澤山にあつて、何一つ不自由のないお身分でしたが、たつた一つお子樣のないのがキヌでした。しかし、それも仕合せとお歳をとつてから、ひよつこり王女がお生れになつたので、大層お喜びになつて、その王女にカヌテーラ姫とお名をおつけになりました。

カヌテーラ姫はすら〳〵とお育ちになつてやがてそれは美しい、丈のすらりとした、氣高いお姫樣におなりになりました。

そこで、ある日王樣はカヌテーラ姫をお呼びになつて、

『お前はもう結婚をして身を固めなければならない年頃になつたのだが、私はお前が世界中の何よりも大切だし、またお前の仕合せになる事なら、何でもさせてやりたいと思つてゐるのだから、お前は自分で勝手に好きなお婿さんを選びなさい。誰でも自分に氣に入つた人を選んで、私を喜ばせておくれ。』

と、仰ぜました。

カヌテーラ姫はお父樣の親切な心づかいを大層ありがたく思ひましたが、自分は今結婚したくありませんから、もう暫くこのまゝ一人で置いて下さいと頼みました。

しかし王樣は御自分がだん〳〵、お歳をとり、また身體も弱くなつて行くのを、お思ひになつて、是非そんなことをいはずに、自分の生きてゐる間に後繼が見られるやうにしておくれとお頼みになりました。

カヌテーラ姫はお父樣があんまりお頼みになるものですから、

『では、お父樣、そんなにまで仰るなら、私は結婚いたします。その代りきれいで、利巧で、世界中の誰よりも、愛らしい人でなければいやですよ。』と、ぢやうだん混りにいひました。

しかし、王樣の方ではカヌテーラ姫の言葉をまじめに思つて、すつかり喜んでおしまひになつて、その翌日は、はやくから夜おそくまでお城の上に立て、下を通る人々を一心に見つめておいでになりました。どうかしていゝお婿さんを探し出したいものだと目をみはつておいでになつたのです。

すると、ある日のこと、美しい青年が通りかゝりました。王樣は急いで王女をお呼びになりました。

『早くおいで、それ、あそこを行く青年をご覽、いゝ若者ぢやないか。』

王樣は一人でお喜びになつて、家來をやつて若者をお城へつれて來させました。そして、すばらしい御馳走を出しました。若者はいゝ氣になつて御馳走になつてゐましたが、途中で大失敗をしでかしました。

お皿に乘つて出た桃果をほうばつてゐましたが、その内にひよいと口から飛出させてしまつたのです。そのまゝにして置けばまだよかつたのですが、人に見られては大變と、すばやく拾ひあげて、テーブル掛の下へかくしたのです。

間もなく御馳走が終つて、若者が歸つて行きましたので、王樣はカヌテーラ姫をお呼びになつて、『あの若者をどう思ふか。』とおききになりました。

『私はあの人を氣のきかない人だと思ひますわ。あの年をして、口から桃果を落すなんて。』と、王女はいま〳〵しさうに答へました。

王樣は王女の答をお聞きになつてがつかりしましたが、仕方なしにまた、お城の上に立つて、下を通る人たちを見ておいでなりました。

間もなく、また一人きれいな若者が通りかかりました。王樣はこれならよからうとお思ひになつて、王女をお呼びになつて、あの若者をどう思ふかとおきゝになりました。

『呼び入れてご覽なさいませ。どんな人かよくわかりますから。』とカヌテーラ姫がいふものですから、その若者を呼び入れてまたすばらしい御馳走を出しますと、若者はむしやむしむと食べたり飲んだりして歸つて行きました。その後で王樣は王女をお呼びになつて、その若者が好きかどうか、とおきゝになりました。

『好きになんかなれるものですか。外套を着る時に、二人も下僕に手傳つてもらはなければ滿足に着られないやうな人ですもの。そんな人大嫌ひです。』

王女はまたいま〳〵しさうにいひました。

『だが、そんな事で一々いやだといつてゐては、いゝ人がありはしないよ。お前は夫を持つまいと思つてゐるのではないだらうね。もう私は一々はいないから、誰でもいゝ、お前の好きな人をお婿さんにしておくれ。』

お歳をとつた王樣は、頼むやうに王女に仰いました。

『それでは、お父さま、どうぞ私のことにあまり心配なさらないで下さい。私は黄金の髮の毛をして、黄金の齒を持つた人があるまでは、決して結婚しない積りですから。』

カヌテーラ姫は、出來ない相談をいふつもりでこんな事をいつたのです。

王樣は王女がダゝばかり言つてゐるのにお腹を立てましたが、もと〳〵何でも王女のいひなりになつてゐる王樣のことですから、すぐとお布告を出して、『黄金の髮の毛と、黄金の齒を持つたものは申出でよ、その者に王女をお嫁にやり、王樣の後繼ぎにする。』と傳へさせました。

二

さて、お話し變つて　王様には恐ろしい敵がありました。その敵といふのはえらい魔術師で、王様のスキをうかゞつて國を亡さうとしてゐたのです。

魔術師は王様の出したお布告のことを聞きこんだので、すぐ様家來の妖精たちを呼び集めて、自分の髪の毛と歯を黄金にしろといひつけました。

妖精たちは大勢集りましたが、そんな難しい仕事はとても出來ませんといつてゐました。しかし、魔術師がどうしてもきかないので、いろ〳〵と工夫しましたので、その甲斐があつて、たうとう魔術師の髪と歯は黄金色になつて、そして　きれいな若者になりました。

若者になつた魔術師は、急いで王様の御殿の前へ行つて、目につくやうにぶら〳〵と歩いてゐました。忽ち王様の目に入りましたから、王様は王女をお呼びになつて、

『あれを御覽、お前のさがしてゐる人が行くから。』と、仰いました。

魔術師は自分が王様の目に入つたのを知ると、わざと急ぎ足に歩いて行き過ぎるやうなふりをしましたので、王様は驚いてお城の外へ出て呼びとめになりました。『そこを行く若者よ、暫く待つて下さい。あなたに話したい事があるのです。あなたは私の娘の婿になつてくれませんか。家來も大勢つけてあげるし、馬や下僕も入用なだけあげるから。』

魔術師は、はじめて立止りました。

『ありがたうございます。私も王女様をお嫁にいたゞき度うございます。しかし、王女様と一しよに人をつけて下さることはお斷りいたします。馬を一疋だけ下されば結構です。私と一しよに王女様をお乘せして、私の國へおつれします。國へさへ歸れば家來も下僕も大勢居りますから、王女様に御不自由をさせるやうなことはいたしません。』と、若者は丁寧にいひました。

しかし、王様は大事なカヌテーラ姫をそんな風にたつた一人で行かせる事には大層反對をなさいましたが、若者がどうしてもさうしたいといふので、たうとう若者のいひなりになつて、若者と王女を一緒の馬に乘せて出立させたのでした。

三

さて、その日の夕方、若者に化けた魔術師は、山の麓まで來ますと、自分だけひよいと馬からとび下りて、一軒のきたない厩へ馬を曳き入れました。

魔術師はびつくりして見て居るカヌテーラ姫を、おどすやうな目でにらみながら、今までとは打つて變つた樣子でいひました。

『私のいふことをよく聞け、私はこれから自分の家へ行つて來ようと思つてゐるのだが、そこへ行くには七年かゝるのだ。お前はこの厩の中で私の歸るまでぢつと待つてゐるのだ。お前の目には見えないだらうが、私の家來がお前を監督してゐるぞ。もし、お前が私のいひつけに背けば、どんな怖しいことになるかわからないぞ。』

カヌテーラ姫はいよ〳〵驚いてしまつて、うらめしさうに魔術師の顏を見ますと、今まで美しい若者だつたのが、鬼のやうな怖しい男に變つてしまつてゐるので、『あッ？』と聲をたてましたが、すつかり覺悟をきめて、

『ハイ、私はあなたの下僕ですから、あなたの仰る通りにいたします。しかし、あなたのお歸りになるまで私はどうして暮してゐたらいゝのです？』と、靜かに答へました。

『お前は馬の殘物を食べてゐたらいゝのだ。』

これが魔術師の答でした。そして、そのまま、王女を置ざりにして行つてしまひました。

あはれなカヌテーラ姫は、それからどうして暮してゐたでせうか。昨日までお城の中にゐて、何一つ不自由もなく暮してゐたのに、今日はむさくるしい厩の中に閉ぢこめられてしかも、食べ物といつては乞食でさへ食べないやうな馬の喰べ殘しです。どうして、そんなものが喉を通りませう。カヌテーラ姫はただ泣いて暮してゐました。顏は蒼ざめ、身體は次第に痩せ衰へて行くばかりでした。

そのまゝ幾月かたちました。

ある日のこと、カヌテーラ姫は何時ものやうに泣きながら自分の悲しい運命をなげいてゐますと、ふと壁の隙間からお日様の光が射し込んで來ました。

『おやゝ、こんなところに隙間があつたのか。』と思つて、カヌテーラ姫は何氣なく隙間から外をのぞいて見ました。其處にはきれいな花園がありました。おいしさうな果物や花が一ぱい花園にあるのです。

果物を見ると、お腹のすいてゐる王女はたまらなくなりました。

『あゝ、こゝから抜け出て、オレンヂや葡萄を思ふさま食べたい。私はもうどんなおそろしい事になつても構はない。これ以上に不仕合せになりつこはないのだから。』

王女は一人ごとをいつて、厩から抜け出て行きました。そして、思ふさま、花園の果物を食べて生き返つたやうに思ひました。

ところが、その時、ふいに魔術師が歸つて來たのです。それは王女の目には見えなかつたのですが、見張りについてゐた妖精が魔術師のところへ知らせに行つたからです。

魔術師はふるえる程怒りました。いきなり巨きなナイフを出して、殺してしまふとおどしました。

しかし、カヌテーラ姫は魔術師の足もとに身を投げ出して、『狼でさへお腹がすけば森の外へ出て行くのです。どうぞ堪忍して下さい。』と、あやまりました。

さすがの魔術師も、王女があまりやさしくあやまるものですから、たうとう我を折つて、『今度だけはゆるしてやる。だが、もしも二度と俺のいひつけに背いて、こゝから外へ出れば今度こそ命はないぞ。俺はもう一度行つて來るから、七年の間留守居をしてゐるのだ。』

魔術師はまた出て行きました。カヌテーラ姫はワア……とそこへ泣き倒れました。

四

それから一年たちました。

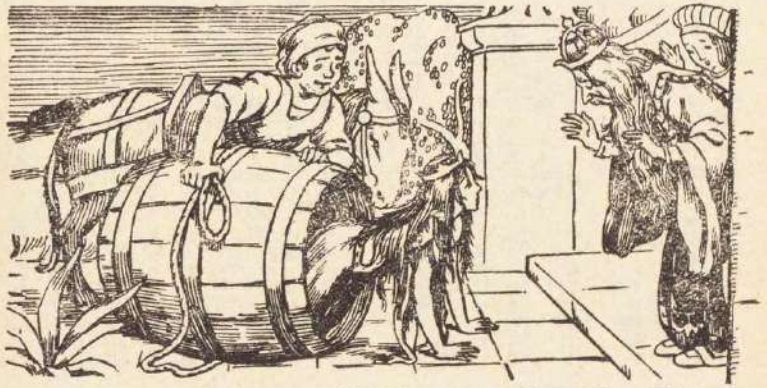
ある日のこと、一人の樵屋が厩の前を通りかかりました。この樵屋は始終王様の御殿へ出入りしてゐました。

カヌテーラ姫は例の隙穴から外を覗いてゐますと、顔を見知つた樵屋が行くものですから、思はず聲をかけました。

樵屋は自分の名を呼ばれたので、不思議に思つて厩の中に入つて來て見ると、痩せ衰へた王女がゐるので、はじめは鄙だかわかりませんでしたが、話を聞いてカヌテーラ姫であることがわかつたので、驚いて持つてゐた樵の中に王女を入れました。そして、知られないやうにそつと厩を出て行きました。

樵屋は驢馬の背に樵をのせて、急いで王様のお城の方へ行つたのです。

樵屋が御殿に着いたのは朝の四時頃でした。お城の門をどん〳〵とたゝきますと、番人たちが目をこすりながら出て來ました。見ると、いつも來る樵屋がたつた一人立つてゐるだけなので、



『何だ、貴樣か。どうしてこんなに早くやつて來て、俺たちの寢る邪魔をするんだ。』と、番人たちは怒つて叫ぶのでした。

『どうも、かうもない。一大事なのだ。早く王様にお目にかゝりたいのだ。一大事だ。一大事だ。』といつて、樵屋が騒ぐものですから、門番たちはいよ〳〵怒つて、

『この氣狂め！』と叫ぶつて樵屋を追返さうとしました。

この時、王様はまだ寢間においでになりましたが、門外の騒ぎがお耳に入つたので、樵屋を呼んで來いとおいひつけになつて、御自分もお廊まで出ておいでになりました。

樵屋が驢馬の背ゆから樵を下しますと、中から痩せ衰へた娘が現れたので、みんなびつくりしてしまひました。

王様でさへ、はじめはそれがカヌテーラ姫だとは知りませんでした。それ程にも、王女は全く變りはてた姿になつてしまつてゐたのです。

カヌテーラ姫は泣きながらこれまでの話をしましたので、王様もはじめて御自分の可愛い娘であることを知つて、びつくりして抱

なさいました。

『お父様、私は決してもう二度とお父様のお側をはなれません。他所へ行つて女王様になるよりは、こゝにゐて奴隷になつた方がどんなに増しだかわかりません。』

王女はさういつて、また泣きました。

五

さて、その間に魔術師の方では、家來の妖精が知らせに來たので、厩に歸つて來て見ますと、木當に王女がゐないので、眞赤になつて怒つて、すぐさま後を追ひかけて行きました。

魔術師は王様のお城のすぐ向側に住んでゐる慾ばりの妖女のところへ行つて、

『お婆さん、私はお前さんの好きなものを何でもお禮にあげるから、王様のお姫様を一と目私に見せてくれないか。』といひました。

慾ばりの妖女は、お金を千圓くれといひましたから、魔術師はすぐ財布から金貨を千圓出してやりました。

妖女は魔術師をつれて、自分の家の家根へつれて行きました。そこから見ると、丁度カヌテーラ姫が御殿の一番上のお部屋で長い髪をとかしてゐました。

その時、王女は何氣なく窓の外を見ました。すると、魔術師がぢつと此方を見てゐるではありませんか。王女はきもをつぶして、梯子段をかけ下りて、王様のところへ飛んで來ました。

『お父様、私をすぐに七枚の鐵の扉のあるお部屋へ入れて下さい。魔術師が來たのです。』

『よし！』と叫んで、王様はすぐさま王女を七枚の鐵の扉のある部屋へ入れてしまひました。

魔術師はこの有様を見たので、また慾ばりの妖女の處へ行つて、

『お婆さん、お前さんはこれからお城へ行つて、この紙切れを王女の枕の下へ入れて來てくれませんか。そして、その紙切れを入れる時にかういふのです。(この御殿の中の者よ、王女の外は一人殘らず深い眠りに入れ。)といつて下さい。何でもほしいものをあげますから。』

慾ばり妖女は、もう千圓くれといつて、それを貰ふと、魔術師のいふ通りを實行にかゝりました。妖女がお城へ忍んで行つて、王女の枕の下に魔術師の紙切れを入れて、唱へ事をすると、忽ち御殿中の者はみんな深い眠りに入つてしまつて、たゞ一人王女だけが目を覺してゐました。

そこへ、魔術師は急いで七枚の鐵の扉の部屋へ行つて、一枚々々と開けにかゝりました。

カヌテーラ姫は魔術師の姿を見て、びつくりして大聲を擧げましたが、御殿中の者は一人殘らず眠つてしまつてゐるので、誰一人助けに來るものがありません。魔術師は寢て居る王女をつかまへて、無理矢理に引張つて行かうとしますと、その拍子に枕の下の紙切がひよいと床に落ちました。

ヌア大變です。忽ちに御殿中の者は一人殘らず眠りから覺めて、カヌテーラ姫の叫び聲をきゝつけて飛んで來ました。

もうこれから先きは書かなくとも、賢い皆さんにはお解りのことゝ思ひますから、こゝらでお話を打切つて置きます。たゞ、しかし、これだけの事を書いて置きませう。その翌日お城の堀端に、魔術師の死體がころがつてゐたといふ事だけを。(をはり)

歴史物語

六代御前

茅野雅子

一

源平の戦がすんだ後のことでした。勝ち誇つた源頼朝は家來の北條時政に命令て、京都の近くに殘つてゐる平家の人だちや、その子や孫などまで厳重に搜出して、男でさへあればまだ赤ん坊であつても、皆な殺させてしまはせるのでした。殊に平家の嫡流になる維盛の子の六代御前といふのは、年もゝう十歳以上になつてゐるのに、一向その行方が知れないので、時政は一生懸命になつてゐましたが、どうしても解らないので、もう斷念めて明日は鎌倉へ歸らうと思つてゐました

すると其日の夕暮に、一人の賤しい女が六波羅の北條時政の邸へ訪ねて來て、『遍照寺の奥の小倉山の麓にある所で、菖蒲谷の北に大覺寺といふ所がありますが、其處に横亮三位中將維盛の奥方が、若公樣とお姫樣と御一所で、かくれてゐられます。』と訴へたのでした。

時政は大變に喜んで、翌日は早速その女を案内者にして家來に樣子をうかゞはせて見ました。六代御前はそんな事のあらうとは夢にも知らなかつたので、讀書やお習字にも飽きたので、可愛がつてゐる犬を相手に中庭の方で遊んでゐたのでしたが、調子づいた犬は面白さうに跳ね廻つた揚句、外廊の方へどん〳〵と走り出してしまひました。

『そら逃げても逃がしはしないぞ。今直ぐにつかまへてやるからね。』

さう云つて後を追掛けて思はず外へ出たのでした。

『あら若公樣。人に見られては惡うございます。お慎み遊ばされなくては。』

さう云つて侍女が急いで飛出して來たので、六代御前も思はず身をすくめて、急いで家の中へ入つてしまひました。しかしそれが身を滅す因でした。北條の家來が丁

度その時垣の外でこの樣子を見てゐました。

その翌日の晝過ぎに小手脇當をつけた厳めしい一人の武士が大覺寺へ來て、

『こちらに三位中將維盛樣の若公樣がおゐでなさると聞きまして、北條時政がお迎に參りました、何分よろしくお取次ぎを願ひます。』

と云ふのでした。それを聞くと六代御前のお母樣を始め幾人もの侍女たちも顔を眞蒼にして暫らくは物も云へませんでした。警護のためについてゐた齋藤五、齋藤六と云ふ二人の侍さへ思はず顔色をかへて立上つたのでしたが、何うかして逃ける方法はないものかと、裏の山の方を見渡してみますと、もう弓矢の用意をした數百人の武士が寺の周圍をすつかり取かこむで、蟻の這出る隙もないやうになつてゐました。

奥方はもう氣も狂ふくらゐに悲しんで、六代御前を確りと抱きしめたまま、

『この子を連れてゆくなら、私を殺してから後にするがよい。命のある間は何と云つても、故すことは出來ないから。』

と被仰つて、お泣きになるので、乳母や侍女たちも聲をあげて泣出したので、それが外までも聞える位でした。時政も氣の毒になつて來ましたけれども、そんな事では役目がつとまりませんから、

『別にどうしやうと云ふのでもありません。まだ世間が物騒ですから安心な處へおつれ申さうと思ふばかりで、別に御心配のことはありませんから、どうかお愈さの程を願ひます。』といふのでした。

齋藤五も、もうかうなれば逃けやうは無い故、お渡しなさるより仕方はない、これはもう前から覺悟の上のことで、今さらそんなにお驚きになるには及びません。どうかお心を靜めて下さいましといふのでした。六代御前はまだ子供ながら、お母樣が餘りお悲しみになるのをお慰め申さうと思つて、

『お母樣、兎に角私は行つて參ります。向ふへ參りましたら、直きに暇を貰つて歸つて參りますから。』

といふのでした。その優しい言葉を聞くと、お母樣や

乳母は、これが一生の別れになるものを、今別れたらもう二度と逢ふ時は無いのにと、胸も張裂けるやうに悲しくて、唯聲をあげて泣くばかりでしたが、其中にもう日も暮れさうになつて來たので、武士たちが踏込んで來たりするのも否だからと思つて、やうやうのことで、髪を結つたり、着物を着換へたりしてお出かけになりました。

奥方は黒木で拵らへた小さい珠數を出して、六代御前の首へかけてやりながら、せめて其時まではこれでお念佛を唱へて、あの世へ行つてから幸福になるやうにお祈りなさいと言つてはまたお泣きになるのでした。奥方は大層深い佛敎の信者でした。六代御前もさすがに心細くなつて、

『お母様には今日がお別れでございます。今度は何處へでもようございますから亡くなつたお父様のおるでの所へ參り度うございます。』

と云つて、お泣きになるのでした。

年はやつと十二歳でしたが、お父様の維盛によく似て美しい上に、これが此世の別れかと思ふと、互に眼と眼を見合つて涙ばかり出るのでした。いよ／＼奥に乘らうとすると、未だ小さい妹は、

『何故お兄様はひとりでお出かけになります　私も連れて行つて下さい。』

と云ふので、皆がまた泣出してしまひました。

二

六代御前はやがて六波羅へつくと、直ぐに一間のなかへ入れられて、警固の武士に守られる身の上となりました。さすがに平家嫡流の若君ではあり、其上いかにも美しくて、上品で、死を覺悟してゐる有様がいぢらしいので、北條時政も他の平家の子供をしたやうに、直ぐ首を切つたり、水へ沈めたりすることも出來ないでゐるのでした。

奥の側へついて大覺寺から六波羅まで泣く泣く走つて來た齋藤五、齋藤六の二人は、若公様の最後を見屆けたいと思つて片時もお側を離れまいとしてゐたのでしたが急にどうといふこともなさゝうでしたので、兎に角奥方

の御様子を見ながら、若公様のこともお話をしやうと思つて翌朝齋藤六は一寸大覺寺の方へ歸つてゆきました。六代御前は幼いながらも美しい字で母への手紙をかくのでした。今まで無事では居りますが、皆が戀しくて仕方がありません。ことに妹の夜叉御前が別れ際に泣いたことが今でも眼に見えるやうですなどとも書いてあるのでした。

『齋藤六、お前お母様にお目にかゝつたらね、私は思の外落ついてゐると申し上げておくれ。それでないと餘計な御心配をかけるからね。』

自分が昨日までゐたあの戀しい、寂しい、けれども懐しい山の奥のお寺のことを思浮べながら、六代御前は齋藤六にかう云つたのでした。昨日の奥の中は云ふまでもなく、昨夜は一寸の間も寢ないで悲んでゐた上に、其朝も一口の御飯さへ咽喉へは通らない程に泣いて居ながらも、尙は母に心配をかけまいとする若公様のやさしい心づかひを思つて、齋藤六も聲をあげて泣かないではゐられませんでした。

さて大覺寺に取殘された奥方や乳母は、手の中の玉を奪はれたやうな心持で、起きてはゐられない程泣いてゐたのでしたが、乳母は餘りの悲しさに靜としてはゐられなくなつて、外へ出て何處とも知らず歩いてゐますと、不圖一人の尼さんに出逢ひました。少し行過ぎたその尼さんは、又一寸後戻りをしながら、

『若しもし。妙なことをお訊ね致しまして失禮でございますが、あなたの御様子を見ますと、何だか其儀には通ることが出來ないやうに存じます。あなたは屹度何か大

變な心配ごとを持つてゐらつしやるのでせう。お差支がなかつたら話して下さいまし。お力にはなれることがあるかも知れません。』と云ふのです。

乳母も餘り悲しかつた所へ、かう親切に云はれたので、つひ本當のことを話してしまひました。さうすると尼さんも涙をながして、

『まあさうでしたか。世の中で私一人がこんなつらひ思ひをするのかと思つて居ましたら、同じ樣な身の上の方も外に澤山おありになりますね。私もある平家の若樣をお產れになつた時からお預りしてをりましたが、北條時政といふ武士に捕はれて水に入れられてしまひましたので、かうして尼になつてしまつたのです。』

こんな身の上話をし合つた末に、其尼は高尾に住んでゐる文覺上人といふ人は、賴朝の愚人でもあり、丁度美しい稚兒をさがしてゐるといふことですから、その上人に賴めば、どうかすると助けて貰ふことが出來るかも知れないといふ話をした上、自分も一所にゆく故兎に角行つてみてはどうかといふのでした。二人は直ぐに高尾山へ行つて文覺上人にお願してみました。始めは中々承知しさうもありませんでしたけれど、地面に額をこすりつけて賴む乳母の眞心に動かされて、とう〳〵上人が救つてやらうといふことになりました。

三

文覺上人は二十日の間六代御前を殺さないやうに時政に堅い約束をして置いて、鎌倉の賴朝の所へ六代御前の命を助けて貰ひにゆきました。まあかうして二十日間の命は大丈夫になりました。奥方や乳母の喜びは譬へやうもない程でした。

しかし二十日は夢のやうに過ぎてしまひました。それでも文覺上人は歸つては來ませんでした。六代御前といへば平家にとつては極めて大事な若君であるだけに、賴朝にとつては此子供を生かして置くと、後にどんな禍の種になるかも知れませんから、たとへ文覺上人がどんなに云つて頼んでも、命請は六ケ敷いものだと誰でも思つてゐました。

六代御前は二重織物の直垂をきて、黑い珠數を手にもつて、一日中一間の中に坐つて、自分の運命がどうなつて行くかと待つてゐました。文覺上人と云へば、源氏のためにいろいろと力を盡した人ですから、平家滅びたのも云はば上人のためだと思ふと、憎くてならないものの、それが今は自分の命を助けやうとしてゐるのだと思ふと、また懷かしくもなるのでした。

十二月も終に近い頃で、折々寒い雨が小窓に詫しくふりそゝぐのを見ると母や、妹の夜叉御前があの菖蒲谷の奥でどんなに寂しく暮してゐるであらうと、殺される自分のことよりは、後に殘つてゐる人のことばかり考へる。のでした。

時政もその樣子が餘り可哀さうなので、どうしても殺す氣にはなれないでゐたのでしたが、其年の中には鎌倉へ歸らなくてはならない上、文覺上人との約束の日數がつきたので、十二月の十七日といふ日に、六代御前をつれて鎌倉へ出かけました。

齋藤五と齋藤六の二人は跳足で輿の側について走つてゆくのでした。時政も氣の毒がつて馬に乘れと云つて、馬を貸してやつても少しも乘りません。悲しさに足の痛いことなどは忘れてゐたのでせう。

日數を經て駿河國の千本松原といふところへ着いたのでした。北條時政は齋藤五と齋藤六とを呼んで、

『もう鎌倉へも近くなつたから、お前たちは此處から歸るがよい。賴朝公のお叱をうけるのも困るから。』

と云ふのでした。二人はそれではいよ〳〵此處でお殺されになるのかと思ふと、暫くの間ぼ物も云へませんでした。

『私どもは三年前、維盛樣が京都をお落ちなされた時から、若樣のお側を一日半時も離れないでゐたものです。どうか最後の時までお側にをりたうございます。』

二人はかう云つて大聲をあげて泣くのでした。六代御前は涙をふきながら二人にかういひました。

『お前たちも此處までついて來てくれたが、もうお別れになるのがさぞ殘念であらう。お母樣へお手紙を差上げたいけれども、何と書いてよいか解らないから、どうか口

で申上げておくれ。六代は無事に鎌倉へついたとね。決して此の松原で亡くなつたと云つてはいけません。お母様がどんなにお嘆きになるか知れないからね。私が此處でどうかなつたら、お前たちが私に代つて、お母様にお仕へ申しておくれ。』

二人は、頭を地面にこすりつけて、『若公様、若公様、若公様にお別れして私共がどうして生きてゐられませう。一所にあの世までもお供を致します。』

と云つて泣き倒れるのでした。

さう云ふ中にもう日暮になつて來たので時政は家來に云つけて、六代御前を斬れと云ふのですが、誰も刀を取らうと云ふものがありませんでした。

『さあ、急がないか。誰も私の命令をきくものがないのか。』

時政は聲をあららけて云ひました。其所で仕方なしに一人の武士が刀を持つて立上りました。もう間もなく美しい六代御前の命は無くなる所でした。

その時、東の方から黒い衣を着た坊さんが一人、手紙を入れる袋を首

へかけて、鵜毛の馬に乘つて、大急ぎで飛んできました。

それは文覺上人の弟子の、覺文といふ人でした。その袋の中には、頼朝が自分でかいた六代御前の命を赦すといふ手紙が入つてゐました。文覺上人が樣々に願つて、六代御前を坊さんにするといふ約束で、やつとのことで赦して貰つたのでした。

六代御前は云ふに及ばず、二人の家來も躍上つて喜びました。

その中に文覺上人も來て、六代御前と二人の家來は上人と一所に京都へ歸つてゆきました。

歸るとすぐ懐しいお母樣や、妹や、乳母などに逢はうと大覺寺へ急いで行きましたが、着いた時にはもう夜でした。

寒い冬の月が皎々と照して、四邊は寂しい有樣でしたが、今はそんなことも何とも思ひません。早く懐しい母に逢ひたいと云ふ心で一杯でした。

やつと着いてみると、寺はひつそりとして人の住むでゐる景色もありません。

呼んでも叩いても返事がありません。餘りお嘆きになつて、其儘お亡くなりにでもなつたのかしらんと、三人は今更に悲しくつて、月の光のさす縁側に坐つてゐると、何處からか飼犬が出て來て、前の主人を覺えてゐると見えて、しきりに尾をふつたり鼻をこすりつけたりして愛敬を振蒔くのでした。

『こら、奥方を始め、皆の衆は何所へ行かれた。』

齊藤六は犬を捕へてかう云つてみましたが、犬のことで何の返事をする筈もありません。

一晩其所で明かして、翌朝近所で訊ねると、大和の長谷寺へ行つて、六代御前の無事を祈つてゐられることがわかつて、やつと安心することが出來ました。

到底死ぬに定つてゐると思つた子が、助かつて歸つて來たのを見る奥方の喜びにどんなでしたらう。

ほんたうに人の運命程、解らないものはありません。

（をはり）

彦四郎狐

（歴史推）

村春代ッ八

このお話は、徳川將軍がまだ政權を朝廷へお返し申さなかつた時代の事です。

將軍慶喜公は或時ふと、關が原に御先祖家康公の社を建てようと思ひつきました。早速御家老の前田親母をお呼び出しになりまして、

『御先祖の家康公、お祭りしたいと思ふが、それには御先祖の一番苦勞をなされた關が原へ社を建てゝ、祀らうと思ふ。萬事はお前に委せるから、よい樣に取計らつてくれ。』と、お命じに成りました。

そこで直ぐに御家老は、家來の池上十孝といふ武士を呼んで、五千兩といふ大金を渡して、關が原に家康公のお社を建てるやうにと云ひつけました。

いひつけられた十孝は早速家へ歸つて、特にこの事を話し、旅の仕度もそこ〳〵に、預かつた五千兩のお金を振り分け荷物にこしらへて、今の東京、昔の江戸を出立し、道中何事もなくて箱根の湯本へ參りました。

お話は一寸の間、十年ばかり昔に遡りますが、高山彦九郎の弟彦四郎がこの湯本で、徳川の捕り手のために召し捕られやうとした時自分から腹を掻き切つて自殺をしました。その怨霊が一匹の狐となつて、徳川家の家來がそこを通ると、誰でもかまはずに化しては、谷へ落して殺すか、自分で喰ひ殺すかして居りました。ですから此の頃では、その狐のことが評判になつて、土地の人達はこの狐を「彦四郎狐」といつて、大層恐ろしがつて居りました。

さて、湯本まで來た池上十孝は、そんなことのあるとは知りませんからドシ〳〵山道を登つて行きました。

ふと見ると、道端に一軒の茶店がありましたので、十孝は丁度足も疲れたから暫く休んで行かうと思つて、その茶店の緣臺に腰を下しました。

『お茶を一杯貰ひ度いのだが。』

といふと、茶店のお婆さんは愛想よく、

『これは入らつしやいまし。今日はいお天氣樣で、へイ。濃茶で恐れ入りますが、一杯召し上つて下さいまし。』と、古い茶碗へお茶を注いで出しました。十孝は美味さうにそのお茶を呑んで、茶店のお婆さんに話し掛けました。

『お婆さんや。私が此處まで登つて來た時には、夕方でもあらうが、僅か二三人にしか逢はなかつたが、この道はいつもこんなに淋しいのかね！』

するとお婆さんは、二三度あたりを見廻してから、

『いゝえ、もとはこんなに淋しくはなかつたんで御座いますが……』と云つてまた表の方を見てから、少し安心したと云つたやうな口振りで話し出しました。

『さうですねえ、今から十年も前の事でした。よくは存じませんが、高山彦九郎とか彦九郎とかいふ豪い武士の弟の、何といひましたつけねえ、あゝさう〳〵高山彦四郎とかいふ、これも矢つ張り豪いお武士樣で御座いましたよ。その御方が、どんな惡い事をしたのだかは知りませんが、徳川樣の捕り手にこの直ぐ上で召し捕られやうとしたんです。すると彦四郎樣は大變口惜しがりまして召し捕られぬ前に腹を切つて死んでしまつたのでした。それから後と云ふものは、何でも一匹の大い白狐が現れまして、徳川樣の御家來が通りますと、怪化されては殺されてしまひます。ですからもう此の頃では、徳川樣の御家來でこの道を通る者は一人も御座いません。皆少しは遠廻りをしてもわきを通つて行つてしまひます。ですから此の土地の者は、その狐に「彦四郎狐」といふ名をつけて、大層恐ろしがつて居りますよ。たまにはそんな馬鹿な事があるもんか、俺が一番退治してやる、なんて豪さうな事をいつて登つて行つた人もありましたが、無事に歸つて來た者はまだの一人も御座いません。見ればあなた樣もお武家さまの樣ですが、もし徳川樣の御家來で御座いましたならば、惡い事は申しません。少し遠廻りをしても、わきを通つてお行なさいまし。』

この話を聞いた池上十孝は、そんな馬鹿な事があるものかと思ひながら茶代を拂つて、茶店を立ち出でたのでありました。

十孝は別に深く氣にも留めず、氣が進まないはれてゐる所に差しかゝつて參りました。

何だか後の方で、ガサツといふ音がしましたので、ハツと思つて後を振り向いて見ましたが其處には何も居りません。氣のせいだと思ひ直して又歩き出さうとしました。ふと前を見ますと、今迄絶壁だと思つてゐた所が、意外にも平らな道になつて居るのでした。

『おや？　此處は絶壁の筈であつたが……。さては狐奴、俺を化して道でもない所へ道をこしらへ、抽者を谷に落してしまふ考へだな。フン馬鹿な、そんな手に乘る者か。』と云ひながら、念の爲にと一つの小石を拾つて、自分が崖だと思つて居るあたりに投げて見ました。多分、下へ落ちてしまふだらうと思つて見て居ると、小石はポタリと地に落ちましたけれども、崖なら下へ落ちてしまふのに、何うしたのかその儘コロ〳〵と轉がつて行きます。

サア十孝は何だか譯がわからなくなつてしまひました。たゞ腕が組んで考へてゐるばかりです。

『一體これは何うしたと云ふんだらう。俺は確かに崖だと思つてゐたが、はてな。小石が落ちずに轉がる所を見ると、矢つ張り俺の見違ひで、崖でも何でもなく、本當の道なのか知らん。イヤ〳〵確かに崖だ。この道は狐が私の目を欺いてゐるのだ。といつて小石が落ちずに轉がる樣子では、本當の道かな。こり

やアもう一べん石を投げて試して見よう。」と考へたので、また小石か拾つて自分の足許から轉がして見ました。

か、矢つ張り、小石はコロ〳〵轉がつて行きます。幾度やつても同じですから、十孝はこれは今まで自分の見誤りであつた、こゝは本當の道なのだと思つて振り分け荷物を背負ひ直し、一足踏み出しました。けれど何の變つた事もありませんから、すつかり安心してその儘ドン〳〵歩いて行きました。

丁度十歩か十五歩、歩んだと思つた時の事でした。

アッ！といふ間もなく、池上十孝の身體はまつさかさまになつて落ちてゆきます。十孝が遣だと思つたのは、崖を狐が道に見せたのです。可哀想に十孝は、大事な役目も果さず崖下の岩に頭を打ちつけて、死んでしまひました。

それから二日目の事でした。矢張り十孝と同じ德川家の家來で、森五郎といふ武士が來て、自分がその狐を退治してやると云つて山に登つて來ました。そして狐が出た處の松の根に腰を下して、あたりをヅロ〳〵見廻しながら、『さあ出て來い。』と一人で意張つて居りました。

その内にだん〳〵目が暮れて、夕方になつてしまひました。未だ何にも出て來ません。五郎も少し疲れて來て、その松の根を枕にしてグウ〳〵寢込んでしまひました。

寢てから一時間半もたつての事でしたでせうか、頭の處で、

『起きろ。青二才起きろ。』といふ者がありますので、パッと目が覺めて飛び起きて、あたりを見ましたが何も居りません。

『何だ馬鹿々々しい。氣のせゐか。』といひながらまたゴロリ横になりますと、

『一べん起きてまた寢る奴があるか、起きろ。』といふ聲が聞えましたので、飛び起きようとしましたが『いや〳〵起きないでもつと樣子を見てやらう。』と考へ直して、そのまゝ寢たふりをして樣子を覗がつて居りますと、今度はつゞけ樣に起きろ〳〵といふ聲がしますその聲が丁度頭の上に聞えますから、寢返りを打つ振りをして仰向けになつて、細く目を開いて松の木の上の方を見ますと、夜の事で、よくは見えませんが、松の茂みに何やら動いてゐるものがありますので、靜かに傍の大刀を左り手に握つて、パッ！と飛び起きざま、『エイ！』といふ掛け聲と一ッしよに斬りつけました。すると、

『ギャッ！』と一聲泣いてパッタリ下に落ちて來ましたから、隙かさずに馬乘りに跨がつて押へつけました。そしてヒョイと見ると今まで怪物だと思つて押へてゐたのは怪物ではなくて、太い松の枝を一生懸命押へて居たのでした。

これを見た五郎は、地團太踏んで口惜しがりました。

『憎い狐奴。ウーン、こう一度出て見ろ。今度こそは、一刀兩斷にしてくれるから。』と、齒ぎしりをしながら、あたりをキョロ〳〵見廻して居りました。

『旦那樣。何をして居らつしやいます』と背葉を掛けた者がありますので、後を振り向いて見ると、そこに一人の老婆がニヤ〳〵笑つて突つ立つて居ります。

五郎は老婆をつく〴〵見ますと、不思議な事にはこの暗夜だのに着てゐる着物の模樣がハッキリと見えます。五郎は、『狐や狸が人に化けてゐる時は、着物の模樣が暗夜でもハッキリ見える。』といふ事を思ひ出しました。

『やい。貴樣は大方狐狸の類ひであらう。速かに本體を現はしてしまへ。』と呶鳴りますと老婆は狼狽〳〵手を振りながら、

『いゝえ、とんでも無い。私はこの麓に住んでゐる者で御座いますが、今宮の下まで使に行つた歸道に此處を通りますと、旦那樣が一人でわい〳〵呶鳴つて居るので御座います。さつきは松の枝を切り落して、まゞまあ口惜しかつたで御座いませう。ホ、、、、』とさも人を馬鹿にしたやうな笑ひ方をしましたので、五郎は一層腹を立てゝしまひました。

『此上は一刀兩斷にしてやるから覺悟しろッ！』と刀を横に振つて老婆に切りつけました。

けれど何うした事か、ちつとも手應へがありません。まるで煙を切つてゐるやうな具合です。ハッと思つた五郎が、刀を持ち直して老婆を見ますと、老婆は矢つ張りニタ〳〵笑ひながら元のところに立つて居ます。

この時、五郎は、何だか後の方でゴソリ〳〵と落葉を踏む音が聞きました。何だらう？と思つて前の老婆を氣遣ひながら、ソッと後を見ますと、三四尺離れた所に、よくは分りませんが一匹の獸が居ります。

『ハヽア、この老婆は後にゐる此奴の仕業だな。』と氣がついたので、掛聲もろとも其の獸を斬りますと、確かに手應へがして、

『ギャッ〳〵』と泣きながらバタ〳〵と逃げ出しました。五郎は飛びかゝつて、首と思ふ所を一太刀切りますと、『ギャッ！』とまた一聲泣いて其處へドサリと倒れてしまひました。

五郎がほつと一息ついて、老婆のゐた所を見ますと、もうそこには誰も居りません。ゐない筈です、この獸が老婆の姿に見せたのですから。

整る朝改めて昨夜殺した獸を見ますと、それは四尺位もある大きな白狐でありました。

かうしてやつと、人々の恐れてゐた彦四郎狐を退治る事が出來たのでした。ですが、この狐をこのまゝにして置くと、後々どんな祟りがあるかも知れないと云ふので、その狐を燒いて、殺された所に埋めました。

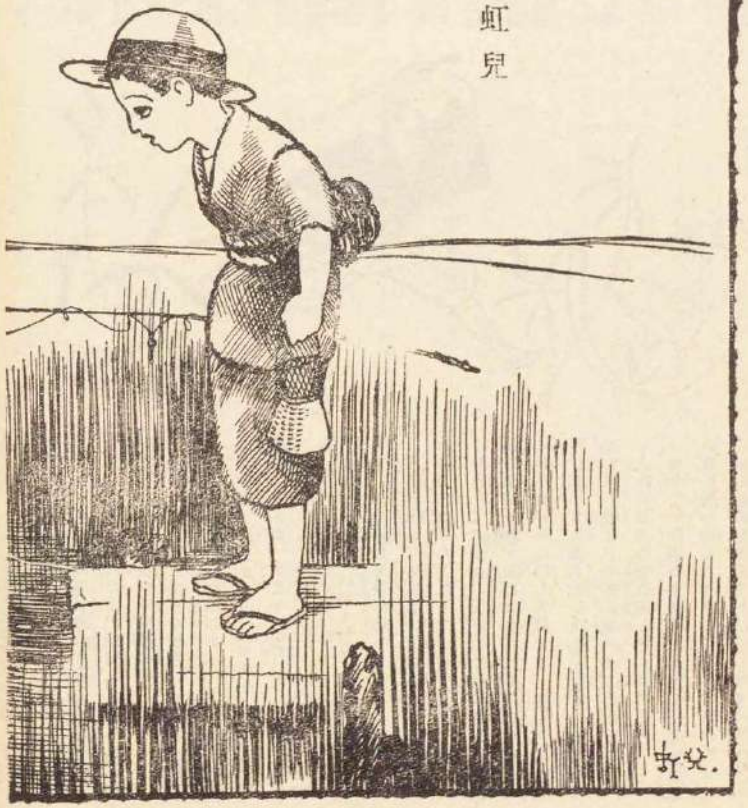
人々は其處を白狐塚と呼んゐました

併今では何處が白狐塚であるか、九十歳位の昔を知つてゐる年寄りに聞かなければ、分ら無い位になつてしまひました。（をはり）

河童の子

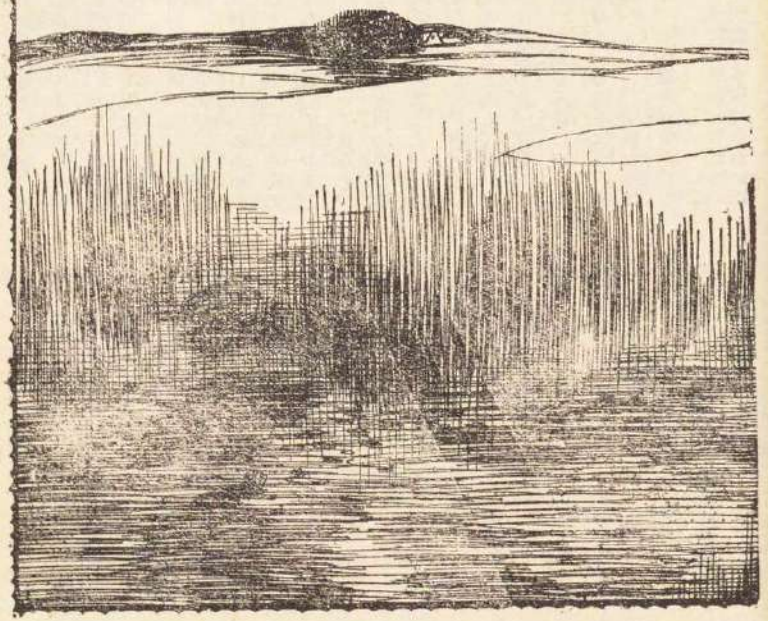
露谷 虹兒

水草が
だまつて
浮いてる
古沼の
水の底から
濁るのは
カツパの



おうちの
煙だよ
おまんまをたく
煙だよ

あぶくが
くるくる
浮いてきた
カツパの
子供も
遊ぶのか
シヤボン玉を
吹いてるネ



諸國奇談

三毛猫

中川杏果

昔、佐渡が島の三宮といふ村に、名高い法憧寺といふ禪宗のお寺がありました。そこの住職の珍憧といふ坊さんは大變、なさけ深い人でありました。虫ケラはいふに及ばず、草や花の類をも常に可愛がつて決して粗末には扱ひませんでした。

或る日の晝頃、この坊さんが、お寺に歸らうと思つて村の入口にある小川の處までやつて參りますと、たくさんの子供が集まつてなにか騒いで居りました。坊さんは、それを覗いて見ると、一匹の可愛らしい三毛猫を川の中に投げて遊んで居るのでありました。坊さんは、たいへんびつくりして、オウ〳〵お前さん達、そんなことをしてはいけません、どれ〳〵和尚に其の猫をください、その代り、お前さん達には、お禮としてこれをあげますと云つて、澤山のお菓子を與へました。子供たちは大變よろこんで、その猫を坊さんにあげました。

坊さんは、その猫を手拭できれいに拭つてやつて、お寺へ抱いて歸りました。お寺へ歸ると其の猫に大さう御馳走をしてやりました。猫はあやふく川へ投げ殺されるところを助けられたものですから、大へん喜んで眼なぞが出れば、すぐ追つ拂つてやりました。この猫はまた、大へん、怜悧でありまして、色々とお使なぞをするやうになりました。月日のたつは早いもので、この三毛が救はれてから暑や五ケ年がすぎました。

この村から二里ばかり隔つた新穂といふ村で、一番大きな呉服屋に中川といふ家がありました。この家は始め、この法憧寺の檀徒でありましたが、その後、有名なる日蓮上人がこの島へ流されて、この家から近くの塚原山根本寺といふお寺にゐて色々と説教したために、この中川家では遂に法憧寺から去つて、この日蓮宗の根本寺の檀徒になつてしまつたのであります。

法憧寺の住職、珍憧さんはこの寺の住職となつて以來、是非、この中川家をもとの通り自分の寺に取り戻さなければならぬ、さうでないと單 自分の寺の不名譽であるばかりでなく、禪宗の面目にも關すると云つて、常々、これが取り返しのことを心配して居りました。和尚の一生の願はあの中川家を當院に取り戻しさへすれば、それで良い、それさへ成功すれば拙僧はいつ死くなつてもよいと云つて居りました。

恰度、三毛猫が救はれてから七年目の或る日、この中川家にお葬式があつたので、珍憧さんは、お弔ひに參りました。何分、佐渡が島でも一番か二番といふ大きな呉服屋のお葬式でありますから、佐渡、全島の日蓮宗の坊さんが集りました。さうして多くの信徒も集つて南無妙法蓮華經を唱へながら、ドンドン〳〵と太鼓を叩いて葬儀の行列は黑山の如き見物人の中を塚原山の山門まで參りました。

この行列が日蓮宗、大本山である根本寺の山門近くへ着いたと思ふと、今までは、蒼々とした大へん佳い天氣であつたのが、俄かに、かき曇り雷鳴は鳴る雨は降る全く致し方のない、大暴風雨になりました。そればかりでなく、その葬列の中程にある棺の上には龍のやうな、雲が來て今にも其の棺を、かつさらつて行きさうになりましたから、澤山の人々は、びつくりして一生懸命に題目を唱へました。けれども一かうに功能がありませんでした。

さうして居るうちに、天の方から大きな聲で……この葬儀は禪宗本山法憧寺の手に渡せ……といふ聲がしました。そこで一同は打ち驚いて、恰度その葬列の隅の方に弔ひ客として加はつてゐた法憧寺の住職、珍憧さんにお願して、お經を讀んで貰ひました。

珍憧さんが、その棺の前で香を焚いてお經を讀み、白い拂子をふり上げると今までの大暴風雨はからつと晴れて始めのやうな好天氣になりました。

そこで日蓮宗の坊さんは、大變、面目を失なつて、みんな、逃げ歸りました。珍憧さんは、自分ながら、事の意外に驚きましたが、その葬式を其處から引き受けて、自分の寺に葬りました。中川家では、それから、また〳〵昔のやうに法憧寺の檀徒になりました。さうして、今日でも自分の家から約二里半も隔つてゐる三宮の法憧寺を自分の菩提所として居ります。

この騒ぎがあつてから、法憧寺の三毛猫は行衛不明になりました。そこで佐渡の人は、これは三毛猫が、坊さんへの、御恩返しに、この中川家を日蓮宗から取り戻したのだと云つて居ります。また法憧寺でもこの中川家を猫憧家と云つて居ります。（をはり）

世界名作物語（その五）

馬鹿のイワン（ロシヤ）

山野虎市

（一）

むかし、ある國に金持のお百姓が住んでゐました。そのお百姓に四人の子供がありましたが、長男は軍人でセミョンといひ、次男は商賣人でタラスといひました。三人目はイワンといつて馬鹿でした。四人目はマラニヤといふ嘴で啞の娘でした。

長男の軍人のセミョンは王様の都で、月給で深山貫つて暮らしてゐましたが、奥さんが無暗にお金を使ふので、いつも貧乏で困つてゐました。

次男のタラスも都に出て商賣人となり、お金を深山貸けましたが、まだ〳〵深山のお金が欲しいと思つてゐました。

馬鹿のイワンと啞娘のマラニヤは田舍のお父さんの家に居つて、一生懸命お百姓をしてお父さんお母さんに孝行をいたしました。

ある日、貧乏で困つてゐる軍人のセミョンが、お父さんの所へ歸つて來て、

『お父さん、あなたは自分お金持ちですが、その財産を三分の一だけ私に分けて下さい。さうすると私も困りませんからナ。』といひました。

併し年とつたお父さんは申しました。

『この財産はイワンが働らいてこしらへたのだから、何も家へ持つて來ないお前に財産を上げるわけに行かんよ。第一さうするとイワンや妹のマラニヤに氣の毒ぢやないか。』

がセミョンは、

『イワンは馬鹿で、妹は嘴で啞です。財產なんかはあれ等にはいりませんよ。』といつて、なか〳〵お父さんのいふことを聞きませんでした。でお父さんは仕方なくイワンに相談して見ましたが、イワンは快く、

『いゝとも〳〵、兄さんが欲しい程持つて行きなさい。』といひました。

そこでセミョンは、お父さんから分前を貰つて都へ歸りました。

商賣人のタラスも肥つた身體をしてお父さんの所へ來まして、長男のセミョンと同じやうに財產を分けてくれといひました。そしてインヲが骨折つて作つた穀物を半分程車に積み、イワンが大切にしてゐた葦毛の種馬を引つぱつて都へ歸りました。

その時でもイワンは『いゝとも〳〵、私はまた働くからナ。』といつて笑ひました。

（二）

さて、人の仲を割いて喧嘩をさせることを商賣にしてゐる惡魔王が、この兄弟達が喧嘩をしないで、仲よく別れたのを見て腹を立てました。そして子分の小鬼三匹を召びまして

『セミョン兄弟等は喧嘩をする筈だのに、少しも爭はないで、仲よく暮してゐる。それが俺の癪に觸るのだ。にあの馬鹿のイワンといふ奴は俺の商賣をすつかり防害しさうだ。どうだね、お前達三人が、あの兄弟三人の所へ一人づゝ行つて、あいつ等が互になぐり合ひをするまで、喧嘩をさせる方法がないだらうかね。』といひました。三匹の小鬼は、

『さうですね、先づ奴等三人から食物を奪ひます。そして奴等がパン屑もなくなつた時、三人を一つ所に集めます。さうすると奴等は屹度喧嘩します。』と申しました。惡魔王はこれを聞いて大變によろこびました。そして早くその仕事にとりかゝるように命令しました。

そこで三匹の小鬼は沼地の所へ行つて、いろ〳〵仕事のやり方を相談し、圖を引いて、各々取り兎く人を決めて、仕事にとり掛りました。

その後しばらくしてから、三匹の小鬼は沼地の所へ集まつて、てんでに自分の受け持つた仕事の成り行き話しました。

セミョン掛りの小鬼は力んでいひました。

『俺の仕事は旨くいつた。今日あのセミョンは親爺の家へ歸へるだらうよ。俺はセミョンを煽動して印度王征伐にやつたのさ。セミョン軍と印度軍がいよ〳〵戰爭を始めやうとする時、俺はセミョン軍の火藥を濕らしてやつたのだ。そして印度軍の方には數へ切れない程の兵隊をこしらへさした。でいよ〳〵これから大砲を打ち出すといふ段になつて、セミョン軍の方の大砲はさつぱり發火しないのだ。つまり俺が火を力濕らして置いたからだ。

そこで、セミョンの方では敵の藁人形をホントの兵隊だと思つてピク〳〵しゝゐた矢先き自分の方の大砲がさつぱり役に立たないといふわけだから、すつかり度膽を抜かれて仰天してゐる所を、印度兵に突貫されて兵隊は大抵殺ろされ、セミョンは遑々の體で國へ逃げて歸つたのさ。王様はセミョンが戰爭に敗けて歸つて來たのを見て、大變に怒つて、セミョンを死刑にするといつたのだ。だが俺はセミョンを親爺の所へ歸らせるために、今丁度監獄から出してやつた所だ。これで俺の仕事も旨くいつたから、明日はお前等の仕事を助けてやるよ。』

そこで此度は、タラス男のタラス掛りの小鬼が自分の方の仕事の成り行きを話しました。

『俺の力の仕事も旨くいつた。俺は彼奴を途方もない張りにしたのだ。彼奴は自分の有金ですつかり品物を買つたが、まだ物が欲しいので、人から借金して手當り次第に品物を買ひよる。今ではもう借りのために首も廻らない有樣だ。一週間の中に勘定日が來るが、その前に俺は彼奴の商品をすつかり駄目にするんだ。そこで彼奴は仕方なしに親爺の所へ

帰るのだ。』といつて、

『お前の方は旨くいつたかね。』とイヴン掛りの小鬼の方に振り向きました。そこでイヴン掛りの小鬼が談り出しました。

『どうも俺の方の仕事は旨くいかんのだ。俺は先づ彼奴の胃を悪くするために、彼奴の飲む水の中へ唾を吐きこんでやつた。そして畑へ行つて鋤きかへしの出来ないやうに、石のやうに固く地面をたゝきつけたのだ。ところがイヴンの馬鹿！　胃が痛いのに唸りながらやつて来て、石のやうな畠を鋤き始めたのだ。俺は鋤を壊はしてやつたが、彼奴は直ぐ家へ帰つて別な鋤を持つて来て鋤き出したのだ。そこで俺は土の中へ潜りこんで鋤の頭を摑んだのだ。が力の強いイヴンの馬鹿め、どんどん畠を鋤いて行つた。俺はそのために鋤で手を切られた。どうか俺を助けてくれ。彼奴をやッつけないと、俺達の仕事がすつかり駄目になるのだからね――。もし彼奴が今のやうに仕事を續けて行くと、二人の兄弟を充分養つてやるから、あいつ等は喧嘩をしないわけだからな。』

でセミョン掛りの小鬼ばイヴン掛りの小鬼を助けに行かうと約束して、小鬼兵は別れました。

（三）

イヴンは畠を大概鋤いて終ひましたが、まだ少し殘つてゐるので、胃が痛むけれども、

精を出して鋤を使つてゐましたが、鋤がハタと木の根にでも引つ懸つたやうに動かなくなりました。それは側の小鬼はイヴンの仕事を邪魔するために、鋤の頭をつかんで引き留めて居るのでした。

『妙だナー、ここに木の根が無つた筈だが。』といひながら片手をぐッと土の中へ突込んで見ますと、何か柔かい物がぐたッと手に觸はりました。イヴンはそれを摑んで引上げて見ると、眞黑な小鬼でした！

『何て嫌な奴だ！』とイヴンは叫んで、地面へ投げ付けやうとしますと、小鬼は悲しい聲をあげて、

『どうか助けてください。その代りあなたのいふことは何でもしてあげます。』と拜むやうに申しました。

『貴樣に何ができるのだ？』

『あなたのいふ事なら何でもしてあげます。』

そこでイヴンは頭を搔いて考へましたが、

『私の胃が痛むのだが、貴樣、それを癒せるかい？』といひました。

『大丈夫癒せます。』と小鬼はいつて、土の中へ潜ひ込んで、爪であちこち掘き廻して、小さい草の根を三ッ引き拔いて來て、

『これを飲めば、どんな病氣でも癒ります。』といひました。

イヴンはその根を一本ぐつと飲みましたが不思議にも胃の痛みが直ぐに癒りました。

そこでイヴンはつかんで居つた小鬼の襟がみを放なしてやつて、

『サー行け、神汝と共にあれ。』といひました小鬼ば神の名を聞くや否や、まるで水の中へ落ちた小石のやうに地の中へ飛び込みました。飛び込んだ跡には穴が一つ殘りました。

イヴンは仕事をすつかり仕終つて、小鬼に貰つた殘りの二本の草の根を帽子の中へ仕舞ひこんで、家へ歸つて見ますと、軍人のセミョンがその奥さんと一緒に坐つて夕御飯を食べてゐました。セミョンは戰爭に敗けて、王樣から地所を取り上げられ、やつと監獄から逃げて、イヴンの家へ厄介になりに來たのです。

セミョンはイヴンを見て、

『私ばお前と暫時同居したいのだが、どうか私と家内を養つてくれ。』と申しました。

『いゝとも〳〵。』とイヴンはいつて、長椅子へ坐らうとしますと、奥さんばイヴンの臭いのを嫌つて、

『私はこんなきたない お百姓と一緒に御飯は戴けません。』と顔をしかめました。

しかしイヴンは一向平氣な顔をして、

『いゝとも〳〵、私ばどうせ馬の世話をしなければならんのだから。』といつて、外套を持つて馬をつれて野原に出て行きました。

（四）

さて、セミョン掛りの小鬼はすつかり自分の仕事をしてしまつて、イヴン掛りの小鬼を助けるために野原へやつて參りましたが、イヴン掛りの小鬼の姿が見えないで、地面に穴が開いてあるのを見ました。

セミョン掛りの小鬼は「何かよくない事が仲間の上に降りかゝつたわい」と考へながら、イヴンの牧場へやつて來ました。そして牧場の青草にうんと泥をかけました。

イヴンは夜明けに牧場へ參りまして、草を刈らうとしましたが、何樣、小鬼がひどい泥を草にかけて置いたのですからたまりません。鎌は一二度振つたばかりで刃が曲つて、ちつとも切れなくなりました。併しイヴンは家へ歸つて研石を持つて來て、鎌を研いでは草を刈りました。小鬼は草の中に隱れて鎌の頭をつかまへて、その尖を地の中へ突込みました。併しイヴンは少しもめげずに草を刈つて行きましたので、小鬼ばたうとう駄目だと思つて、側の深い草の茂みへ身を隱くしました。が、イヴンが鎌を振つてその茂みを刈つたので、小鬼ば尻尾を半分切り取られました。

イヴンはすつかり草を刈り終つて、今度は馬と荷車を用意して、刈つて置いた麥束を積みに參りました。ところが尻切れ小鬼はイヴンの先廻りをして麥畠へ行つて、イヴンが刈つて束にして置いた麥の中へ潜ひ込まました。すると麥束が少しづゝ腐り始めました。

さてイヴンが參りまして、小鬼が麥束の中に居ることば知らずに、麥束を熊手を打ち込んで、荷車の中へ投げ込みましたが、三度目に熊手を打ち込んで引き上げて見ますと、小鬼が胃中を熊手に突き刺されて、丁度横腹を串にさゝれた魚のやうに、ぱた〳〵跳いてゐるのです！

『何て、嫌な奴だ。』とイヴンはいつて、いきなり荷車見かけて小鬼を投げつけやうとしましたが、小鬼は、

『どうか御赦し下さい。その代りあなたのい

ふことは何でもして上げます。』といつて赦しを乞ひました。

『イヤ、私は別にお前から何もして貰ひ度くないが、一體お前は何が出來るのかい？』

すると小鬼はいひました。

『この麥束を、把取つて、それを地面の上に立てゝ、

おゝ麥束よ～
命令ば下れり
一本の麥藁より
一人の兵士出づべし

と唱へると、麥束が兵隊になるのです。やつて御覽なさい。』

そこでイヤンは、麥束を立てゝ小鬼がいつた通り唱へますと、忽ち麥稈は一本づゝ兵士に變りまして、先頭に喇叭手や樂隊までついてゐる立派な聯隊が出來ました。

『フム、うまいもんだ。娘や子供が見たらよろこぶだらう。』とイヤンはいつて笑ひましたが、小鬼は、

『どうか早く熊手を脱いて、助けて下さい。』

と申しました。がイヤンは、

『イヤ、折角のいゝ麥が兵隊になると困る。これを元通りの麥束に返へす方法を敎へてくれ。』といひました。そこで小鬼は

『かうやるんです。

おゝ兵士よ～
命令ば下れり
汝等
もとの麥稈に返へれよ

と唱へるのです。』

そこでイヤンはその通り唱へますと、兵隊は元の通りの麥束に變りました。でイヤンは小鬼を荷車に押しあてゝ、魚から串をぬくやうにして、小鬼から熊手を引きぬいてやり、

『神汝と共にあれ。』と申しました。

小鬼は神の名を聞くや否や、丁度水の上に石が落ちるやうに、地の中へ飛びこみました。

そしてあとには一つの穴が殘つてゐました。

イヤンが家へ歸つた時に商賣人のタラスがその妻君と一緒に夕飯を食べてゐました。タラスは借金を踏み倒して、イヤンの所へ逃げて來たのであります。タラスはイヤンを見て、

『私はお前と暫時同居したいのだが、私と家内を養つてくれ。』と横柄に申しました。

『あゝ、いゝとも～。』とイヤンはいつて、外套を脱いで長椅子に坐らうとしますと、タラスの妻君は、

『私はこんな肥料の臭ひのする百姓と一緒に御飯は戴けないわ、まあ、汗臭いこと。』と顰めしかめましたがイヤンは一向平氣な顏をして、『いゝとも～、私はどうせ馬に飼草をやらにやならんから。』といつて一切のパンを持つて、外に出て行きました。

（五）

その次の日、商人のタラス掛りの小鬼は、仲間を助けるために朝早くから、野原へ來ましたが、仲間が見えないで、切れた小鬼の尻尾が半分と、地面に穴が二ツあいてゐるだけでした。小鬼は「これはてつきり、仲間どもに何か惡い事かできたに違ひない」と考へながら前方を見ますとイヤンが森で樹を切り倒して居るのが見えました。イヤンは兄達が同居するので家が狹くなつたので、兄達の命令で家を建てるために森へ樹を切に來てゐたのです。

で、小鬼は森へ走つて行つて樹の上に登つてイヤンの仕事を邪魔し始めました。イヤンは一本の木を根本から切り離しましたが、それが屹度地に倒れる筈だのに、斜に倒れかゝつて、他の樹の小枝に引掛つてどうしても倒れません。イヤンはそれを外すために長い棒をこしらへて、やつとの事で樹を地べたに倒すことが出來ました。

一本の樹を切る毎に同じことが起つたからイヤンの骨折は大變でした。そのため夕方までに五十本の樹を切るつもりでしたが、たつた十本も切らないうちに日が西に沈みかけて參りました。イヤンはもう疲れ切つて、斧を樹に打ちこんだまゝ、どつかと腰を卸して休みました。これを見た小鬼は、

『たうとうくたびれて、休みやがつたナ、これで奴も仕事をやめるだらう。』とさゝやきながら、樹の枝に跨つてグス～と笑ひました。しかし、イヤンは直き立ちあがつて、斧を引き拔きざま、樹の反對の側に力まかせにグワンと打ち込みました。樹はどつと倒れましたが、小鬼は身を轉ず隙がなく樹と共に地に倒れて枝に手を挾まれて、ばた～蹈きました。

『ヤーまた小鬼か。』とイヤンはいつて、斧を振り上げて打ちおろさうとしました。けれども小鬼は、

『どうか打ち殺ろさずに助けてください。あなたのいふことなら、何でもして上げますから。』といひました。

『貴樣に何が出來るんぢや。』

『あなたの欲しいだけお金をこしらへて上げませうか。』

『そりや面白い、やつて見い。』

『その樹の葉をむしり取つて、兩手で揉むとみんな金貨になつて、地べたに一ぱいこぼれます。』と小鬼はいひました。

イヤンは小鬼のいふ通り五六枚の葉を手の中に入れて揉みますと、それがすつかり きら～光る金貨に變りました。

『こりや面白い手品ぢや、お祭に皆なに見せてやつたら喜ぶだらう。』とイヤンは笑ひました。

『サーもう放してください。』と小鬼はいひました。

イヤンは棒でこぢて枝から小鬼を放してやつて、

『サー行け、神汝とともにあれ。』

といひますと、小鬼は水の上に落ちた石のやうに地の中へ飛び込みました。そしてあとにはたゞ一ツ穴が殘りました。（次號へつゞく）

天狗退治

小島政二郎

一

徳川三代將軍家光の時代に、京都に吉岡兼房といふ劍術の名人がゐました。この人が、天狗を退治したお話があります。

しかし、吉岡先生はもとからの劍術使ではありませんでした。お父さんは、京都の今出川といふところに住む型付職人（着物に模様を染めることを商賣にしてゐる人）で、又兵衛と云ひました。その子で、又三郎といふのが先生の幼名でした。

型付職ですから、又兵衛の家では糊をよく使ひます。で、春のをはりから夏へかけてその糊を舐めにブン〳〵蠅が飛んで來る、うるさいので、誰しもやるやうに、又三郎も、糊の箱の中にはひつてゐる竹筒で、シッシ〳〵追つてゐましたが、いくら追つてもしつこく群つて來るので、しまひには業をにやしてビシッ〳〵と打ちました。ところが、永い間毎日〳〵ビシッ〳〵と打つてゐるうちに、馴れといふものは恐しいもので、いつの間にか、ビシッ〳〵と打つたびに、ポロッ〳〵と蠅の首が落せるやうになりました。

さあ、面白くつてたまりません。お父さんのお手つだひをしてゐるのも忘れて、夢中でビシッポロッ、ビシッポロッと蠅の首を打つてまはつてゐました。それを見たお父さんは、

『これ、又三郎、お手つだひもしずに何をしてゐるのだ。』とお咎めになりました。

『蠅が來てうるさいから、竹筒で首を落してゐるんだよ。ホラ、また來た。こいつの首を落してみるから、お父さん見てゐてごらん。』

『ホホウ、うまいもんだな。しかし、そんなことを覺えたつてなんにもなりはしない。いゝ加減にして、お父さんのお手つだひをしなければいけないよ。』

ところが、ちやうどその時、又兵衛の家の前を吉岡無二齋といふ劍術の大先生が通りかゝつて、この又三郎の蠅打ちの腕前を見て感心をして、父の又兵衛に、

『どうぢや、又三郎をわしにくれまいか。幸ひわしには子がないから、又三郎を子として貰ひ受けたい。型付職人に仕上げたところで仕方があるまい。わしにくれゝば、立派な武士に仕立てゝみせよう。』と云つて、たう〳〵養子に貰ひ受けて歸りました。

この無二齋といふ先生は、その頃での名人と云はれた人で道場を開いて、千人に近いお弟子を持つてゐました。無二齋といふ名は、太刀を持つたら天下に二人とない程の名人だらうといふところから、將軍家からいたゞいた名でした。それ程の人に見込まれて子にもらはれて、それ程の人から劍術を敎へられたのですから、又三郎がどん〳〵うまくなるのは知れ切つた話です。見る〳〵うちに、上達をして、十八の時には、もう吉岡流の劍法の極意に達してしまひました。そこで名を改めて、吉岡兼房と云ひました。父の無二齋は喜んで、

『わしの見た目に間違はなかつた。よい子を養子にして喜ばしい。』と安心をしました。さうして自分は大分もう歳をとつたので、道場を兼房に讓つた上で、生まれ故郷の美作の國へ隱居をしてしまひました。そのあとでも、兼房はなほも、劍術の修行を怠らず、つひにお父さん以上の工夫をこらして、小太刀の名人と呼ばれるほどになりました。小太刀といふのは、一尺三寸しかない短い太刀のことで、短い方が、二尺五六寸もある普通の太刀よりも使ひ易い、働きよいといふのが兼房先生の工夫のあるところでした。

しまひには、天下三名人の一人に數へられ、六十の歳に頭を丸めて入道しました。世間では一口に、『今出川の大先生』と呼んで敬ひました。

二

さて、その頃、美作の國の津山といふところに、天狗が出るといふ噂が立ちました。きのふも旅人が裂かれた、今日もお城下のものが引き裂かれたといふので、毎日大へんな騷ぎでした。なぜ天狗だといふ噂が立つたかと云ふのに、物取りの仕業ならば、着物をはぐとか、懷のお金を奪ふとかしさう

なものなのに、今まで殺されたものゝうち、一人だつてそんな目にあつたものはないからでした。さッと肩から裂かれたまゝとか、ビリ〳〵とお腹を横にさかれたまゝとか、兎に角そのままの姿で倒れてゐるのでした。で、それはテッキリ天狗の仕業に相違ないといふことになつたのでした。さあ、しまひには、日が暮れると、津山の町では誰もこはがつてそとへ出るものがなくなつてしまひました。

（この噂か傳はり傳はつて、たう〳〵しまひに吉岡兼房先生耳のにはひりました。これを聞いた先生は、極樂のお土産に、一つ天狗を見ておきたいものだと思ひ立たれて、ブラリと京都の住まひを立ち出でました。

やがて、津山のお城下について、大和屋といふ旅籠に宿をとりました。先生はお風呂から上つて夜食をたべながら、

『お女中。ちょつと御主人に逢ひたいが、これへ呼んでおくれ。』と云ひつけました。女中は

『はい、かしこまりました。』と、答へて出て行きましたが、間もなく五十四五になる男がはひつて來て

『私が大和屋佐兵衛でございます。』と丁寧に挨拶をしました。先生は

『あ、左樣か。少々たづねたいことがある。この津山に、近頃天狗が出ると聞いたが、それは本當かな。』

『左樣でございます。こゝに三里十八丁の松原がございまして、そこへ時々鼻高樣があらはれまして旅人を眞二つにいたします。それはまるで刀で切つたやうだと承りました。』

『さうかの。しかし、そんなものが出て人に害をすると聞いたら、御領主が天狗を退治しさうなものではないか。お百姓が稅を出すのも、枕を高くして眠られるのは御領主樣のおかけだと思へばこそぢや。またこの邊を通行する旅人も、御領主さまのおかけで無事に通行することが出來ると思つてゐるであらう。それ等の人々を天狗に殺させるといふのは、御領主の行き屆かぬところだな。』

『いえ、それはもう御領主さまから大勢人數が出まして、天狗を見つけ次第退治しなければならぬと探してゐられますが、いまだに見當りませんので……。』

『あゝ、では御領主もこのことについては心配してゐられるのか。實はな御主人、わしは京都の今出川になる野師（見世物師のこと）で、坊主又といふものだが、近頃は見世物も、見る人の方がなか〳〵利口になつて、拵へものを見せてもだまされない。そこでなんぞ生きたもので變つたものはないかと子分を方々に出して探さしたが、これならお客が間違なく來るといふ程のものがない。すると、今度津山に天狗が出るといふ噂を聞いて、これは金儲が湧いて來た、その天狗を生け捕りにして四條の河原で見世物にしたら、百兩ぐらゐはすぐ儲かるだらうと慾張つた考へを起してやつて來たのだが、一つその天狗の出るといふ松原を敎へてくれぬか。』と、先生はわざとトボケたことを云はれました。

先生の身なりが木綿の着物に、例の小太刀を一本さして、皮の袋を一つぶら下げたまゝ、頭は坊主に剃つてあると云ふイデタチですから、誰もこれが天下三名人の一人と云はれる大先生と思ふものはありませんでした。宿の亭主も、云はれたとほり、先生を坊主又といふ野師だとばかり思ひ込んでしまひました。で、目を丸くして

『へえ、天狗さまを生け捕る？　しかし、天狗には羽根が生えてをりますから摑まへることは出來ますまい。それは魔物で鳥などゞは違ひます。』と云ふのを、先生は

『いや、生け捕ることの出來る道具を持つて來た。それはこれだがな……。』と、袋から麻縄を取り出して『この縄に鵜を引いてをいて、天狗に出逢ひ次第、ぱつと投げるのだ。と、羽根にビッタリと附く、驚いてバタ〳〵やつてゐるところを抑へつける。』

『へえ、鵜で天狗さまを捕るとは初めて伺ひました。しかし、親方、それは危いことで、若しも天狗さまに引き裂かれでもしようものなら大變です。まづそんなことはおよしになつた方がよくはございますまいか。』

『いや、わしは變つたものを見せるのが商賣だ。恐ろしいからと云つて何もしずにゐたのでは商賣にならない。』

『成程、それには違ひありませんが、しかし、外のものとは違ひますから……。』

『なあに、心配せんでも大丈夫だ。折角こゝまで來たのだか

ら、今夜早速行つてみよう。』

半分冗談を云つて宿の亭主をからかひながら、天狗の出るといふ松原への道順を詳しく聞いて、さて夜のふけるのを待つてゐました。

やがて、時はよしと思ふ時分に、先生は例の小太力を前に挾んで、皮の袋をブラリと手にさげ、至つて暢氣な恰好をして二階からノソ〳〵降りて來ました。

『女中や。すまんが穿きものを一つ貸して下さい。』

『へえ〳〵、これでよろしうございますか。』と、大和屋と大きく燒印のすわつた庭下駄のやうな下駄を揃へるのを、

『それは重くていかん。そつちにある草履を貸して下さい。』

先生はかう云つて、出された草履を穿いて、

『行つてらつしやいまし。』

『くれ〳〵もお氣をおつけなさつて……。』などといふ大勢の聲に送られて、明るい店先から、暗い往來へと出て行きました。

うしろ姿を見送つた宿屋の亭主は、

『なあ、番頭、世には無法な人もあるもんだな。いくら家業だからと云つて、天狗を生け捕つて見世物にしようなんて、あんまり無法なのにも程がある。』

『全くですね。御領主樣があんなに大勢武藝の出來る人をお集めになつて探しても見つからない天狗樣を、あんな歳よりがたつた一人でなんで退治が出來るもんですか。命を落すのは知れ切つてゐます。』

『あゝ、桑原〳〵。あんな無法者を泊めたといふので天狗さまがお腹をお立てになつて、大和屋へ仇をするやうなことはあるまいか。番頭、今夜はもう店をしめて寢てしまはう。』

亭主は急にこはくなつて、バタ〳〵店をしめ、あかりを消して急いで寢る支度にとりかゝりました。

三

こちらは先生です。お城下を離れると、やがて松原にさしかゝりました。

『さて松原とだけは聞いて來たが、三里十八丁もある松原の一たいどこへ現れるのかな。もつと詳しく聞いて來ればよかつた。仕方がないから、向うの果まで歩いてみよう。』

暢氣なもので、外の人ならこはくつてとても一足だつて中へ踏み込めさうもない眞暗な松原の中へ、ブラ〳〵はひつて行きました。秋の蟲が、ジーと鳴いてゐました。

しばらく行くと、半里も歩いたらうかと思はれるあたりに、さら〳〵いふ流れの音が聞えて、道は土橋にかゝりました。それを渡り切ると、右手に、石のお地藏さまが涎掛をかけて六つ並んでゐるのが黑く見えました。その蔭に、さつきから隱れて誰か人の來るのを待つてゐるものがありました。それは、この津山の御領主の家來で、神影流の劍術の免許とり柏木半助、伴兵藏といふ二人の武士でした。なぜ今頃こんな夜更にこんな物騷なところに隱れてゐるのかと云ふのに、實は二人とも腕が出來るのが自慢で、生きた人間が切つてみたくつて切つてみたくつて仕方がない、で、毎夜のやうにここに隱れてゐては通りかゝる者を誰彼の差別なく切つて落してゐたのでした。ところが、あんまりその切り口が見事なので、天狗に引き裂かれるといふ噂が立つたのでした。しかし、近頃はその噂があんまり高いものですから、トントこの松原を通るものがありませんでした。で、二人ともつまらなく思つてゐる矢先、今夜に限つてバタ〳〵といふ草履の音が聞えました。

『來た〳〵。久振でまた切れるぞ。』と柏木が喜べば、

『おや〳〵、大きな奴だぞ。しかも坊主だ。』と伴も柄に手をかけて二三歩前へ出ました。

『伴、先夜のは貴公が切つたから、今夜は拙者が初太刀をするぞ。』

『いかん〳〵。早いもの勝だ。人間と鯉とは、ピン〳〵生きて跳ねてゐるのを切らなければ面白くない。』

かう云つて二人は爭つてゐましたが、する〳〵と地藏さまの蔭から一足さきに進み出たのは、柏木半助でした。スタ〳〵歩いて來た吉岡兼房の横合から、

『えいッ。』と氣合をかけると一しよに、さッと拔打ちに切りおろしました。

あたりまへの者だつたら、この一太刀で切り殺されてゐたでせう。しかし、こつちは吉岡兼房先生です。白刃の下でヒラリと體をかはしながら、ピシリ相手の小手を打ちました。その早いこと、柏木は思はず手が痺れてポロリと刀を落しました。スキも與へず、伴兵藏がうしろから

『えいッ。』

さッとばかりに切りつけて來ました。吉岡は同じく體を開いて振り向きざまに、その手首を捉へてグイと引くと、タ、タ、タと前へ泳いで出る奴を、足をあげてドンと腰を蹴つたからたまりません。そのまゝドブーンと前の流れへ落ち込みました。それを見た柏木半助は、これはとても叶はぬと見てとつたか、スタコラ逃げ出しました。伴兵藏もあわてゝ流れから這ひあがるが早いか、濡れ鼠のまゝ寒さに顫へながら轉ぶやうに友達のあとを追ひました。

かうして二人は二三丁も夢中で逃げのびましたが、氣がついて見ると、誰も追つて來る樣子もないので、ホッとして、

『あゝ、驚いた。』と云ひ合せたやうに顔を見合せて立ちどまりました。

『一たいなんだらう、あの坊主は……。』と柏木がまづ口を切ると、

『さうさ。天狗ではあるまいか。』と伴が云ひました。

『なに、天狗？』

『うん、どうもさうらしい。』と云ふのは、われ〳〵二人が松原へ出て人を大勢殺めた。そこで天狗の仕業だといふ噂が立つた。それを鞍馬山のほんたうの天狗が聞いて腹を立てゝ、人間のくせに天狗などと名告るのは怪しからん、このまゝにしておいては、天狗の體面にかゝはる、一つ懲してやらう、と云ふのでふいに、現れたのではあるまいか。それでなくば、とてもあんな飛び離れた業が出來るものではない。人間業とは思へなかつたぢやないか。なんと云つたつて、貴公と拙者とは、津山藩では指折りの劍術使だ。それをあのやうに子供のやうに取り扱ふとはどう考へたつて天狗だと思ふ。』

『成程、さうかも知れない。拙者が切り込んだのをヒラリ體をかはして、パッと小手を打つたところなんざア目にもとまらぬ早業だつた。』

『拙者などは流れへ蹴落されたが、蹴落されながらもその手練に感心した。本家本元の天狗に出逢つては叶はんよ。時に、拙者は寒くつて叶はん。骨まで浸みわたるやうだ。しかし、それよりも困つたことには、流れて落ちる拍子に、腰のものをどこへか無くなしてしまつた。』

『いや、さう云へば、拙者も小手を打たれた時、どこへか落してしまつた。困つたな、あれは殿さまから拜領の貞宗だ。もしも天狗の手にはひつて、あれを證據に役人へ訴へ出られたら、これまで大勢人を殺めたのが拙者であることが露顯してしまふ。』

『拙者とても同じことだ。お祖父さまの代から家に傳はる志津三郎兼氏の鍛へた刀だ。ふだんから自慢に大勢の人に見せまはつてゐるから、若し天狗に訴へ出られゝば、一目で知れてしまふ。そんなことになつては取りかへしが付かぬ、どうだらう探しに引つかへしてみることにしては……。多分もう天狗は鞍馬山へ歸つたらうと思ふが……。』

かう、相談をして、二人はこは〳〵六地藏のあたりまで引つかへして來てみました。

『いゝ鹽梅に、天狗……いや、天狗さまはもう立ち去られたらしいぞ。』と二人は大喜びで、

『たしかにこの邊で落したと思ふのだが、暗くつて分らぬ。どういふ譯で人間の目は暗いところでは役に立たないのだらうか。そこへ行くと、犬などはよく見える。萬物の靈長たる人間が犬に劣るとは情ないわけだ。刀や刀、どこにゐる……。』

こんな一人言を言ひながら、二人は地面を舐めるやうにして探しまはりましたが、見當りませんでした。その時、ふいに六地藏の蔭から、ぬつと大坊主の影があらはれました。

『天狗まゐつたか。』と大聲でどなりつけたかと思ふと、バラバラと追つて來ました。二人は

『ソラ出たア……。』と云ふが早いか、踵で背中を蹴るやうにして逃げ出しました。

或辻堂の前まで逃げて來た時、二人はもう大丈夫だからと

愚つて振りかへつて見ると大坊主はなほも追つて來ました。二人はあわてゝしまつて、逃げる勇氣も消え失せ、いきなり辻堂の緣に飛び上るが早いか、格子を押し開いて中へ姿を隱しました。

『なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。何卒この大難を助けたまへ。』とブルブル顫へながら手を合せて祈りました。

ところが、驚いたことには、同じ辻堂の奥の方から

『やかましい。靜かに致せ。』と叱りつけるやうな聲が聞えて來ました。二人は縮み上つて『ハ、ハイ』となたかお出でてございますか。』と、柏木が尋ねると、

『あはて者め。人のゐるのが分らんか。夕方からこゝに休んでゐるのぢや。つい今し方、トロ〳〵と眠つたかと思つたに、貴樣達がまゐつて騷ぐので、目がさめてしまつたわ。なんでその方達はさう慌てゐるのか。』

『實は只今この先の六地藏の前にて天狗に出逢ひ、すんでのことに引き裂かれようといたしましたのを、漸くこれまで逃れてまゐりました。』

『なに、天狗に出逢つたと？　さて〳〵羨ましい奴等ぢや。

定めし愉快であつたらう。』

『いえ、どう致しまして。命からゞ〳〵逃げてまゐりました。』

『ハテサテ嘸い奴等ぢや。拙者などはわざ〳〵紀伊の國から天狗退治に出向いてまゐつたものぢや。今夜で三晩、この辻堂で夜をあかしをるが、殘念なことに一度も天狗に行き合はん。今夜ももう少し夜のふけるを待つて、天狗さがしに出かけやうと思つてゐたところぢや。』

すると、その時、例の大坊主はスタ〳〵辻堂の前までやつて來て、『これ、天狗ども。この辻堂の中に逃げ込んだであらう。出てまゐれ。發するところ、貴樣達は烏天狗だな。烏天狗出て來い。』

この聲を聞くと、二人はブル〳〵顫へながら小さくなつて辻堂の奥に向つて、

『あれ〳〵、只今そとへ天狗がまゐりました。どうぞ退治てわれ〳〵をお助け下さい。』

『よし、拙者が退治てつかはす。見てゐろ。』と奥の人は承知をして、肩をいからし拳を固めて出て來ましたが、

『天狗、そこ動くな。』と云ふより早く、さッと格子をあけて緣に飛び出しました。しかし、緣に立ちはだかつたまゝ、暫くぢつと大坊主を見つめてゐましたが、

『ハテ、闇なのでよくは分らんが、そこにお出での方は今出川の老先生ではござらぬか。』と靜に聲をかけました。

『いかにも拙者は今出川の吉岡象房でござるが、そこ許は？』

『拙者は紀州の關口彌太郎でござる。』

『おゝ、久振で珍らしいところでお目にかゝるな。』

柏木半助、伴兵藏の二人は、この二人の名告を聞いてアッと驚きました。さうでせう、一人は天下三名人の一人、一人は柔道の先生として天下に隱れもない大家でした。

その時、吉岡は『關口殿、この辻堂のうちに若侍が二人逃げ込んだでござらう。彼等は罪なき人々を切つて刀試しをいたした不埒者でござる。さうとは知らぬ當所の者どもは、それを天狗の仕業と申してをる。拙者は不思議に存じ、當地へ參つてみればこの始末ぢや。二人の烏天狗どもをお引きわたし下さい。眞二つに切り捨てくれる。』

『いや、實は拙者も天狗退治にわざ〳〵紀州から下つてまゐつたのでござる。こゝで天狗に逢つたのは幸ひ、先生と一羽づつ退治いたしたいと存ずる。一羽を拙者にお別け下さい。』

これを聞いた柏木、伴の二人は、眞蒼な顏をしてそれへ這ひ出して來て、

『兩先生、刀の切れ味を試したいと存じまして、兩三人のものを切り捨てましたが、只今すつかり自分の行を後悔いたしました。格別のお慈悲をもつて一命はお助け下さるやう、偏

にお願ひ仕ります。』と兩手をついて詫びました。

すると、吉岡象房は、それには返事もしずに、

『これ〳〵、烏、火をこしらへろ。大分寒くなつて來た。』と云ひつけました。柏木、伴の二人は、

『かしこまりました。』と答へて、枯れ枝を集めて火をつけました。すると、吹く風にドッと燃え上つて、あたりが明るくなりました　柏木と伴とはその明るい中で顏を見られるのを恥ぢて目を付せて控へてゐました。それを見た關口彌太郎は、

『老先生、この二人も心から自分達のしたことを恥てゐるやうに見えます。今更二人の命を取つたところで、切られたものが生きかへる譯でもござらぬ。よく〳〵戒めて助けてやつたらいかゞなものでござらうか。』

『許し難い奴等なれど、貴殿のお言葉もあること故、特に許してやりませう。これ、烏。少しばかり劍術が出來るのを鼻にかけて、大事な人間の命をとるなどとは、なんたる畜生にも劣つたやり方だ。以後かやうなことを行ふと、今處こそほんたうに引き裂くぞ。』

『はい、決して二度と再びこんな眞似はいたしません。』

『よし、分つたら行け。』

一禮して二人が立ち上らうとするのを、關口は兩手に一人づつの頸首を引ッつかんだかと思ふと、

『それ、行け。』と、一振り振つてパッと投げました。と、二人の體はくる〳〵と三度空中で廻つたかと思ふと、まるで鞠か何かのやうに、ビュウと風を切つてどこへともなく見えなくなつてしまひました。（をはり）

ハンニバルの話

楠山正雄

二

戰爭をするときに一番大切なことは、正確な地圖をもつてゐることと、進軍してゆく道々について色々のことを詳しく調べておくことです。萬事にぬかりのないハンニバルがそのことを考へないはづはありません。いよ〳〵アルプス山も眼前に迫つてまゐりますと、よく訓練された土人達をやつて、アルプス山みどう越えたが一番近道かを調べにやつておきました。

ローヌ河に沿つてだん〳〵と進んで行きましたカルタゴ軍は、四日目にローヌ河の支流であるイサレ河の口につきました。この地方にゴール人の一部落がありまして、丁度そのころ他の部落と戰爭中でしたが、ハンニバルはそれを助けて勝たせてやりました。部落の酋長はそのお禮に、自分の領土内に出來た服地とか皮靴などいふいろ〳〵のものをハンニバルに獻じました。カルタゴ軍はかうした必要品を手に入れたばかりでなく、數度の劇戰のために損傷した武器の代りをも等しく彼等から受けることが出來ました。酋長は尙ほその上にアルプス連峯のうちのやゝ低い山でキャットマウンテンといふ峯への攀り口まで案内して來てくれましたが、そこから別を告げて歸つて行きました。

ここまではどんなに苦しかつたとはいつてもまだ本當の困難ではありませんでしたが、これからいよいよハンニバルの困難は始まるのです。一體彼の率ゐてゐる軍隊は、たゞ一の人種ではありませんでした。スペインから來たイベリアン族、アフリカから來たソビアン族とヌミディアン族、南部フランスから來たゴール族といふやうに、澤山の種族が一つになつてゐるのでした。したがつて夫々生活の習慣もちがへば戰爭の遣り方もちがふ、信ずる神樣もちがふといふやうな始末でしたが、ハンニバルに對しては、皆心から服從し萬事に信頼しきつてゐました。そして彼の云ふまゝにどこへでもついて行くといふ固い決心をもつてゐました。しかし、いよいよ眼の前に、默々としてつつ立つてゐる生れて初めての高山を見、今自分たちがその中に突進し行くのだと思ふと、思はず皆も身震ひをしました。

登り始めて少しばかり來たときです。行く道に、この山に住むゴール族が待伏せをしてゐて、今にもカルタゴ軍の頭の上から岩を投げ下ろし、不意打ちに打つてかからうとしてゐることが分りました。ハンニバルは直ちに進軍を停め、偵察隊をやつて敵の隱れ場所とその動靜をさぐつて來るやうに命じました。やがて偵察隊が歸つて來て、彼等は夜は決して戰はないで、近くの村落まで歸つて朝まで休むといふことが分りました。それでハンニバルはその日暗くなるや否や輕騎隊をやつて一擧に敵陣を占領してしまひました。殘りの軍隊は翌る朝早く進み出すことになりました。

朝になつて蠻族たちが歸つて來て見るとこの始末ですから怒るの怒らないので、すぐさまカルタゴ軍の行李運搬の馬をおそひました。さんざ荒地を通つて來て非常に疲れてゐた馬は、恐れやら負傷のために、我勝ちに列を亂し始めましたので不意を喰つて崖下に落ちたり押しあつて足を滑らせたりしました。それを見たハンニバルは忽ち進んで蠻族を追ひ退けました。そして彼等の要塞としてゐるところも占領してしまひました。そこでは澤山の糧食や馬をうることが出來ました

一日間の休息の後又進軍はつづけられました。この中には蠻族から降參したものが少し加はつてゐました。彼等は牛と羊とを贈物としてハンニバルに降り、尙ほ次の峯までの道案内をしようと申出たのでありました。しかしハンニバルは、彼等のいふことには餘り信頼しませんでした。彼は常に彼等に嚴重な監視の眼をつけてゐました。といつて誰にも他に案内をさせるものがありませんでしたから、彼等の望むまゝにさせて出來るだけ彼等の裏切りの場合に備へるためそれぞれの手管をきめ、騎兵隊と荷物隊は前方に、重騎隊は殿において進んで行きました。

軍隊が深い谷合ひの狹い道にさしかかつたとき、ゴール蠻

族は、案の狀俄かに石を投げ岩を抛つて手向つて來ました。そして彼等はいつもの習慣を破つて暗くなつてもその日は戰ひをやめませんでしたので、散々な眼にあつて、夜明頃にはもう一つの姿も見えませんでした。それからのちは邪魔するものもなくて、やうやくにしてアルプスの頂上につくことが出來ました。

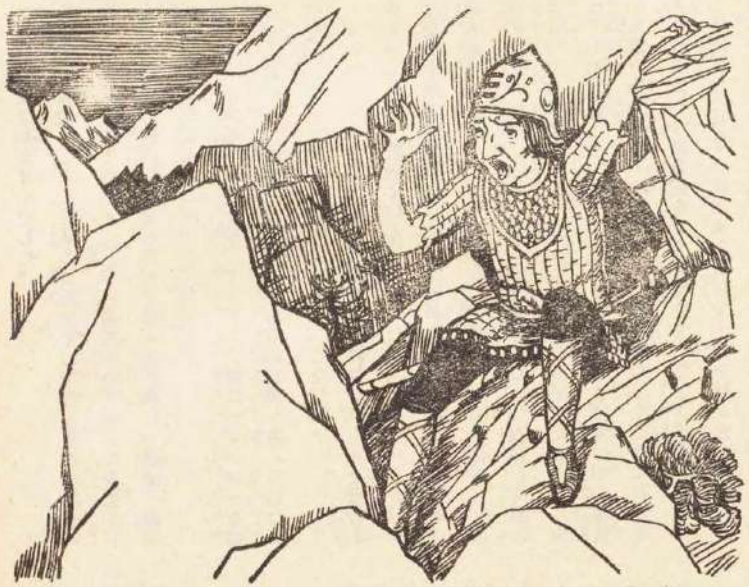
疲れ切つた人も動物もそこで二日間休息を取りましたが、そこは山の中ではあるし、そのときはもう十一月の寒い最中のことですから、やけるやうな太陽の下や砂漠の砂で育つたものばかりのカルタゴ軍にとつては、とても堪へきれないことでした。しかし、「もう直ぐに我等はこの困苦の報酬をうけることが出來る、あのはるか下に見えるイタリアの肥沃な平野がそれだ。私を信ぜよ。」といつて勵ますハンニバルの言葉には一人殘らず元氣のいい叫びをあげて應ずるのでした。

ハンニバルは叫びました。

『吾々は今、イタリアへの壁ともいふべきアルプス山をのぼつて來たが、それは同時にローマの壁を越えやうとしてゐるやうなものだ。もう大きな困難は過ぎ去つた。これからは山を下りるばかりだ。そして平野で一戰爭か二戰爭してローマを征め落すのだ。』

ハンニバルの言葉はしかし間違つてゐました。彼は部下のもの、にもう大きな困難は過ぎ去つたといひましたが、實は山を降りるのは却つて登るより困難なのです。

雪のために道は埋められてしまつてゐます。そしてその下ではあらゆるものが固く凍つてゐます。氷のところどころにある危險な孔も岩も雪のため全く表面からは見えませんでした。それから又地滑りのために通路の大部分が崩れ落ちたりしてゐます。馴れない人間や動物が不意を喰つて、眞逆樣に崖から轉げ落ちたりするのは當然のことです。前にはどうやらやつと通れてゐた道も今は段々と狹くなつて行きます。たうとう軍隊は進軍をやめなくてはなりませんでした。そして一人の輕裝した勇敢な兵士が只一人行つて、道がこのさき又廣くなつてゐるかどうかを見てくることになりました。しかし行けば行くほど惡くなるばかりでした。彼は岩の裂目に喰ひ込むやうに生えてゐるわづかばかりの灌木に縄り付き乍らやうやくにしてあるところまでやつて來ました。壁のやうに險しい絶壁の面を下へ下へと降りて行くのでした。それから彼は眞向ふの方に、殆んど千尺もあらうと思はるるやうな近頃の地滑りで出來た崖があるのを知りました。以前は道であつたところが、そのために全く塞がれてゐて、そこに立ち塞つてゐる岩を退けない以上、軍隊はもとより人一人だつて通り抜けることは出來ないのでした。



彼は又やうやくにして元來た道を引返して行き、詳しくハンニバルに右のことを報告しました。そこでハンニバルは忽らある方法の實行に取りかかるのでした。彼はある爆發性のものをもつて行つて、――それはどんな種類のものであつたかわれわれは知ることが出來ません――それで岩を爆破してそこに漸く名ばかりの道をつくることが出來ました。それから兵士たちが岩を取り除けるのに全一日を費してやつと食糧品を積んだ牛たちや、半分飢ゑて弱り果ててゐる馬たちを用心しながら下の岩合ひに降ろすことが出來ました。そこには少しばかりの草地が見出されました。それで馬たちを放してやつて自由に食物をとらせました。そしてそこに陣營を張りました。

道は馬や牛を通すだけの廣さになりました。がそれでもまだ象を通すには狹すぎましたので、尙ほ三日を費して象たちを通すやうにすることが出來ました。象は非常に弱つてゐて、皮膚は骨にだぶだぶについてゐるといふふうで、何の抵抗もしませんでした。

やがて全軍はそろつてポー河の谷合ひにゐる味方のゴール族の方へ進んで行きました。

ハンニバルがカルタゴ本國を出發してここに來るまで、五ケ月と十五日かゝりました。そしてこの間に非常な犧牲を拂

はなければなりませんでした。

本國からつれて來た五萬の步兵はそこではもう八千ばかりのイベリアン人とスペイン人、一萬二千のリビアン人とそれから、六千の騎兵だけでしたが、たゞ不思議にも象は一頭も失はれてゐませんでした。

ローマの大將スキピオが、アルプスの麓にハンニバルを待伏せしないで此處から北へポー河沿岸の要塞へ進んで行つたことは、カルタゴ軍にとつて仕合せなことでした。

インスブレスといふところのゴール族は、ローマを憎む心からハンニバルと固く結んでゐました。で、ここでハンニバルは全軍を休ませ十分眠らせることが出來ました。そのために馬も象も赤丸々と肥えて來ました。兵卒たちも、この二三週間の苦しかつたことや、嚴しい寒さと、ぬれた衣服が身體に凍りつくやうな目にあつたこともすつかり忘れてしまつたやうでした。食べものも、アルプス越えのときは雪の中に糧食の大部分を失つて、喰ふや喰はずで辛棒しなくてはなりませんでしたが、今は身體を十分休養させることが出來た上に、この肥沃たイタリーに出來た食物で十分お腹を充たすことが出來たのです。

全軍は又勢ひづいて、いつもハンニバル方のゴール族と戰爭をしてゐたチウリンといふ町を一攻めに攻め落してしまひました。

ローマでは、ハンニバルがアルプスを越えてイタリアの地に入つたと聞いて上を下へと騒ぎました。ローマ人はスペインでハンニバルと戰つてその勢力を押へやうと考へてゐたのですから尤なことです。

で、ぐずぐずしてゐるわけには行かないものですから、早速軍隊を呼び返してハンニバルに當らせることにしました。

この命令を受けとると、早速チベリウスといふ將軍は遠征軍の一部を率ゐてローマに歸つて來ました。そして殘りの分はアドリア海岸のリミニへ行くやうに命じ、一人一人に、何日の就眠時までにはどんなことがあつてもそこにつくといふことを誓はせました。

みなさん、試みに地圖を擴げてごらんなさい。そしてこの遠い距離をわづか四週間で渡つて、立派に誓を守つたことを考へてごらんなさい。丁度毎日十六哩づゝ進んだことになりますが、全く驚く外はないではありませんか。

さて一方スキピオはこの時、プラセンチアに陣取つてハンニバルに備へてゐましたが、それがハンニバルに取つて不利であることは勿論です。

でハンニバルはしきりとスキピオを平野におびき寄せやうとしました。なぜなら平野では騎兵隊が十分活動することが出來ますから。ところがスキピオは、何と思つたのかここを去つて、やがてポー河を渡つてチンノ河まで進んで來ましたそしてこの河に橋を作り始めました。

今はもう兩軍は眼と鼻の間位に對ひ合つてゐるのです。ローマを取るか、それとも今までの艱難辛苦も水の泡になつて全滅してしまふか。ハンニバルの運命は、全くこの一戰にあるといつていい位です。

ハンニバルはここで部下の將卒たちを十分鼓舞し力づけなければならないことを知りました。そしてハンニバルの取つたその方法は實に變つたものでした。

話は少し前に戻りますが、アルプス越えのときカルタゴ軍をめがけて岩を拋つて手抗ひをしたもののうち、いくたりかの若いゴール人を捕虜にしておきました。

他の大將ならば、當然かういふ者はその場で打首にするのでせうが、ハンニバルは、無益なことに慘酷なことは決してしませんでした。たゞ鎖で縛いで、逃がさない程度にして生かしておきました。

この捕虜を今ハンニバルは役立せるのでした。

彼は全軍を圓形に並ばせてその眞中に捕虜のゴール人をつれて來させました。彼の傍のほどよいところに、嘗ては彼等の酋長が着けてゐた甲冑の幾揃ひかと、一積みの劍、それに馬も繫がれてありました。

ハンニバルは簡單に全軍に對つて演說をしたのち、若者たちを前に呼んで、見事勝つて名譽ある生をうるか、立派に斃れて名譽ある最後をとけるか、お互ひに勝負をして自分の運命を決せよ。それとも今まで通り捕虜でおりたいかと申しました。

すると彼等は喜びの聲をあげて、名譽ある勝負をしようと答えました。

ハンニバルは申しました。

『よろしい。ではお前たちは籤を引いて相手を定めよ。そして一組のうち勝つたものは甲冑と馬と劍を與へて俺の部下の一人にしてやる。』

押しあひつこするやうにして籤を入れた壺に近づいて行き捕虜たちはそこに立止つて兩手を高く差し延べて自分自分の勝利を祈りました。

それはいつも彼等のする習慣でした。籤を引き終ると組が定まつて、銘々は相對し合つて、全軍注目のうちにいよいよ

搭闘は始まりましたが、やがて闘ひが終ると、土の上には闘士の半分は死骸となつて横はつてゐました。全軍の將卒はぢつとその名譽ある死者の上に尊敬と羨望の眼を放しました。

この時代、死といふことは恰かも友達にでもあふやうに氣易く思はれたのです。それに反して不名譽な生き方をしやうなどと思ふものは滅多にありませんでした。

ハンニバルはいひました。そしてその言葉は丁度古い聖書物語にでも出てくるやうな厳かな、そして感激におののかないでゐられない力をもつてゐました。

『今見たこの捕虜たちの搭闘は、丁度吾がカルタゴと仇敵ローマとの間の勝負を見るやうなものだ。勝てばローマ軍といふ賞を受け、敗ければ死といふ天冠が與へられる。さあ行かう。晴の戰場へ。勝つてローマをうるか、死して名譽の天冠をうるか。』

この言葉を聞いて、誰か血が湧き肉が躍る思ひのしないものがありませうか。

必死の覺悟と希望に満ちた面とはどよめくやうに全軍に漲りました。（つゞく）

水滸傳（第八回）

宮島資夫

前號の梗概。六十二斤の鐵の棒を振り廻すので有名な豪傑魯智深は、大相國寺へ來て晶の番人をすることになりましたが、始終この晶へ來て泥棒をしてゐた近所の若い衆達は、新しい番人の來たのを知つて、一つひどい目に遇はせてやれと大勢して出かけて行つた所が、あべこべにドブへ投げ込まれてしまつたので、すつかり降參してしまひ、魯智深の豪勇に感心して、毎日はいよ／＼魯智深の放れ業を見せて貰ふことになりました。

魯智深の怪力

その翌日例の悪戯者達は二三十人集つて、「昨日の和尚さんに、何か持つて行つてよく謝罪らなければ悪いだらう」といろ／＼相談をしました。さうして「それでは皆してお金を出し合つて酒と肉を買つて行つて、もう一度よく禮をしておかう」といつて、皆は澤山のお酒と肉を持つて魯智深のとこに集つて來て、

「昨日は大變申譯のない事をしました。今日は改めておわびに來ましたから、どうか御勘辯なさつて下さい」と謝罪りました。魯智深はそれを見ると、

「お前達は何だつて餘計な金まで使つてそんな事をするのだ」と訊きました。

「私達は幸ひにして、あなたのやうな強い方にお目にかゝる事が出來たのが嬉しいので、これから後もおちかづきにして頂きたいと思つて伺つたのです」と一同の者がいつたので、魯智深も大變に喜んで、それから皆なは魯智深の部屋の中で大酒盛を始めました。するとその時、酸棗門のそばにある大きな楊の樹の上に、澤山の鴉が集つてきて、

「があ／＼、があ／＼」と鳴いてその

騒しさと云つたら、話をしてゐる人聲も聞えないほど堪らないものでした。

『何といふ騒々しい鴉だらう』と魯智深がいひ出しますと、

『いや此頃あの門前の楊の木に、鴉が新しく巣を作つて、朝から晩までちつとも鳴き止まないので、此邊の人は誠に迷惑してゐるのです』とその中の一人が云ひますと、

『今日は丁度かうして皆な集つてゐるのだから、一つあの鴉の巣をぶちこはしてしまはうぢやないか』とまた一人が云ひました。何しろ皆なお酒に醉つてゐましたし、それにどれもこれも悪戯な人間ばかりでしたから、

『よし〳〵、それは面白い』といつてぞろ〳〵そとに出て來ました。すると魯智深も、面白いことに思つて、あとからついてやつて來ました。やがて皆なは楊の木の下に集つて、上の方を眺めてゐましたが、

『これはどうも梯子がなければいけないな』と一人がいふと、

『いや俺が登つてとつてくるから大丈夫だ』といつて、また一人が楊の木に登らうとしました。すると魯智深は、

『こら〳〵、お前はもう酒に醉つてゐるのにそんなことをしたら危いし、第一登つて行つたらあの澤山の鴉に突つかれてどうなるか判らない。それよりも私がこの木をいま引抜いてやるから』とその男をかき退けると、楊の木の下に近寄つて、太い幹をうんとかゝえました。そして地も裂けるやうな滿身の力をこめて、

『まいッ』と云つて一搖りゆすると、流石に大きな楊の木も、ぐら〳〵と搖ぎ出し、再び力を籠めて『うん』と引き抜くと、さしもの大きな木が根元から、ぐつすりと抜けてしまひました。

魯智深の周圍に集つて眺めながら、あんな大きな事を云つたつて、その大木が抜けるものかと心の中で思つてゐた人達は、今更その大力に感心して、一時にどつと聲を上げてほめそやしました。するとその中の一人が、

『あなたの大力のほどには本當に驚きました。こんな事は繃漢樣か何かでなければ出來ることではありません』といひますと魯智深は笑つて、

『此位の事はほんの一時のなぐさみだ明日また來て見なさい。私の本當の武藝を見せてやるから』といつて、再び部屋に歸つて、皆して御酒を飲んでゐました。それからと云ふものは、近所の悪戯者もますゝ魯智深を尊敬して毎日お酒や肉を持つて來ては御機嫌を伺ふので、魯智深は大變樂々と暮してゐました。或る日魯智深は、かう毎日皆なから御馳走になつてゐては氣の毒だから、今日は一つ自分が御馳走してやらうと思つて、使ひを城下にやつて澤山の御馳走を買つて來させて、近所

の者を呼び集めました。

丁度四月の末の事で、大變にお天氣も好く暖かな日だつたものですから、門のとこの木蔭に莚を敷いて、例の二三十人の者を集めて、大きなお椀でお酒を飲んでゐました。やがて皆もだんだん醉つてくると、

『先日和尚さんは、今度こそ自分の武術を見せてやると仰有つたが、その後まだ拜見することが出來ませんでしたが、今日こそ是非一つ見せて頂きたいと思ひます』と一人が進み出て云ひました。魯智深はそれを聞くと、

『よし〳〵』といつて、自分で部屋へ行つて、長さ六尺もある、六十二斤の鐵棒を持つて來て、

『ちや誰でもこれを持ち上げて見ろ』と皆の前に置きました。そこにゐた者は交る〴〵にその棒を持ち上げて見ましたが、誰一人としてそれを自由にする事は出來ませんでしたので、

『本當にこんな棒を使ふ人は、兩腕に水牛のやうな力がなければ出來るものではない』と云つて口々に感心してゐました。

すると魯智深はその棒を取り上げて輕々と前後左右に振り廻し、いろ〳〵な棒の祕術を使つて見せました。その有樣の絶妙なこと〻いつたら、身に一點の隙もなく、聲に應じて電光のやうに棒のひらめく有樣は、誠にその道の名人でなければ出來ない事と思はれました。

魯智深はだん〳〵と棒を使つてゐる中に、精神は全く棒と一體になつてしまつて、棒と人とのけじめさへわからない位になつてしまひましたから、見てゐる人は聲を呑んで、たゞその術に醉はされたやうになつてしまひました。するとその時に、門の處にさつきから、一人の役人らしい人が立つて眺めてゐましたが、餘り魯智深の術が巧みなので、

『いや實にうまい』と思はず聲を放つてほめました。その聲を聞くと魯智深はひよつと手をやめてその方を見ますと、そこには身の丈け六尺近く、頭は豹のやうな形をして、眼は鳳のやうに明かで、虎鬚を生やした三十四五の人が立つてゐました。

『あの人はどういふ人だ』と魯智深はそばにゐた男に尋ねますと、

『あれこそ、東京八十萬禁軍の槍棒教頭、豹子頭の林沖といふ人です。あの人があんなにほめる上は、あなたの棒はきつと大した上手に違ひありません』と云ひました。

『それならあの方をすぐとこゝへお呼びして來い』と魯智深が云ひますと、

『いやそれには及びません』と林沖は答へて、すぐと魯智深の前に來てお辭儀をしました。そこで魯智深は林沖をさつきの莚の所に連れて來て、お酒を飲みながら今までの自分の身の上のことなどを色々と話しました。そして、

『私はずつと以前東京に來た時に、あなたのお父さんの、林提轄にお目にかかつた事もありました』と話をしますと、林沖も大變に喜んで、二人はそこで盃を酌み交して兄弟の約束を結んでしまひました。

それから後、林沖は毎日のやうに魯智深のとこへ尋ねて來ては、二人して武術の事を話したり、天下の形勢を論じ合つて樂んでゐましたが、その中に林沖の身の上に大變な間違ひが起ることになりました。

それは、宋の朝廷にゐて惡智惠を振つて、天子のお氣に入りとなり、それがために政治向のことも何もかも亂れさせてしまつてゐる高休といふ惡者の養子で、高衙内といふ男が、ある日醉つて林沖の夫人に失禮な眞似をしたためた、それを根に持つて、どうかして林沖を殺してしまはうと企んだ事から始つたのでした。けれども、そんな事とは知らない林沖は、ある日魯智深と二人でお酒を飲んでから、好い心持になつて二人で町を散歩してゐました。すると一人の大きな男が二人のあとからついて來て、

『私は實に立派な寶劍を持つてゐるのだが、まだ誰も知つてゐる者がない。私のこの寶劍を鑑定する者があれば、すぐその人に賣つてやるのだが』と聞えよがしに獨言を云ひました。

林沖は變なことを云ふ奴があるものだと思ひながら、構はず歩いて行きますとその男はまた、

『この東京の中でも誰もこれを知らないのかな。これを知るものがあれば、今すぐにでも賣つてやるのだが』と幾度も幾度も云ひました。

林沖は餘りうるさくその男がつき纏つてくるものですから、思はずひよつと後ろをふり向くと、その男は世にも珍しい立派な刀を拔いて、振り廻してゐるのでした。林沖はそれを見ると、もう堪らなく欲しくなつたものですから、

『お前はその刀を賣るといふが幾千で賣るのだ』と尋ねますと、その男は

『二千貫ならいつでも賣ります』と云ひました。

『二千貫といふ大金はいま私の手許にないから、一千貫ではどうだ』と林沖はねぎりました。男は少時ぐづ〳〵いつてゐましたが、

『私はいま本當に金に困つてゐるから、先祖傳來のこの名劍も賣るのですあなたも金がないと云はれるなら、一千貫に負けておきませう』といつて、林沖の家まで一緒に來て、お金を貰ふと刀を渡して歸つてしまひました。

林沖はその男が歸つてしまふと、また刀を出して平にしたり透して見たりして眺めてゐましたが、見れば見るほど立派な劍なので、大變好いものを買つたと思つて非常に喜んでゐました。

すると二三日たつて、高休の所から二人の使ひの者が林沖のとこに來て、

『こんどあなたが大變好い刀をお買ひになつたといふ事を高太尉がお聞きになつて、自分の寶劍と比べて見たいから、是非一度持つて來て、見せてくれといふ仰せです』と云ひました。

林沖もかねて高太尉の所には、世にも珍しい名劍があると云ふことを聞いてゐたものですから、すぐとその刀を持つて二人のあとについて行きました。

やがて林沖は高太尉の屋敷に來ますと、

『太尉はさつき奥座敷においでになつたからこちらへいらつしやい』と二人は林沖を奥の方へつれて行きました。けれどもそこにも太尉の姿が見えないので、

『おや、それでは向ふかな』とまた別の部屋に連れて行つて、『こゝで少時お待ちなさい。すぐに大尉をおよびして來ます』と云つて、二人はどこかへ出て行つてしまひました。

林沖はその部屋で少時待つてゐましたが、いつまでたつても太尉が來ないので不思議に思つて、向ふにある簾の中を覗いて見ますと、大きな額に青い字で、「白虎節堂」と書いてありました。それは、林沖よりずつと上役の人

達でなければ入れない、大事な軍事上の事だけを相談するところの部屋だつたのです。

林冲はこれを見ると驚いて、――ここは私のゐられる所ではない――と大急ぎで出やうとすると、そこへ高太尉がすか〳〵と入つて來ました。

林冲は慌て、その前にお辭儀をしますと、高太尉は聲を荒らげて、

『私はお前を呼びもしないのに、何故この白虎節堂に入つたのか。それにお前がさうして手に劍を携へてゐる上は、私を殺しに來たに違ひあるまい』と云ひました。林冲は益々驚いて、

『私はあなたが、劍を比べて見るから持つて來いと云はれたのでこゝに來たのです』と色々と辯解をしましたが、もとより太尉の力はかねて企んだ事ですから、どうしても許しませんでした。

その中に五六十人の兵士がばた〳〵と馳けて來ると、林冲を縛つて、連れて行つてしまひました。

高休は最初林冲を生捉るとすぐに切り捨てやうとしましたが、林冲がいろいろと言ひわけするので、とう〳〵裁判に廻しました。そこでも林冲はいろいろ取調べを受けましたが、劍を携へて白虎節堂に入つたといふ事だけでも罪に當るので、遂に鞭で二十打つた上額に罪人の刺をして、滄州といふ所へ流されてしまひました。

林冲はかうして身に一點の罪もなかつたのですが、高休の養子の惡い心から、親に分れ妻に別れて遠い滄州といふとこへ罪人として送られる事となつてしまつたのです

高休の方から廻し者が來て、林冲に際さへあれば殺してしまはうとするので、林冲はついに或る雪の降つた晩に、それ等の惡者三人を切り殺して逃げ出す途中で、豪傑の小旋風柴進に會つて匿まつて貰つてゐました。

しかしかねて罪人であつた上に、役人を三人も切り殺して、その上に家まで燒いて逃げて來た人ですから、もうどこへもこゝへも行く事は出來ないやうになつてゐました。それでかくまつてくれてゐる柴進が、

『あなたはこれからとても普通の人として世の中を渡ることは出來ません。それで私が手紙を書いてあげますが、これから東の山東濟州に梁山泊といふ水郷があります。そこには今、王倫、杜遷、宋萬といふ三人の頭領が、四五百人の手下を率ゐて立て籠つてゐますが、その人達は皆な一度私の家に來たことのある人達すし。その山にゐればもう捉まることはありませんから、少時そこに身を隱してをられたらどうです』と云ひました。

林冲は身に一點の罪もないのに、天が下に身を置く所もなくなつたのを悲

しんでゐましたが、それを聞くと大變に喜んで、『それではどうかさうして下さい』と賴んで、柴進から手紙を貰つて梁山泊に向つて急いで行きました。

林冲は惡漢の計略に引つかゝつたばかりに、今は乞食よりも情けない身の上となつたのを嘆きながら、晝は眠り夜は走るといふ風にして、梁山泊へ漸くたどりつきました。さうして柴進から貰つて來た手紙を出して、王倫といふ頭領に會ひました。その頃は梁山泊にもまだ豪傑らしい人は一人もゐなくつて後になつて、百八人の中の大將となる人が來たのは、この林冲が一番先きだつたのです。

王倫はかねて世話になつた柴進からの手紙を持つて來た人ですから、すぐと林冲を客間に呼んで會つてみますと實に立派な男だつたので、心の中で少し驚きました。この王倫といふ人は根が大變心の小さい人だつたものですから、林冲の强さうな姿を見ると、こんな人が來て、自分より威張られては大變だと思つて、手下を呼んで、お金を五十兩と反物とを取り寄せて、それを林冲の前に出し、

『折角柴進さんの手紙を持つて山へ來て下さいましたが、何しろこの山には家らしい家もなく、あなたをお留めすることが出來ません。これは僅なものですが、差上げますから、これを旅費として、どうかほかの山へ行つて下さい』と云ひました。するとそばに聞いてゐた宋貴といふ人が、

『それはいけません。私達が今日この山でかうしてゐられるのも、皆な柴進さんのお蔭です。その人の手紙を持つて來た方にそんな事をしたらば、私達はみんな天下の豪傑に笑はれなければなりません と第一に苦情を云ひ出すと、杜遷も宋萬も、

『この方を歸しては柴進大人に申譯がない』と反對しました。すると王倫は、

『皆さんはさういふが、この人だつて或ひは山の動靜を窺ひに來た廻し者かも知れやしない』と云ひました。先刻から默つてゐた林冲はその時進み出て

『いやその事なら安心して下さい。私はすでに宋の國中の尋ね人となつてゐて、誰でも町へ行つて見れば、私をつかまえるやうな人相書がどこにでも貼つてあります』と云ひました。すると王倫は、

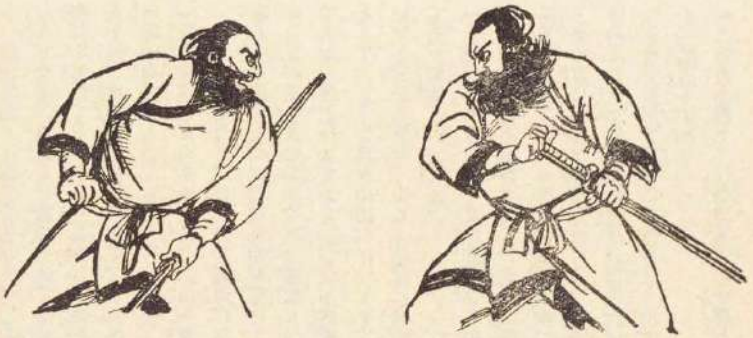
『お前さんがいよ〳〵眞心から山に入りたいといふなら、證文を出しなさい。しかしその證文も筆や紙でこしらへたものでは駄目だから、麓へ行つて誰れでも好いから旅人を一人殺して來なさい。さうしたら私達の仲間に入れてあげる』とあくまで意地惡く云ひました。林冲は仕方なしに、

『それでは私は行つて旅人を殺して來ますが、もし今日中に旅人が通らなか

つた時はどうしたら好いでせう』と尋ねました。

『それでは私が三日の餘裕を上げるから、その間に殺して來なさい。もしその日限が切れたら、決して此の山には置かないから』と王倫が云ひました。

林沖はあくまで不運な自分の身の上の事を考へると、その晩はろく〳〵眠れもしませんでしたが、翌朝は空もまだ暗い中から起きして、一人の手下を附添につれて山を下り、林の中にぢつと隱れてゐました。しかし午頃になつても、林の前を通る人とては一人もないので、林沖はしきりと氣が焦いちますが、通らない人を無理に殺すことも出來ないので、たゞぢり〳〵しながら待つてゐましたが、その日は夕方になるまでも、人つ子一人にも會ひませんでした。林沖はすつかり失望して、悲しさうな顔をしてゐますと、手下の者が『明日か明後日の中には必ず來ます』と氣の毒さうに元氣をつけてくれました。



翌日も林沖は暗い中から山を下つて林の中に隱れてゐましたが、人の足音も聞えません。風に木の葉がゆらいでも、さうではないかと思つて飛び出して見ますが、往來には人の影さへ見えないのです。

やがて午頃になると、向ふから澤山の人の足音が聞えるので、そつと窺つて見ると、それは三百人にも近い大勢の人なので、流石の林沖も手がつけられませんでした。

『私の運命もこれほど衰へてしまつたのか』と林沖はそれを見て嘆いてゐますと、また手下の者が『そんなに嘆くのはおよしなさい。あしたはこの東の方に連れて行つて上げます。あすこならきつと誰かに出會ひます』と勵して、その日も空しく山に歸つてしまひました。すると王倫は林沖に向つて、

『今日でもう二日たちましたが、明日もし誰にも會へなかつたら、山に上らずにかまはずどこかへ行つて下さい』といひました。

林沖はそれを聞いて、自分は惡者の高休のために無實の罪に落され、それから後も艱難辛苦してこゝに來てまでまたこんなに苦しむほど運命が衰えてゐるのか知らと云つて嘆きました。

その翌朝は殊に厳重に支度をして、今日旅人に會はなければもう歸つて來ないと云つて山を下つて行きました。

林沖はまた東の方の林に隱れて見張つてゐると、午少し過ごろに一人の男が荷を脊負つてやつて來ました。それを見ると林沖は喜んで躍り上つて、いきなり林から飛び出すと、旅人は荷物を捨てゝ逃げ出しましたが、その早い事は風のやうで、いつの間にか姿を見失つてしまひました。しかし林沖はこれ一人を逃したら、もう山に歸れないと思つて、尙も馳けて行くと、今度は大きな漢が、刀を拔いて馳けて來て、

『汝はよくも自分の僕を脅して荷物を奪つたな、虎の鬚に戯れる鼠のやうなバカ者め。今命を取つてやる』と切つてかゝつて來ました。

『林沖はその男の姿を見ると、身には黑綾の衣を着て、頭には紅の笠を被り腰に白い絹の帶をしめて、一挺の刀をさしてゐました。身の丈は六尺近く、顏には大きな青痣があつて、兩眼のぎよろ〳〵した實に立派な男でした。しかし林沖は好い敵が現れたと喜んで、物もいはずに切つてかゝつて行きました。

二人はそこで互ひに武術の奥の手を出して戰ひ初めました。林沖が右を打つと向ふは左にさけ、向ふが左を突いてくれば林沖はすぐにまたつけ入るといふ風に、やゝ三十分ばかり戰ひましたが、何れの腕が勝れてゐるとも見分けはつかない位でした。二人は尙も勇氣を抑つて戰つてゐますと、その時山の上の方から、

『二人の豪傑、もう戰をおやめなさい』といふ聲が聞えたので、振り返つて見ると、王倫、杜遷、宋萬などが、大勢の手下をつれて山を下つて來ました。そして王倫は林沖に、

『あなたの心はよく判りましたから、もう心配しないで下さい』といつて、また相手の男に向ひ『あなたも大變に強い方ですが、お名前は何と仰有るのですか』と尋ねますと、その男は『私はもと青面獸陽志といふものだが、先年役目の上の落度からに關西の方へ落ぶれてさすらつてゐたが、こんど赦されて歸る所だ』といひました。

林沖もかねゞ陽志の武術の事は聞いてゐたので『あなたが陽志さんでしたか、私は林沖です』と名乘つて、仲直りをして山に上つて行きました。

魚のとぶ海

若山牧水

君は知つてる
ぴよんと飛んだ魚の
銀色に光るのを

あれはいなだよ
うゝんぼらだよ

いなとぼらはおんなじだよ

それぢアさばだろ
あぢかも知れない
さよりだらう
…
なんでもいゝや
君は好きかい
魚の飛ぶ海が

沖野岩三郎先生講演便り

―山梨と東京―

講師　沖野岩三郎

山梨より（第一信）

□山梨縣日下部に生れた『水すまし社』といふ兒童藝術の研究を目的とする團體から招かれて、同地に着いたのは五月十七日の午後四時半でした。水すましといふのは、關西で、いろは蟲、字書き蟲、まひ〳〵蟲などいふ、水の上を廻ひ乍ら走る可愛い蟲の事です。そんな可愛い名をもつ『水すまし社』の廣瀨正美山下武男、三科豐の三氏と、同縣鹽山町の鎌菊お伽會の望月芳郎氏とが驛まで迎へに來て下さいました。そして其晩十一時頃まで、東陽館といふ宿の二階で、いろ〳〵のお話をしました。

□十八日の午前十時から、日下部の龜甲座といふ劇場へ集つたのは、日下部、後屋敷、加納岩、平等、八幡、鼎之内、岩手の七學校五年以上の兒童一千余名でありました。

廣瀨氏の開會の辭があつて、夫れから私は丁度一時間の話を致しました。私の話のあとで、東京日日新聞の記者である酒井宗吉氏がミノルカ伍長といふ面白い教育講話をなさいました。兒童達は二時間の時間が神妙に、且つ面白く聽いてゐました。同日の午後二時から、同じ龜甲座で小學校の先生達百七十名が集つたので、其所で童話に就いて三時間話しました。甲府の師範學校から、土屋良遜、石野悌の二氏が朝から態々來聽されました。

第一回と二回との講演の間の時間を利用して『さし出の磯』といふ景色の佳い所を見に行きました。龜甲橋を渡つて、小高い山の上に登つて見ると眼下を流れる笛吹川では、もう子供達が盛んに水泳をしてゐました。此所は萬葉集に『鹽の山さし出の磯に住む千鳥君がみ代をば八千代とぞ鳴く』といふ歌があるので名高い所です。鹽の山とは鹽山といふ町の後にある小い山です。

□十八日の夜は、鹽山の海老屋といふ温泉宿に泊つて夜の二時まで、有志の人達と話しました。

□十九日の午前十時から鹽山の七寶館といふ活動常設館で、七里、松里、七里外三ケ村組合高等小學、大藤、玉ノ宮、鹽山の六校五年以上、壹千貳百名の兒童が集りました。腰掛が足りないので、立つたまゝ聽いた子供さんも三四百人ありましたが、始から終まで、熱心に靜聽しました。

□同日の午後二時から勝沼の勝沼座で、勝沼日川、麥山、休息、四校生五年以上七百人が集りました。皆な腹を抱えて笑つたり、拍手したりし乍ら喜んで聽きました。

お話が濟むと、『金の星』誌友の土屋梅枝さんが誘れて下さいました。土屋さんは本年山梨師範を卒業されて祝小學校に勤めてゐられるお方で、師範入學前から『金の星』をお讀になつてゐられると申されました。

祝村は甲州葡萄の産出で名高い所です。今から七百四十年程の昔、文治二年三月二十七日の氏神祭に、此の祝村の雨宮勘解由といふ人が城の平の宮へ詣る途中、野葡萄を見付け夫れを家園へ移殖したのが甲州葡萄の起原だといふ事です。夫れから十二年間に十三株に殖えて、源頼朝が信濃の善光寺へ詣つて甲州を通つた時、三龜獻上したのださうです。夫れから四百年後の慶長年間になつて、德川家康が檢べた時、祝村に百六十四株になつてゐたさうです。其後百年を經た時は二十町歩餘りの葡萄園が出來たといふ事です。何事でも苦心と忍耐との要るものだと思ひました。

勝沼驛から二十町ばかり山の上に勝沼停車場があります。水すまし社の人達に送られて其の停車場まで來てみると、私の話を聽いた子供さん達が三十人ばかりゐました。

驛の前から見渡すと、前面には小菱峠が高く聳え、右手には大菩薩峠の一角が見え、眼下には祝村の葡萄畑が青々と見えました。

やがて汽車が來たので夫れへ乘込んだが、汽車は構内から少しく後へ戻つて、更に停車場から數十間上の方を東京に向つて走るのでした。

窓から下を見下すと、水すまし社の先生達や、小學校の子供さん達が、帽子を振つて、私を見送つて呉れました。

山梨より（第二信）

□五月廿八日の夜九時五十分に、山梨縣の長坂驛に着きますと、淋しい驛へ下車した者は私たつた一人でした。桑小學校の校長堀内常太郎氏が出迎へて下さつたので、二人は日野春といふ所の日松館へ行つて、そこで翌日の講演の準備を致しました。

□廿九日の朝、堀内氏に案内されて、當日の會場である秋田村の清光寺といふ寺へ行きました。行く途中は海拔二千五百尺の高地で、八ケ岳が直ぐ眼の前に見え、遙か右手には金峯山が聳えてゐる、其の左の所から淺間山の煙が時々見えるさうです。振返ると駒ケ嶽、鳳凰、地藏の山々が、新綠の初夏にまだ雪を戴いて立つてゐました。會場の清光寺は武田信玄の祖光玄源太清光の建てた寺で、大きな伽藍でした。其所には北巨摩郡の桑、秋田、日野春、三小學の兒童一千三百八十名が、ぎつしり詰め込んでゐました。三校の子供さん達の獨唱や齊唱があつて、夫れから私は一時間二十分のお話をいたしました。生徒さん達は皆な緊張して聽きました。夫れから一千四百の生徒さん達は、大きな杉林の中へ行つてお辯當を食べて金の星社からのお土産を先生から頒けて貰ひました。

午後の二時前から又た伽藍の中で子供さん達の可愛い歌があり、私も一時間お話を致しました。そして三時過に會を閉ぢて先生達四十人にお話をしました。書話や童謡に熱心な先生達が二十人私の宿へ來て、一緒に御飯を食べて、そして、先生達の得意な童謡や律動舞踊などを教へて下さいました。私は講演に行つたのやら講習を受けに行つたのやら解らなくなりました。（廿九日夜　長坂にて）

□卅日の朝は、堀内氏と日野春小學の間井氏と三人で、小淵澤小學校に行きました。驛まで出迎へて呉れました校長の高橋幸高氏と一緒に學校へ行く途中、偶と左の方を見ますと、眼の下に高い山懷が見えます。夫れが駒ケ嶽の中腹だと聞いて驚きました。こゝは海拔三

千尺の高原なのです。學校の庭や後の野原には鈴蘭が可愛らしく咲いてゐました。小淵澤、篠尾、清春、片蔵四校の生徒九百二十人が講堂に集りました。講堂には高原の郷土の咲盛つたのを大花瓶にさして、洒落した装飾がしてありました。子供さん達の童謡劇や、上手な獨唱などがあつた後で、私はみつしりお話を致しました。お話が濟んだあとで二十人程の先生達に二時間程話して、七時の滊車で甲府へ帰りました。滊車の中から見上げると、駒ケ嶽が高く高く雲間に聳えてゐました。（卅日夜甲府にて）

□卅一日は朝から少しく雨が降りました。で甲府の宿で物を書いて午後に師範學校へ行きました。其所には私の知己の石野悌氏がゐまして、萬事のお世話をして下さいました。

一時から同校の附屬小學の生徒さん達二百四十人と本校の男女生五百四十人とが一つの講堂に集つて、一時間童話を話しました。夫れから本校の男女六百人に二時間あまりの童話に就ての意見を語りました。

夕飯を御馳走になつて、女子部の食堂で六時半から同校の『童話實演會』へ招れました。

これは同校女子部の生徒さん達が、童話の話し方を練習して、ゆく〳〵は童話の巡回講演にでも出かけようとする意氣込でやつてゐる會です。最初に長沼留子さんの石の大黒のお話があり、次に渡邊鈴子さんの兎飼いの話があり、三番目に篠原淺子さんの愛國少年ペーちゃんの話がありました。

水つまし社の人々と沖野先生

やんの話があり、最後に本藏下枝さんの月と少年のお話がありました。皆な立派な話しぶりで、泣かされたり笑はされたりしましたが全體に美しい澄さつた會でした。お話が終つて、私は四人のお話の内容と話し方とを批評して、會を閉じたのは十時前でした。之から又北巨摩郡の村山西小學校へ參ります（甲府にて）

□六月一日は甲府の町にゐて、宿の一室で東京朝日から頼まれた童話を一篇書きました。夫れから午後十一時發の滊車で信州の諏訪へ行つて、二日、三日の兩日を静に暮しました。諏訪神社は太古からどんなに佛教が盛んな時でも其の勢力に捲き込まれなかつた宮だといふ事を聞いてゐたので、わざ〳〵行つてみましたが、大へん氣持のいゝお宮でした。諏訪湖にも舟を浮べて面白く遊びました。

□六月四日の午前六時廿五分に上諏訪を立つて再び長坂驛に向ひましたが、途中眞紅な美しい鬼つゝじの花を田の中一面に蒔いてあるのを見ました。さうした美しい景色の中を通つて長坂驛へ着いてみると、村山西小學校の興水季吉先生が迎へに來てくれてゐました。

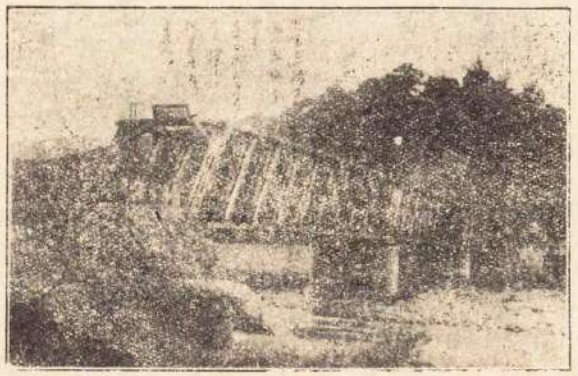
夫れから二人は青い〳〵若葉の中を一里ばかり歩いて、村山西小學校へ行つてみますともう村山西、安都、津金、清里四校の生徒さん達が集つてゐました。私は最初に一年から三年までの生徒に短いお話をして、夫れから童話大會のお話に移りました。私の話の前に、西白い童謡が十二三も歌はれました。『開かぬとびら』『青い眼のお人形』などが大變によく

出來ました。私はハイカラな生徒さん達だと感心しながらお話しはじめたのは十一時二十分でしたけれども十二時四十分まで皆な喜んできいて下さいました。先づ〳〵成功でした。

お晝飯の後で、山本校長の發起で、三十人餘りの先生達のために、お話をいたしました。五時から興水先生と多麻小學校へ行きました。

□六月五日の朝、多麻小學校の篠原哲老生と一緒に多麻小學校へ行つて、一年から三年までの生徒さんに短いお話をして、夫れから多麻、江草、岩下、比志、増富、穂足、朝神、若神子、穴平の九校の生徒さん達が、ぎつしり詰め込んでゐる會場へ行つて、そこで最後のお話をみつしり致しました。私の話の前に可愛い童謡の合唱や獨唱があつて、皆さんを感心させました。今度私の行つた山梨の學校二十一校は、みんな童謡を歌ふことも作ることも大變上手な所ばかりでした。

お話がすんだあとで、多勢の生徒さん達は山の木蔭へ行つて、めい〳〵にお辯當を食べて樂しく歸つて行きました。右に八ケ岳、前に駒ケ嶽、左に富士山といふやうに、日本で名高い山々に圍まれた絶景の地で、毎日々々樂しく教へられてゐる子供さんたちの幸福を思ふと、私は此のまゝ此の多麻校にいつまでも居たいやうな心持になりました。



差出の磯（山梨郡八幡村にあり）

午後から二時間ばかり、四十人程の先生達にお話をして、夫れから大豆生田（マメヨー ダと呼ぶ）といふ所まで、いゝ景色の中を一里ばかり歩いて行きました。

五時に大豆生田へ着いたが、馬車も自動車も無いので、其所から穴山驛まで又た一里の間を恭常六年の植松儀郎さんに案内して貰つて山を越えました。六時前に高原の淋しい停車場へ着いた時、駒ケ岳の頂上には、美しい太陽が紅い雲に包まれて輝いてゐました。

東京にて

□六月七日午後七時から、丸ノ内ビルディング百四十一號で、東京及び附近の齋科醫のお方や、醫學校の先生達が百人集つて、童話に就ての話を聞きたいと申込んで來たので、同時刻に行つて、二時間あまり話しました。みんな熱心にきいて下さいました。

□六月九日午後七時から、芝區高輪キリスト教會で『花の日』の會がありました。大變上手な獨唱と四部合唱とがあつたあとで、私は今まで話したことの無い『悲しい笛、樂しい笛』のお話を試みました。集つた子供さんたちは四百人程でしたが、幼稚園程度の子供さん達も、みな静かにきいて下さいました。

童謡

野口雨情選

〈大人篇〉

螢の子

名古屋市西日置町　森紅玉

蚊張つり草の
花かけに
かやつつて
ねんく
螢の子
一人でねんく
螢の子

父さん母さん
どこへ行た。
父さんお池へ
水買ひに
母さん
となりへ
露買ひに。

桑の實

埼玉縣明覺村　北村總之助

桑の實
もいでて
日が暮れた
紫色に
日が暮れた。

笹舟

東京市麹町区城戸道

雨が晴れたら
お庭の中に
こどもの
お池が出來ました
笹舟小舟を
浮べたら
風のまにまに
走ります

クルクル廻つて
三べん目
小さい
港へ着きました。

夕やけ

石川縣出城村　安島理作

夕燒小やけ
赤い海
みかんの皮が
浮いてゐる
鳥が一匹
飛んで行く
みかんを探しに
飛んで行く。

郵便屋さん

岐阜縣郡町　金森武夫

郵便屋さんの
まんぢゆ笠
かりたか
もらうたか
つくつたか。

とんび

東京市中ノ町　石橋まさはる

とんびに
油あげさらはれた
豆腐屋のおばさん
おつかけた
竿持つておばさん
おつかけた
とんびはお山へ
ひようろひよろ。

〈小供篇〉

カラ〳〵日和

東京市市ヶ谷　伊藤登良男

カラカラ道だ
カラカラ日和
カラカラ小砂利だ
カラカラ日和
カラカラ日和
どこまでつゞく。

月

埼玉縣金子校　加藤桂子

こんやも月が
旅をする
ほそいからだを
よこにして
青いお空で
たびをする。

蟲のかくれん坊

千葉縣東金校　高宮包夫

蟲と蟲とのかくれん坊
おにの蟲はとびまはれ
かくれてる蟲は
とまつてろ。

とんぼ

山梨縣廣里東校　宮澤健次郎

子供四人がたんぼの中で
とんぼとり〳〵あそんでる
とんぼ〳〵そつちいつちや
あぶないよ
こつちにきても
あぶないよ
上々つんぬけろ
天までつんぬけろ。

牛

長崎市上筑後町　村山ハル子

長いどてを
長いよだれで
通る牛
モウ〳〵〳〵〳〵
よだれは長い
どて長い。

小ねずみ

岐阜縣本荘村　棚橋甚助

穴から出て來た
小ねずみは
赤い舌で
ペラ〳〵と
きれいな水を
なめてゐる。

鯉のぼり

東京府隅田町　八ッ代春村

空にたゞかく
鯉のぼり
高い所で
何みてるの
仲間の大勢居る
下の川
おいらの家も
見えるだろ。

竹の子

滋賀縣市邊校　田原イキ

おやぶの小さな
竹の子さん
あつい着物を
なんまいも
こんな天氣に
さむいのか
おやぶの寒がり
竹の子さん。

幼年詩

若山牧水選

夏服（賞）

東京市牛込區東榎町　南須原靜也（十四才）

皆が夏服を着て來て
教室が明るくなつた。

評、オ、ほんとに明るい歌。（牧水）

アヒル（賞）

石川縣鳳至郡鵜川村尋二　稲谷晃緣

池ノフチノ
ボケノ花ガサキマシタ
アヒルガ
タノシサウニ
ウイテキマス。

評、美しい景色、やはらかな景色（牧水）

綴方

編輯部選

ロス（賞）

福島縣石川郡澤田校尋六　深谷達也

ふと向ふを見ると、お菓子屋のロスが淋しさうに頭を下げてとぼ〳〵と家の方へ歸つて行く。犬だつてお友達がなければやつぱり淋しいのだわ。『ロス〳〵ロス。』

私の聲に驚いたのか、一寸首をあげてこちらをむいた。『こつちへお出で。』と聲をかけた。ロスはハイとも云はず尾をふりながら走つて來た。『お前はいつでも可愛いゝね。』と云ひながら頭をなでた。ロスは私の顔を不思議さうに見て、目ばたきを二三度してくるりと後をむいて、すゝすゝと家の方へと行つてしまつた。

可哀そうな猫（賞）

福井縣高濱校高一女　一瀬順

大掃除もほどなくすんだので、かためてあつたちりを、畠へすてに行つた。其の時、どこからともなく猫の鳴聲が聞えた。方々さがすが見當らず、とう〳〵垣の外まで出た。すると白黒の可愛い子猫が、あちらこちらとさまやうて居る。私はあまり可哀そうなので連れて歸つて家に飼つておかうと思つたが、家にも猫がゐるのでどうする事も出來ず、そのまゝおいて行かうと思つた。けれどもどうしておいて行かれやうか。たうとうだいて家に連れて歸り殘つてゐるごはんをやつた。家の猫がかへればきつといぢめる。それよりどこかの人にひろはれる方がよいと思つて又畠へ連れて行つた。

同じ猫でありながら一生樂しく暮すのと、生れるとすぐ苦勞をせねはならないと思ふと可哀そうでならなかつた。其の晩は猫のゆめばかり見た。

勇さん

香川縣木田郡氷上校尋六　鈴木薫

自轉車レースがすんだので見物人は四方へ散つて行く。私も友達とたんぼ道を通つて電車に乘つて歸らうとさうだんしつゝ、發電所の方へ行つた。行くと大勢の人が入口から中の機械を見てゐるので私等も見に行つた。中には發動機のやうな機械が動いてゐた。『電車が來てゐる。電車が來てゐる。』と小さな子供が大聲で言つたので、私等は乘場の方へ行つた。すると北から近所の人が走るやうにして來た。そして、『これ〳〵うちの勇を知りませんか。』と顏を青くして言つた。『どうしたのな。』と友達が言つた。『私と離れたのです。』勇さんは今年七つか八つで四月から入學したのである。近所の人は又北へ走つて行つた。『見つからんと勇さんはようちへ歸らんぜ。』『そらよう歸らん、見つかつたらよいが。』等と友達と話し乍ら電車に乘つた。電車は間もなく平木へ着いた。友達と私は下車して、勇さんの事を話し乍ら富光寺のそばまで歸つた。そこでしばらく休んでゐると蛇がのろのろと出て來た。私等はそれをいぢめてゐると、『おい蛇か。』と言つた者があるのでその方を見ると勇さんであつた。

私は、『こら勇さんお母さんが心配してゐるぞ。あつちから誰と歸つたんだ。』

と言ふと勇さんは笑ひ乍ら、『誰とも歸らん一人で歸つた。それで道まよつたんぞ。』と言つた。私は一人で歸つたと聞いて驚いた。勇さんは平氣で早や桑畑の方へテク〳〵歩いてゐる。

さくら（賞）

山梨縣多麻校尋四　村田ことじ

さくらがさいた
うすあかく
大きな木も小さな木も
たくさんさいた
うすあかく。

評、これもほんとに美しい。（牧水）

三人

逸名

三人が山へ上る
ぢいさん
つゝついて
お父さん
ばうしをかぶつて
兄さん
ふごをになつて。

評、あなたはどこから見てゐるの。（牧水）

學校

香川縣木田郡氷上校尋六　鈴木薫

姉（賞）

神奈川縣川崎町堀ノ内川下耕　村上清夫

きいちやん

千葉縣東金校尋五　高橋たか

屋根の上から
學校が見えた
窓がらすが
みんな光つてゐる。

評、あれは誰さんの、あれは私の教室。（牧水）

ランプ

愛知縣十四山村西部校尋六　前野守一

ランプのほやをかぶせた
火がすわつた
ほやの中で
煙がくるりと廻つた。

評、きちんと坐つて見てゐる僕。（牧水）

すずめ

愛知縣十四山村西部校尋五　河原千嘉張

こやの中で
すゞめが
こめを
おそるおそる
くつてゐる。

評、笑つて見てゐるあなたの顔。（牧水）

むしの聲

愛知縣十四山村西部校尋五　早川正義

馬屋の中でなくむしのこゑ
川にひゞく。

評、馬は野良に出ておるすです。（牧水）

雨

東京市外目白自由學園本科二年　エトミー、ガンドレット

降り出した雨は
まだやまない。
お父さんのピアノは
さーつきやんだのに
ぐづ〳〵雨は
まだやまない。

評、しいんとした靜かな中に降つてゐます。（牧水）

鳥

不明　長尾八郎

梅の木に來た一羽の鳥が
花がないといつて
にげていつた。

學校から歸る途中話

山梨縣大月廣里東校尋六　小幡廣道

此の間の月曜日の事でした。私はいせいよく學校から歸つて、あんまり元氣だつたので、「只今」を忘れて家の中へ入つたら「ただいま。」を言ふ事に氣がついたので、すぐ『只今』と言つたら家のおじさんが、『なんだい一時間もたつて只今やつて。』と言つたので忻んな笑つた。其のうち少したつと、下道のきいちやん（從妹）が下道のおばさんときました。で私はきいちやんと遊んでゐると、きいちやんがとつぜん『ねえちやん。』と言つたので私はおどろいて、『えゝ。』と言つたら、きいちやんは、『ぼかん……。』と言つた。私は其の時自分よりも小さい人にだまされたのでくやしくてたまりませんでした。で私はこんどきいちやんをだましてやらうと思つたので『きいちやん……。』と呼びました。きいちやんは小さいながらもだまされるとは思つたのでせう、ただ笑つただけでした。それでも私はどうしてもだましてやらうと思つたのでこんどは、『あんね、きいちやん明日ね……。』と言つたら、きいちやんは『あによ。』と言つたので、私は、『ぼかんださ』とでたらめにだましたので、きいちやんは赤い顔をした。其のうちに下道のをばさんときいちやんは歸つた。

私は此の前春信さんと敬作さんと城之内と學校から歸る途中でした。しをやの店を見てゐたら、城之内のお母さんが來たので一しよに歸りました。土手の道にはひつててうどお寺の下まで來て何んの話からはじまつたのか『敬作さんぼいくつ。』と城之内の母さんが聞くと『十二だ。』といつた。『廣ちやんはいくつ。』と聞かれたので『おれは明治四十五年の三月三十日だ、明治四十五年は、いこうる大正元年だから十二歳だ。』といつた。すると『春信ちんはいくつ。』と聞いたら春信さんは『十三だ。』といふが早いか敬作さんは『それぢやあ信ちやんはじゆんさだ。』といふと春信さんはあらがつて『惡ふ事をしれば此のなはでしばるぞ。』といつた。私『それぢやあ春信さんは何處になはをもつてる。』といふと『こゝにもつてるよ。』といつておびをつかんだ。敬作さん『それぢやあさあべるをもつて居るか。』と聞くと『いゝえ』といつたので私が『さうさ春信さんはおんきうになつただもの。』といふと春信さんは聞きそくなつて『おんせんだ、えらいものだ。』といつたので私が『信ちやんは伊豆のおんせんか。』といふと『伊豆のおんせんだからぜかろぜ。』といつてよろこんで居た。

ちやぼの卵

東京市牛込區早稻田鶴巻町　寒竹進

五月五日と廿六日、其日は私の頭から抜けられない日です。どうしてかつて言ふと、五日は私の家のちやぼが初めて卵をうみ、それを數へてる間に九ツも產んでしまつたのです。その卵はそれは〳〵九ツ揃つて小さくて小さくて眞白で、そりやあ可愛いゝのです。あれでもひよこになるかしらと思ふ位。その可愛いゝ〳〵小さら卵を、五月五日の私達のよろこばしいお節句の日に抱き初めたのです。それから二十一日目。それが待遠しいひよこにかへる二十六日です。あと幾日々々と言つてるまにもう二週間許りたつてしまひました。あと一週間。私は本番に待遠しいのです。早く〳〵可愛いゝひなちやんになつて下さい卵さん。

花（賞）　名古屋市西區佐校尋五　水尾隆彦

夜のるすばん

東京府下田端六三五　森田義三（十四歳）

家のものは皆湯に行つた。後にのこつたのは僕一人。遠くの方から子供の喇叭を吹いてゐるのが聞える。やがて八時になつた。春の終り頃であるから夜はだん〳〵と短かくなる。外は月が出てゐない。やがて八時半頃になつた。わん〳〵〳〵わ

評、すうろい鳥だ、しやれ鳥だ。(牧水)

注意

不明　井戸正策

先生から注意を受ける
靜かな時に
誰だか鼻をすゝる。

トンネル

仙臺市大町五ノ一　木村方　遠藤繁治

汽笛かなつて
月が消えた
まどが白くなつて
まつくらの中を
汽車が
走つてる。

遊びの時

東京小石川區高田老松町　高木しげ子

お友達と
遊んで居た時
悲しいことを
思ひ出した

雨

山梨北巨摩郡泉校尋四　淺川三藏

雨がざん〳〵
降つてきた
一匹生が
ないてゐる。

あやめ

和歌山縣東牟婁郡明神校尋四　石倉與太郎

あやめはむらさき
うつくしい
青いはの中で
一ひら一ひらおちてゆく
壺にさされてうつくしい。

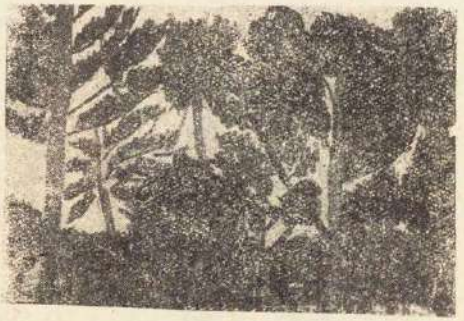
なみ

愛知縣十四山村西部校尋五　安井谷雄

なみがうつ
向ふから
くろい舟

庭の木

千葉縣東金校尋四　富正



ん〳〵と二三匹の犬がほえてゐる。間もなく犬も寐てしまつたのかほえる聲も聞えなくなつた。あと二分で九時だ。まだ湯に行つた人たちは歸つて來ない　ちん〳〵〳〵〳〵と九時がなつた。まだ歸つて來ない。心配しはじめた。又犬が思ひついたやうにほえだした。臺所の暗い方で、ちゆう〳〵〳〵と鼠がないてゐる。少したつた。玄關の戸がが〳〵とあいた。『御免下さい。』と云ふ聲。『御客樣だな』と僕はすぐ思つた。玄關へ飛び出て見ると、一人の女の人が立つてゐる。『今晩は、お母さんおいでですか。』『いいえ家の人は皆なお湯に入りに行つて僕一人家に殘つてゐるんです。』『さうですか又明日でも、おうかがい致しませう。』『さよなら。』と女の人は行つてしまつた。『誰だらう。太田のをばさんかしら。』と僕は思つた。又犬がほえてゐる。とたんがら〳〵と戸があいて『今歸つて來た。』と云つて、大勢どや〳〵と入つて來た。

お兄樣

東京麴町區双葉校尋六　梅田龍子

私のお兄樣は濱洲雄とおつしやいます。そして御年は二十で慶應の本科一年です。お兄樣は色が黑くて眼鏡をかけて、いらつしやいます。丈は餘り高くなくて太つてゐらつしやいます。お兄樣は本科なのに、まだすゐ分惡戯をなさいます。お兄樣は活動のまねが大すきで、よく小さいお兄樣と活動のまねをなさいます。お兄樣はまだちつとも大人らしくございません。さうしてどなたの前でもおふざけになります。去年田川さんや戸川さん等がいらつしやつた時、松の木からお落ちになつてシヤツの袖をビリ〳〵にさいておしまいになりました。お兄樣はお母樣の前だとおふざけになりますが、お父さまの前ではおふざけになりません。それはお父樣にお叱られになるからでせう。それからお兄樣には癖がおありになります。いつも田川さんや戸川さんがいらつしやると直ぐに頭をお抑へになるので、いつでも田川さん達と顏を見合せて笑ひます。私はお兄樣が大好きです。

寫生　京都府中郡三重校高一　村尾胤治

重い荷車

廣島縣賀茂郡原校高一　井川年行

さつきから馬子はしきりに馬を追ひたてゝゐる。車には材木が高く積んである。馬は少しも動かない。馬子は汗をだした顏を上げて坂の方を見た。日は暮れかゝつて、西の方が赤々と美しく色どられてゐる。馬子は又强く馬に鞭をあてた。けれども、矢張り馬は動かない。馬子は草を取つて馬に與へた。馬は一寸嗅いただけで食べようともしない。馬子は草を捨てゝ腰の手拭で馬の汗をふき、顏にかかつてゐる前髮を拂ひのけた。馬ぼぢつと目をとぢて居る。家々には電氣がついた。馬子は『さあもう少し。』と車に手をかけた。馬は、又後足に力を入れた。馬子ほ歩け〳〵といつてゐるが、馬ほ歩るかうともしない。其の内に歩き出した。馬子ほ嬉しさうな顏をしてのぼつて行く。

むちやきな子

長崎縣北松浦郡佐々村口石校尋六　金丸榮子

ゆすつてきた。

夜明

香川縣木田郡水田校尋六　神内美恵

夜明の鍾がなつた
とりがないてる
妹の輕いねいき
夜明が待遠しい。

すみれ

香川縣木田郡水田校尋六　松本タキ

石垣の間の
小さなすみれを
一本つんだ
しほひがりの
かへりみち。

紙すきの水

香川縣木田郡水田校尋六　松本タキ

紙すきの水
黒くにごつて
やな木の下の
小さい川を
流れてる。

ぐみちぎり

鹿兒島市山下校尋三　小池國彦

私は朝早くおきて
ぐみをちぎりにいきましたら
つゆで
けたがぬれました。

雲

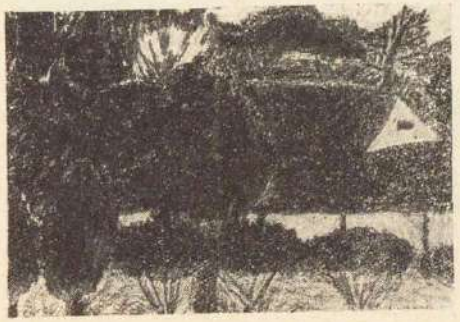
和歌山縣東牟婁郡川原校尋五　芝美代恵

雲が動き出した
雨でもふるのか。

しやみせん草

香川縣木田郡氷上校尋六　若狹しげ子

石垣の間の
しやみせん草
小さい時の
かんざしを
思ひ出した。



公會堂　千葉縣東金校尋三　藤田忠雄

私には四人も弟があります。その三人の内の六つになる弟が或時私の所に來て。『豆はいくらで買はれるの。』と聞きますから、『一錢金を五つ持つて來ないと買はれません。』と言ひました。弟は一心に机の引出をさがして居ました。すると銅貨が四枚ありました。弟は自分のとしの六つより外は知りませんから、一方の手を出して小ゆびと紅さしゆびと中ゆびと人さしゆびとに、一つゞつのせましたが、親ゆびに一つ足りませんから、目を丸くしてさがしてゐたのでした。私とお母さんは此の有樣を見て、感心するやらおかしいやらで、たうとう笑ひ出してしまひました。

學校の歸り道

滋賀縣蒲生郡市邊校尋六　森はな

學校の授業を終へて、掃除をして、學校の門を出た。道端には青々とした草が群がつて生えてゐる。田の水は、清くすんで我々の顏をうつす。風はそよ〳〵吹いてゐる。私はおぶんさんと一しよに、しやべりながら家へと足を運ぶ。だん〳〵と來て、さうしてもう此處で、私とおぶんさんとがわかれる所まで來た。太陽の光はきもちよく照りかゞやき、空は晴渡り、風はそよ〳〵と、遠くに聞えるはひばりの聲。菜種の花は今をさかりと咲き、蝶々は花から花へと舞ひ、蜂はせつせとみつを集めてゐる。私が『さようなら。』といふとおぶんさんも『さようなら。』といつた。雀の聲も暖かさをかんじさせる。そばを見ると、道のはせから、道のはせまで、一ぱいに横たわつた大きな蛇がゐる。二人はぢつと見つめてゐた。蛇はぢつとして動かない。私等は一つ小さな小石をもつて投げやうとした時、蛇は俄にすうと茶の木の下へかくれた。私等は此處でわかれて家にかへつた。

こわかつた夜

青森縣黑石前町尋五　鳴海敏

時計の針は、もはや一時をさして居るだらうと思ふ頃の事であつた。うちの人は皆れしづまつて居るのに私だけはどうしてもねられない。あたりはしんとして居る。とつぜん犬のほえる聲が聞えた。私はこわくて、ふとんをかぶつてしまつた。けれども、犬は、しきりに、ほえて居る。聲を聞けば犬は、十文字の角に居るらしい。だん〳〵夜がふけて來た。犬は何處へ行つたのか、聲が聞えなくなつた。私は、ほつと安心した。そして居る中に、其處此處で、雨戸をあける音が聞えてきた。私は、さつきのこわかつたことを思ひ出すと、おかしく思つた。

風の日

横濱市本町校尋六　松井清松

昨日であつた。朝から風がひう〳〵とうなつてゐたので二階のがらす戸が『がた〳〵』とゆれて誰か入つてこないかと心配した。入れないやうに、かぎをかつてしまつた。外の戸も、しんぱり棒をやつておいて、さあ安心だと下に降りて本を見て居ると又がた〳〵』とゆれてしやうがない。おまけにるす番だ、其時がちりと戸をあけて入つて來たのはお母さんであつた。

お友だちの肖像　山梨縣大月旅里東校高二　小宮時子

通信

自由畫選評

山本鼎

夏が來ました。これから果物の天國です。靜物畫の季節です。大いに果物をお描きなさい。それ〴〵の果物のそれ〴〵の美しさ、形や、色や、丸味の上からよくそれを見て御覽なさい。

×

△村尾胤治君の『風景』質朴でいゝが、雲が黄色すぎて、下の畑と同じやうになつた。

△富正君の『庭の木』いろ〳〵な姿と色合をもつた庭の木々の群をうまくつかめてある。色の薄い變化が面白い。

△村上清夫君の『姉』形がうまくとれて居る。たゞ顔から下が薄弱でいけない。髪の毛のあたりが一番活きてかけて居る。

△水尾隆彦君の『花』品よく描けて居るが、少し筆がばら〳〵して思にさばる處がある。

△藍田忠雄君の『公會堂』大づかみに面白く出來て居る繪だが、一番下の顔の青い處でぶちこはしになつて居る。あすこが調子はづれな嫌い色だからである。

△小宮時子さんの『お友だちの像』、眼の描き方などちと氣味が惡いが、とにかしっかりした處のある素描だ。併し顔に比して胴の描寫が力めけみして居る。(六月)

幼年詩選評

若山牧水

特にすぐれて佳いと思ふのはなかつたが、今度のはよく揃つてゐた。初めから終りまでの作を讀んで、子供たちの明るいこゝろ、こまかいこゝろを詩しも感ずることゝおもふ。どこまでも子供らしい自然な作を主として選んでおいた。

構へる心がだん〳〵に無くなつて來てうれしい。構へる心とは、私は幼年詩を作るぞ、といふ固く構へた心をさす。その固くなつて眼を光らした態度がなくなつて、平氣で話をする樣な風で作る樣になつたのはうれしいことだ。あまり眼だゝないで、讀んでゐるうちにだん〳〵とよくなるといふ作物（それは子供の作には是非必要なことだ）がこれからだん〳〵殖えませう。

綴方選評

齋藤佐次郎

▽今月はいつも程いゝ作がなかつたので失望しました。ズバヌケた作がなかつたのです。でも、『ロス』や『可哀そうな猫』や『勇さん』や『きいちゃん』などの作があつたので慰められました。

▽綴方はどういふ風に書いたらいゝかといふことが、もう十分に皆さんにわかつてゐなければならないのですが、まだ時々古いカタにはまつた作があつて困ります。今月は不思議とさういふ作が十篇程もありました。これなどは指導なさる先生次第でどうにでもなるのだと思ひますが、兎に角さういふ方は『金の星』の綴方を見て參考にして下さい。

▽さて、今月の主な作について感想を述べますと、深谷達也さんの『ロス』は何ともいへないよい味のある作です。きどらずに思ふさま自由に書いてゐるところが、何ともいへないのです。『犬だつてお友達がなければ淋しいのだわ。ロス〳〵』のあたり、實に大膽に書いてゐて、しかもその場の作者の心持ちや、また犬のロスが頭を下げてヒョコ〳〵〳〵とやつて來る有樣が申分なくよく書けてるではありませんか。

▽一瀬さんの『可哀そうな猫』これも今月での目をひいた作です。捨てられた猫を捨つて來て、また捨てに行くまでの心持ちが、なか〳〵よく書けてゐます。作者の美しい感情のあふれてゐるのが、讀む者の胸をうちます。同じ猫でありながらといつて、樂しく暮す猫と不幸に暮す猫とをくらべた感想も面白いと思ひました。

▽鈴木薫さんの『勇さて』は普通の上手な文で最初の方だけをとつていへば、大して上出來ではありませんが、終りの方はたしかに優れてゐました。『おい蛇か』といつたました『勇さん』の姿は目に見えるやうによく書けてゐました。

▽高橋たかさんの『きいちゃん』も丁寧に、そして無駄がなく書けてゐます。年下の『きいちゃん』にだまされたので、カタキウチをしようとしていら〳〵するあたりが一番よく書けてゐました。

▽森田義三さんの『夜の留守番』もすなほなよい作ですが、中で最も注意をしたいと思つたのは、一人でおるすばんをしてゐると、犬がほえたり、臺所で鼠がチユウ〳〵ないたりしてゐると書いてある處でした。全くその通りに違ひなかつたのでせうが、その時にもう少し何か變つて見たり、開いたり、或は感じたりしたことがなかつたでせうか。もし無かつたとすればどうも仕方がありませんが、よく考へて御覽になつたら、犬がほえたり、鼠がないたりした當り前の事の外に、何かその晩に限つた特別な事があつたに相違ありません。それが書くゝ作が急に生きて來るものです。

▽小幡廣道さんの『學校から歸る途中話』は自由にそして、なか〳〵よく書いてゐました。『十三だ』といつたのがだん〳〵に間違つて、巡査になり、おしまひにたうたう伊豆の温泉になつてしまふあたり、器用に、そして自然に書かれてゐる。器用もこの位にしてつゝしんでゐると結構です。これ以上になると、惡はないが、よく寫せてゐました。

▽森はなさんの『學校の歸り道』前はいけませんが、終りの方の『雀の聲も暖かさをかんじさせる。』のあたりからよくなつてゐます。

▽尚、この外にもいろ〳〵いゝ作があつたのですが一々掲載し切れないので殘念ながら、佳作に廻つてゐます。いゝ作であつても、同じ學校の作品だけを澤山に出すわけにも行きませんので、載せるだけのねうちのある作でありながら佳作に廻つてゐることもあるのです。このことを十分に知つてゐて下さつて出ないからといつて失望しないで下さい。

▽遂に『金の星』の一大飛躍の日が參りました御覽の通り八月號はこれまでとは全然面目一新して現れました。表紙も口繪も皆樣をよろこばせずにはおかないほど美しいものを選定いたしました。どうぞこの後の『金の星』の奮闘ぶりを御覽下さい。それこそ縱橫無盡にかけ廻つて皆樣の大好きな雜誌をこしらへる積で、編輯員一同必死の活動をいたしてをります。

「金の星」誌友の創作募集

『金の星』は毎月童謡、童話、及兒童創作の研究と誌友の機關とを兼ね毎月『小馬』を發行いたして居ります。就ては下記の規定に從ひ、特に『金の星』誌友の方々の創作研究を募集いたしてをります。どうぞ苦心のお作を御投稿下さい。

□規定……は凡て『金の星』の創作募集と同樣です。但し原稿には必ず『小馬原稿』とお記し下さい。

□童謡……野口雨情選
□幼年詩……岡本歸一選
□自由畫……齋藤佐次郎選
□童話……
□綴方……
□兒童の創作に關しての研究、論說、隨筆……編輯部選
□締切……毎月廿五日

編輯室より

▽また今月號からは挿畫の方も、名なる方々にお願ひいたしまして、寺内萬次郎先生角田次郎先生、生なはじめ、の苦心のお作をいたゞきました。尚今後はかくれたる上手な畫家を紹介することも『金の星』の一つの仕事といたす積りで、この方面にも大に活動をつゞけます。

▽八月號からは内容にも大改革をいたしました。その上、出來るだけ豪富にお話なのせたいと思ひまして、水島爾保布先生の『ドン・キホーテ繪物語り』をはじめとして、一頁物語

各方面の有名なお話が現れますか、どうぞ樂しみにお待ち下さいまし。

▽十一月號は本月號で豫告してあります通り『少年少女傳說物語號』として日本全國の傳說の中で少年と少女とを主人公にした優れた物語りを集めて出す豫定になつてゐます。廣く原稿を懸賞募集する外に、おなじみの『金の星』の各先生も腕によりをかけて書いて下さいますから、この號もまたすばらしく面白い號になるであらうと存じます。引つゞき十二月號も、また何ぞ面白い計畫を立てゝ皆樣をアッといはせる積りでをります。

ぞ十月號の發行を今からお待ち下さいませ。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典がございますが、先づ第一に童謠童話及兒童創作の研究雜誌『小馬』に毎月投稿の特權があります。尚この外にもいろ〳〵の御便宜がありますから、水社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り申上げます。

▽宮島資夫先生の『水滸傳』は一月號から引つゞいて本月號まで連載いたしまして、非常に皆樣から歡迎を受けましたが、これで一とくぎりつきましたから當分お休みにいたしますしかし、まだこの外に澤山の面白い勇しいお話がありますから、いづれまたよい折に載せることにいたします。

▽小島政二郎先生は今月號に『天狗退治』といふ面白いお話を書いて下さいましたが、次號には一層面白い、それこそ、おヘソが中がへりしさうな面白いお話を書いて下さいます。

どんなお話が現れますか、どうぞ樂しみにお待ち下さいまし。

金の星新誌友名簿

（申込順）

吉井　享二（東京）
市川龍之介（山梨）
谷　幸子（朝鮮）
原　芳文（長野）
飛月　鯉（北海道）
山下　由子（北海道）
布施　房子（北海道）
藤田　時子（北海道）
相島みどり（北海道）
三浦　一郎（東京）
鈴木信太郎（朝鮮）
松島つるの（靜岡）
長崎　援夫（東京）
田島　英二（横濱）
岡田　義祐（横濱）
中村きみ代（茨城）
立石百合子（東京）
山泉　乾郎（秋田）
近松　文夫（福岡）
秋元　長治（宮崎）
平田　重美（名古屋）
森　定子（東京）
濱　久造（東京）
勝浦　勝二（岩手）
富田　正雄（廣島）
久米　元一（茨城）
市川　龍次（山梨）
關　哲雄（京都）
新井あさ子（東京）
小笠原弘志（青森）
佐藤　百代（東京）
米岸　惠美（東京）
長壁長四郎（新潟）
横濱　照波（横濱）
鈴木てるよ（朝鮮）
井上　一郎（東京）
青柳　一夫（神奈川）
松村　正美（北海道）
安島　理作（石川）
加藤　桂子（埼玉）
遠藤　道子（東京）
伊藤　保一（京都）
金川比志二（鹿兒島）
寺本清二郎（高知）
池尾　花子（山梨）
長田　尙子（神戸）
若日　桂作（大連）
谷口　忠六（香川）
米津虎太郎（山口）

（以下次號）

自由畫掲載外佳作

町田　尙（長野）
河島　清（京都）
松島　正規（東京）
若林　芳夫（千葉）
上田　松二（京都）
大田　虎藏（不明）
片岡　美穂（千葉）
本田　和夫（長野）
林　茂夫（東京）
町田　尙（長野）
伊藤　登良男（東京）
深谷　逸也（福島）
糸井　美宜（京都）
遠藤　繁子（仙臺）
和田　英雄（京都）
田原ヨシ（千葉）
山田　明（長野）
榊原　繁夫（京都）
白井　巖（香川）
寒竹　迪（東京）
松島　正規（東京）
新井　德松（長野）
武田　博（長野）
山田　茂子（東京）
加藤　元治郎（宮城）
水尾　隆彦（名古屋）
大谷　壽三（阜岐）
足利　富子（廣島）
鈴木　司萬子（東京）
船山　よし子（山形）
橋本　晳子（千葉）
持田　叙（長野）
立石　百合子（東京）
持地　正三（福島）
浪　枝（香川）
榊原　敏夫（京都）
紫田　美緒（岐阜）
植木　正春（不明）
長井　一（長野）
中山新七（香川）
山村　俊治（兵庫）
中山　伍平（北海道）
山川
押田　良夫（福島）
岩濱　二郎（大阪）

幼年詩掲外佳作

荒木　克代（香川）
加藤　新之丞（愛知）
佐藤　博之（愛知）
二川　秀夫（香川）
前田　守一（愛知）
清水　マス子（香川）
宮武　サダ子（香川）
日高　賢郎（福岡）
多田　利子（香川）
小鹽　卓三（岐阜）

佐野　正義（秋田）
白井　巖（香川）
岩本　てる（和歌山）
岡添　喜久子（東京）
武田　タツ子（香川）
安井　谷雄（愛知）
混本　繁世（東京）
增利　重雄（鹿兒島）
池淵　淳一（香川）
加藤　藤三（岐阜）
小坂井　茂（愛知）
原田　忠三（福島）
瀧川　千鶴（青森）
根來　精治郎（朝鮮）
五味　みさを（山梨）
若林　芳雄（千葉）
神宮司　四男（鹿兒島）
吉田　正三（福井）
松本　宮子（香川）
新庄　盡光（山口）
村山　さと（山形）
荻野　君子（山梨）
棚橋　茁助（岐阜）
富田　正一（愛知）
津下　恩（熊本）
田阪部　美山　辰之助（新潟）
畑　勇三（大阪）

綴方掲外佳作

南須原　靜也（東京）
糸井　成美（京都）
橋　祐彦（香川）
若林　芳雄（山梨）
山口　繁（山梨）
一瀨　清子（福井）
吉田　正藏（福井）
大波　美津（福井）
小原　英太郎（福井）
金子　正男（埼玉）
城井　安子（東京）
飯田　富枝（千葉）
村尾　秀一（京都）
奥村　とめ（滋賀）
黑瀨　吉治郎（滋賀）
梅岡　三郎（東京）
長谷川直太郎（福井）
小宮　清次（山梨）
千ヶ崎　英三（山梨）
谷　古　滿（滋賀）
宮津　健次郎（山梨）
山田　道治（滿洲）
花岡　健一郎（山口）
扇谷　繁春（奈良）
石川　のす（山形）
河島　清（京都）
山村　俊治（兵庫）
竹内　芳夫（長野）
辻　猪一（滋賀）
大柳　熊雄（東京）

新しく出た本

◎**ねこの島**（小島政二郎先生著）「金の星」でおなじのの小島先生が毎月春陽堂からお出しになる例の『新しい童話』の第十篇です。この集の中には「ねこの島」外「胸に穴のある人」「奴さん」「一本の針」「盜坊」「ゞしん〳〵ごう」「魔法使」「手紙のはじまり」「ふいの切腹」等の面白い童話が收められてゐます。これ等の童話は序文の中にも出所が明かにされてゐる通り著者が少年の時に人から聞いた人情話や昔の支那の物語りや、日本の古い書物にある話や、西洋のお伽噺から材料を得て、それに著者が非常な苦心を加へて作られたものだけに實に内容豐かで、どれもこれも氣持ちよく讀まれる面白い話ばかりであります。裝幀も立派で、松野德太郎氏の挿畫がまた山はひつてゐます。是非御一讀をおすゝめします。（四六版一九二頁。定價八拾五錢。日本橋區通四丁目春陽堂。振替東京一一六七）

◆滑稽童話集**馬の玉子**（松本苦味氏編）世界各國の有名なお話の中で、特に滑稽味のゆたかな作を集めたものでありますから、讀んで思はずお腹をかゝへさせやうなお話ばかりです。滑稽なお話の好きな少年の讀者には最も喜ばれるに相違ありません。裝幀も大層美しい上に挿畫は「金の星」でおなじみの水島爾保布先生が澤山に書いてをられますから、一層この本を面白おかしくさせてゐます。（四六版二四四頁。定價一圓廿錢。東京京橋南鍋町虎藥の日本社發行）

田中文人（香川）　三浦間勇（福島）
柴田美緒（岐阜）　篠原英男（長野）
大西武夫（奈良）　村尾秀一（京都）
高橋たか（千葉）　中田ダイ（千葉）
田村ハナ子（千葉）　船山ふで（山形）
星野一美（福島）　田中安市（埼玉）
村田貞三（滋賀）　阿部とく子（三重）
増田誠吉（不明）　永井清英（長野）
平田敏子（岐阜）

―童話掲載外佳作―

（大人篇）

善理牧羊（北海道）　佐伯逢夫（山口）
新井青一（東京）　本間一郎（東京）
佐藤榮治（名古屋）　大橋正憲（秋田）
永島ふみ（大阪）　足利富子（廣島）
竹内よし夫（横濱）　神宮司明（鹿兒島）
土橋力（山梨）　須藤薫（千葉）
岩下克己（不明）　松葉繁雄（和歌山）
久米元一（茨城）　神藏德男（東京）
山本吉次（静岡）　森田義三（東京）
宇野英夫（奉天）　谷口長樹（三重）
富岡登久四郎（東京）　山本秀夫（大阪）
櫻井光男（名古屋）　望月實（横須賀）
若林芳雄（千葉）　布施十四郎（東京）
八ツ代春村（東京）　田村カノ（富山）
松本芳山（東京）　細田粕（山口）
岸香（北海道）　桑野紫葉（福岡）
石山チヨ（神奈川）　稲谷晃緣（石川）

（小供篇）

新井アサ子（東京）　本田和夫（長野）
藤見久次（長崎）　北野牧雄（仙臺）
小田しげゆき（北海道）　石川龜之助（東京）
村上たつま（神戸）　田中安夫（埼玉）
浦本香漢流（京城）　榎本行男（鹿本）
竹内よし夫（横濱）　加藤藤三（岐阜）
細川繁夫（大阪）　稲谷晃英（石川）
竹内しげる（東京）　杉井清松（横濱）
加藤幹雄（山梨）　糸井成美（京都）
伊藤祐貫（小樽）　大河内鉦治（神奈川）
有賀美智子（東京）　泉澤マサエ（東京）
土橋良輔（山梨）　武藤珍子（鹿兒）
玉井紫水（京都）　鳥羽田平次（茨城）
阪本みのる（奉天）　布施十四郎（東京）
大高寅雄（滋賀）　檜垣美枝子（愛知）
藤田英一（東京）　黒部妙子（横濱）
櫻井光男（名古屋）　鈴木信三（北海道）
薄井益太郎（八王子）　君島八智郎（栃木）
内川芳果（奉天）　林野賢一（兵庫）
西街赫四（仙臺）　桑原拾吉（横濱）
桑原長太郎（東京）　高崎研作（長野）
平井淳雄（横濱）　中村キヨ子（東京）
久米元一（茨城）　稲葉黨（不明）
宍戸功夫（朝鮮）　中田良二（新潟）
齋藤武（東京）　立石百合子（東京）
菅原逵雀（仙臺）　千ク崎英三（山梨）
寒竹涙花（東京）　阿部とく（三重）
矢部清三（山形）　羽根田いし（福島）

―童話掲載外佳作―

（大人篇）

（小供篇）

◆哀唱（西條八十先生著）　美しく愛らしい抒情小曲集です。廻り燈籠以下三十八篇の小曲が集められてゐますが、どれもこれも著者獨得の若き日の夢を歌つたものですから少女の讀者の熱愛を受けるでせう。尙この外に米國の閨秀詩人セーラ・ティスデール女史のやさしい詩が十三篇著者の麗しい筆で譯されてゐます。これも實に愛唱せずにはゐられないものばかりです。この外に尙、本居長世先生作曲の「うしろ姿」と中山晋平先生作曲の「天の川」の二曲が入つてゐます。裝幀と挿畫は加藤まさを氏の手になつたもので、表紙の美しい繻子と美しい挿畫とは特に目をひきました。（小形判一三四頁　定價金壹圓七十錢　東京日本橋大傳馬町。內田老鶴圃發行。振替東京二一一四六番）

◆學校劇論（小原國芳氏著）　この頃兒童劇と一しよに盛になつた學校劇に就ていろいろの方面から研究を重ねて行つて、その研究を一冊にまとめたのがこの本です。著者は教育と劇に就て實に熱心な人だけにチミツな行きとゞいた研究がしてあります。劇に興味を持つ者の是非一讀する必要のあるものです。今後盛んになつて行かればならぬ學校劇のためにかういふよい本の出たのは喜しい事です尙、この著者は舊姓鱒坂さんといつて教育に熱心な人として知られてゐる人です。イデア書店からは今後も引續いてかういつた研究書が澤山おるさうです。（四六判一九七頁。定價金一圓四十錢。東京牛込山伏町一四　イデア書店發行。振替東京一五四二三番）

大懸賞傳說物語募集

═ 特に少年少女を主人公とした物 ═

日本は傳說に富んだ國です。島國だけに世界のどの國に比べても、傳說の澤山ある事ではまけないと思ふ程です。私どもが子供の時にお父さまやお母さまや、又お祖父さまお祖母さま達から聞かされたお話を思出して見ても、その中にはなか〳〵すぐれた立派なお話のあることを思ひます。

しかし、惜しいことには是程澤山に優れた傳說があるにも拘らず、少年少女が讀まうとしても適當に集められた本がありません。まことに殘念なことではありませんか。

そこで『金の星』はこの度日本全國の愛讀者の方々から廣く各地に傳へられてゐる傳說の中で、特に少年か少女かを主人公としたものを募集することにいたしました。皆さんが幼い時にお聞きになつたお話でも結構です。或はその土地に傳へられてゐる有名なお話でも結構です。面白い、そして優れたお話でさへあれば結構です。どし〳〵御投稿下さい。投稿者は少年少女に限らずどなたでも差支へありません。規定は左の通りです。

當選の各篇は十一月號の『少年少女傳說物語號』に掲載して賞金を呈します。尙十一月號には『金の星』のおなじみの諸先生の傳說物語りも滿載いたします。

□賞　金　一等（一篇）　金參拾圓。二等（二篇）　金拾五圓。三等（三篇）　金七圓。

（尙選外の作に對しても掲載の分には稿料を呈します。）

□締　切。八月二十日。

□原稿枚數。二十字詰二十行の原稿紙拾枚迄。

□選　者。沖野岩三郎先生、野口雨情先生、齋藤佐次郎先生

讀者だより

▲私は『金の星』を讀んで心から爲になる本だ、善い本だ、と思ひました。で下手ですが、『金の星』賞讃の歌へ歌を書きましたから見て下さいませ。

一つとや、日增に善くなる金の星
金の星は爲になる〳〵
二つとや、不思議に善く書く繪や文章〳〵
金の星は面白い〳〵
三つとや、見れば見る程知慧がつく〳〵
金の星は善い雜誌〳〵
四つとや、善い子に成らうと思ふなら〳〵
金の星を讀みなさい〳〵
五つとや、いつまで讀でもあきません〳〵
金の星を讀で見な〳〵
六つとや、無用の事柄一つもない
金の星讀む子はお利口だ〳〵
七つとや、何でもかんでも整つた
金の星は善い本だ〳〵、
八つとや、矢鱈に無駄買するよりも〳〵
金の星を買ひなさい〳〵
九つとや、此の樣な本は東洋一〳〵
金の星は價が安い〳〵
十とうとや、皆さんが共同して共同して
金の星を愛讀しましよ〳〵

（大連　野間正隆）

▲北海道のずつと北、オホツク海に近いところに佐呂間武士といふ小さな村があります。つい近ごろの話ですが、その村に『小學男生』といふ一冊の雜誌がとどきました。學校の教科書以外に本なんか讀んだこともない生徒達は爭つてその一冊の雜誌を讀みました。小學生ばかりでなく、村の文字の讀まれたる人々はこれを鑑寫するといふ有樣だつたさうです。私は信子可き友達からこの話をきいて非常に感動しました。で平素から愛讀してゐる『金の星』をこの二三ヶ月前から毎月送ることにして居ります。二三日前その學校の山口といふ先生から證狀が參りました。『：これに勝る喜びは無之、生徒達は一同拍手して一冊の雜誌をむかへ申候云々』といふ文面を見て私は涙の出るほどうれしく思ひました。つゝしんでこの喜びを『金の星』社の諸先生がたに御分ち致したいと思ひます。（芝區　永橋卓介）

▲今度『金の星』愛讀者の同人雜誌『鈴蘭』を發行することになりました。可愛らしい活版刷の本です。振つて御入會下さい。會則御入用の方は二錢切手封入の上「牛込區鶴巻町九番地寒竹進」宛に御申込み下さい。（鈴蘭會寒竹進。南須原靜也）

▲『金の星』六月號はほんとによく出來ました。表紙の『夢の國』はさすがですね。しかし、いつもいつも女ばかりの樣ですが、こんどは男の子も出して下さい。それからお寒れしたいことありますが、誌上でお答へ下さい。

一、誌友の機關雜誌『小馬』は、毎月『金の星』と、一所に來ないのですか。

二、和歌を募集して下さい。

三、私は三月號からの誌友ですが、まだ『小馬』が一冊しか來ませんが、期限が切れても、六冊來るのですか。

四、幼年詩、童話、綴方入賞でなくとも、褒さいの分には何か記しのものを與れては如何ですか。

五、金の星賞とはどんな物ですか。（千葉縣　若林芳雄）

◇誌友の方からいろ〳〵の御註文が參ります。金の星に對する深い御同情と思ひ記者はよろこんでゐますが、しかしまだ一々皆樣の御要求に應ずる運びに到らないのは殘念です。短歌の募集はいたしませんが、短歌よりも自由な幼年詩や童話を募集してゐますから、その方にお力を盡くしてください。「小馬」は『金の星』とは別々に誌友の方には御送りいたします。誌友費の期限が切れても『金の星』の冊數に相當するだけの小馬を差し上げます。『金の星』賞とは本社で特別に作りました美くしい用紙のことです。（記者）

▲僕の大好きな『ロビン・フッド』が出てゐたので、僕は夢中で讀んだ。この間ドーグラの『ロビン・フッド』な活動で見たので餘計面白かつた。それに『金の星』に出てゐる處は活動になかつたから。（東京　三好三郎）

▲私は童話に深く趣味を持つ一青年です。可なり前から御誌を見て居りましたが、別に御知らせもしませんでした。たゞ一人遠くはなれた桑の都から同志の多くなるのを、御誌の發展して行かれるのを見て喜んで居りました。私は野口雨情先生を崇拜して居る者です。

御誌を毎月愛讀してゐるのも、一つは野口先生が童謡の選をして居て下さるからです。先生の著書は一通り見たいと思つて居ります。去年十二月に當方へ本居先生及びみどり、貴美子嬢がおいで下さいまして、童謡音樂會が開かれました時、野口先生の十五夜お月さん青い眼の人形、赤い靴、歸る雁、鯉さん等が合唱獨唱せられました時は、まつたく何と云つてよいか實に嬉しかつたです。今後も私は純眞そのものゝ樣な童謡に盡して行かうと思つて居ります。終りに野口先生及諸先生の御健康をお祈り致します。（八王子薄井益太郎）

▲皆樣御たつしやですか。私は今度『月見草』といふ童謡雜誌を發行しました。社費は一ヶ月五錢（送料共）です、ホンノ實費で發行してゐます。どうかみなさんも仲間に加つて下さい。（滋賀縣長野町神崎みのる）

▲僕等は今度童謡を研究する目的で白露會なるものを設立しました。月一回小雜誌『白露』を發行します。皆樣、是非お入り下さい。會費は一ヶ月七錢です。（東京府下蘆戸町二千四百十番地　所方、白露會）

▲先生　五月號から扉をつけて下さつて有難うございます。雜誌が美しく引締つた樣な氣がします。それに六月の扉は何て可愛いのでせう。散つて行つたバラのすゝり泣く聲が聞えるやうです。それから姉と弟が此の間慈友になりましたが私共も御仲間に入れて下さいませ。御願ひ申上ます。（名古屋　水尾夏子、同博子）

▲『伸びろ』といふ、菊版二十數頁の創作雜誌を出してゐます。小學兒童に與へるものになつてゐますが、希望の諸君には喜んで進呈します。詩歌文何んでも寄稿してくれ給へ。創刊號も出來てゐます。餘意があつたら、郵券二錢を添へて。『忘れても結構』（市外高田町若葉伸びる社近松清）

▲『金の星』はいつ見ても美しい可愛い本です。もつと〳〵發展するのを祈ります。私は今度可愛い童謡誌『しづく』を出しました。童謡のお好きな方は二錢切手五枚お送り下さい、差上げます　宛名は（和歌山縣黑江町舟尾八三津村正雄）

◇御發行の可愛い童謡雜誌『しづく』有り難く頂戴いたしました。御成長を祈ります。（記者）

▲先頃は誠に拙い原稿を御送附致しまして甚だ恐縮に存じます。就いては雨情先生のおびんづるを拜見致しまして誠に感深うございました。私如き若輩が先生の謡に曲譜か付ける事は最も恐れ多き事と存じますけれど、如何にも禁じ得ない感情のあふれである事を思召して何うぞお許し下さいませ。今度は原稿として童謡を御送附致します。先生何とぞ御批評をお願ひ申します。（横濱　平井あつを）

▲僕も今月から『金の星』を愛讀します。ドシ〳〵投書しますから記者樣目を廻さないで下さい。（新潟　飛野三郎）

▲僕は田舍の山寺に居る者です。先生、お父さんの友達で東寺の中學校にゐる方が來られて僕の作つた歌を見て、このくらゐ出來たら雜誌を取つて讀んだり投書したりなさい。さうして『金の星』といふ雜誌をおとりなさい。私が京都へ歸るとさつそく送る、と申されてそのお父さんの友達はお歸りになると直ぐ『金の金』を送つてくれました。僕はその雜誌を見て僕はこんなによい雜誌を早く讀まなんだであらう、又今まで何んで知らなんだであらうと今さらざんねんに思ひました。京都から三月分送つて下さるとの事でその後はお父さんにお願ひして御社から取つていたゞくことになりました。僕らのやうなつまらぬ者をお仲間入りさせて下さい。又投書もさせて下さい。（大阪　合田惠正）

▲研作もこれから投書します。研作は書なども上手です。今後親方も幼年詩も投書します。かはいい子供です。あたまがおほきくてほうのふつくらしたところは何とも言へないかはいさがあります。僕の書方を見て研作はあんな子と思つてはいけません。（山田照華）

▲霜田先生の『阿新丸』は本當に面白いと思つた。かういふ歴史物語は僕は大好きです。それに水鳥先生の畫がまたステキでした。毎月かういふお話を出して下さい。（北海道　島田貞一）

▲記者樣、私はながい間の『金の星』の愛讀者ですが、記者樣だけの寫眞をせひ出して下さい。私は記者樣たちがどんな人たちかといふことを考へてゐます。（京都　横田正雄）

◇仰せに從つて次號にでも記者一同の御面相を御覽に入れることにいたしませう。その代どうぞひやかさないで下さい。（記者）

▲『金の星』が來ると夜おそく迄かつても讀みぬいてしまれひます畫よめぬのでいくらおそくとも讀みます。そしてあくる日から次號のくるまでの間にもう一回よみます時にはづつと前ののゝ出して讀みます。比頃の『金の星』の發展は實に目覺ましい。諸先生、尚々もしつかり頼みます。（長野縣　矢下清榮）

山栗鈍

【第七回】

沖野岩三郎

前號までの梗概　裏山の櫻林へ毎日澤山の猿が來て、小猿のチョンから面白い話を聞かせてもらつてゐました。猿の中には法性院だの、吉水院だの、青蓮院だのといふ大將の猿がゐて、大勢の猿を指揮してゐました。チョンの話は昨日のところでは、定九郎先生と「赤頭巾」といふ二疋の猿が、廻り廻つて、遂に軍艦に乘つて、イギリスのロンドンへ行き、イギリス兵の前で「楠公父子の別れ」のお芝居をやつて、大喝采を博したところでした。今日もまた、猿たちはチョンの話を聞きに、法性院につれられてゾロ〳〵やつて來ました。

大禮服

『木の實は上出來ですネ。』

『地面が見えない程落ちてゐますネ。』

法性院とチョンとの挨拶が終ると、多勢の猿はもうちやんと一列に並んで、チョンの話を待つてゐました。

『今日は七回目のお話ですが、私のお話を一回から皆な聞いたお方は、右の手を一つだけ頭の上に載せて御覽！』

チョンは命令するやうに言ひました。そして調べてみると

皆なで三十六疋ありました。殘りの八疋は四回しかお話を聞かないといひました。

『あれから定九郎先生と赤頭巾君は、どうなりましたか。』

法性院は顎を撫でながら訊きました。

『いよ〳〵日本の軍艦が其國の港を出るといふ前の日、水兵は市中見物に出ましたのです。そしてロンドン塔といふのを見に行きますと、其所にはいろ〳〵の珍らしいものが陳列してあるので、定九郎先生も赤頭巾君も、水兵の肩の上から、きよろ〳〵見渡してゐると、何所からとなく《おい〳〵、君達は日本の猿ではないか。》といふ聲が聞えるので、ぴッくりして振返つてみると、後の圓い柱の所に日本の若い男が一人立つてゐるのです。若い男の肩には一疋の可愛い猿が、ちよこなんと坐つてゐて、こちらを見てゐるのです。で、定九郎先生が《今、僕達を呼んだのは君かい！》と問ひますと、《さうだ、僕はネ、二年前にこの若い男と一緒に日本の熊野から渡つて來たんだ。だから僕は熊野猿だが、君達は何所產れだい？》と尋ねました。

《僕達は四國產れの四國猿だよ。》と定九郎先生は言ひました

《さうか、四國猿より熊野猿の方が偉いんだぞ。》と熊野猿は言ひました。

《馬鹿な事を言へ、熊野猿の方が四國猿より馬鹿だぞ。》

《熊野には三國一の那智の瀧といふのがあるぞ。》

《四國には象頭山金毘羅大權現があるぞ。》

《熊野には熊野大權現があるぞ。》

《熊野の海濱から四國の金毘羅へ參ると云つて、年々多勢出かけて來るが、大抵事比羅神社へ參詣して、それを金毘羅さんだと思つてゐるぢやないか。おい〳〵熊野猿、君も琴比羅神社を金毘羅樣だと思つて、あんけらかんと拜んで來たのぢやないかい？》

定九郎先生にさう言はれた熊野猿は、其時すつかり悄然て了まひました。

『どうして、そんなに悄然たのです？』と、法性院は聞きました。

『それはかういふワケなんです。其の熊野猿は自分の養はれてゐた家の主人と一緒に、四國の金毘羅樣へわざ〳〵詣つたのです。そして事比羅神社を金毘羅樣だと思つて、一生懸命

に拜んで來たのださうです。」

『コンピラとコトヒラとは發音が大變違ふぢやァないか。どうして金毘羅樣へ詣つて事比羅を拜んで來たんだい。馬鹿だネ。その熊野猿は。』

法性院は腹の立つたやうに呶鳴りました。

『それは致方が無いのです。少うしむづかしいが我慢して聞いて下さい。今から七百七十年程前に、人間と人間との大戰爭があつたのださうです。其時戰爭に負けた崇德上皇樣といふ人間の中の偉いお方が、うつろ舟といふ舟に乘せられて四國へ流されたのです。崇德上皇樣は、どうかして船が引ッくり返らないやうにと思つて、一生懸命に金毘羅樣を拜んだのです。そして金毘羅樣のお護を得て象頭山金毘羅大權現を祭つてある讃岐の國へ無事にお着きになつたのです。其事があつてから、日本の人達は、海を渡る時、船の引つくり返らないやうにと言つて、金毘羅樣を一生懸命に拜むやうになつたのです。』

『金毘羅樣といふのは、どんな神樣だい？』

青蓮院は尊ねました。

『金毘羅といふのは印度の佛樣です。』

『印度の佛樣が日本の人を護つて呉れたのですネ。』

『さうです。所がネ、今から五十年程前に廢佛毀釋といふ事があつたのです。』

『廢佛毀釋？それは一體何といふ事です？』

『廢佛毀釋といふのは、佛樣を拜むなといふ事です。日本には日本の神樣があるから、日本の人は日本の神樣を拜め、印度の佛樣を拜んではならないといつたのです。』

『さうか、それでは金毘羅さんも、山の上から追ッ拂はれたんだネ。』

『さうだ、金毘羅さんは象頭山の上から追ッ拂はれてしまつたのです。』

『それから金毘羅さんを拜む人が無くなりましたか？』

『金毘羅さんは追ッ拂はれても、海は矢張り荒れるので、船に乘る人達は、元の通り南無象頭山金毘羅大權現……と云つて拜みます。そして今でも毎日何千人といふ人が四國へ渡つて行つて、象頭山へ登つて金毘羅樣を拜みます。』

『金毘羅樣は象頭山から追ッ拂はれたんでせう？』

『金毘羅樣は追ッ拂はれたが、其のあとへ事比羅神社といふのを祭りました。』

『其の事比羅樣は船に乘る人を護る神樣ですか。』

『違ひます。それは日本の神樣です。』

『では、わざ〳〵四國まで渡つて、金毘羅樣にお詣りに行つた人は、何處を拜むのです。』

『吾々猿であつたら、金毘羅樣は航海を守る印度の佛樣で、琴比羅樣は日本の昔の神樣だ位は、能うく知つてゐるが、人間といふ奴は馬鹿だから、金毘羅樣と事比羅樣との區別が判らないと見え、琴比羅神社の前に行つて、南無象頭山金毘羅大權現……と云つて拜んでゐるんですよ。そして百圓、五百圓、千圓のお金を見當違ひの事比羅樣へ上げるんですよ。』

『それは金毘羅樣へ上げるのでせう？』

『さうだ。けれども事比羅樣は默つてそれを頂戴するらしいですよ。』

『日本の神樣は、そんな事はなさらないでせう。南無象頭山金毘羅大權現……と大きな聲で拜むんだもの、まさか其のお賽錢を事比羅樣が横奪りして御自分のものにはなさらないで

せう。きつと山の下で淋しさうにしてゐる金毘羅樣へ持つて行つて上げるんでせうよ。」

『象頭山へ行つてみれば、其所に祭つてあるのが、印度の金毘羅樣か、日本の事比羅さまか、直ぐ解りさうなものだネ。僕達だつて狐と狸との見分位は直ぐつくがネ。馬と驢馬だつて一寸見れば解るぢやないか。』

『所がネ。其の事比羅へ詣つてみると、わざと事比羅が金毘羅に見えるやうにしてあるんだよ。字まで事比羅とは書かないで、(金刀比羅)と書いて、金毘羅の(金)の字を徽章にしてあるし、一番始めに拜む宮さんだつて　旭社)と書いてあるだけで、何といふ神樣を祭つてあるんだか解らないやうにしてある。それから本社へ詣つてみても、神樣のお名前が書いて居ないんださうな、だから金毘羅樣へ參詣した人達は、《多分これが金毘羅樣だらう》と思つて、其所へお賽錢を供へて歸るんだよ。人間ッて餘程馬鹿なものだネ。』

『さうか。そいつは面白い事を聞いた。人間はそんな馬鹿なものなら、僕にも面白い考へがある!』と法性院は嬉しさうに言ひました。

『どんな事です?』とチョンか尋ねますと、法性院は、ニコニコ笑ひながら、

『この山の麓にお稲荷さまが祭つてある。毎日々々人間共が油揚だの、握り飯だのを持つて來て、狐に供へてゐるよ。あしこには狐が一疋しか居ないから、明日の朝は、あの狐を山の向ふへ追ッ拂つて、人間共が狐に供へに來るあの御馳走をお互ひが奪つて食べてやらうぢやないか。』と言つて、笑ひました。

『賛成々々。』と四十三疋の猿は大聲で申しました。

『金毘羅樣へ上げに來たお賽錢を事比羅樣が貰つても宜いのなら、狐に供へた御馳走を猿が食べても宜い筈ぢやないか。』と青運院も申しました。其時チョンは、

『皆さん、まあ〳〵、そんなに周章てないで、其の熊野猿と四國猿との話を聞いて下さい。……其のロンドン塔で四國猿の赤頭巾君と、定九郎先生とは熊野猿に誘れて、軍艦へ歸つてみると、軍艦には、其國の陸軍大臣と海軍大臣とが來てゐたさうです。』

『陸軍大臣、海軍大臣ッて、それは何をする人です?』と吉

水院は訊きました。

『それは戰爭に偉い人ださうな。其の二人の大臣は、日本大將に、《私の國のヴィクトリヤ女王樣が、是非日本のお猿樣を御覽になりたいと申されますので、唯今からバッキンナム宮殿まで、二疋のお猿樣をお伴れ下されたい》と言つたのです。そこで軍艦の大將は大山兵曹に定九郎先生と赤頭巾君を伴れさせ、バッキンナム宮殿に行きますと、ヴィクトリア女王樣が、是非定九郎先生と赤頭巾君との藝を御覽になりたいと仰しやるので、大山兵曹は女王樣の前で、(お染久松)の芝居をさせて御覽に入れました。定九郎先生が久松になつて、赤頭巾君がお染になつたのです。その芝居を御覽になつた女王樣は、大變感心なさつて、ほろ〳〵と涙をおこぼしなされたさうです。で《も一つ、活潑な芝居をして見せて下さい。》と仰しやるので、今度は、《辨慶牛若丸五條の橋》といふのをやりました。定九郎先生が辨慶になつて牛若丸に斬つてかゝると、赤頭巾の牛若丸は、ひらり、ひらりと及の下を潜つて丁々發止、一上一下盛々實々と戰ひました。』

『丁々發止、一上一下盛々實々ッてのは、どんな事だい?』

法性院は不思議さうに問ひました。

『ちやん〳〵ばら〳〵ッて云ふ事だよ。』

『ちやん〳〵ばら〳〵ッて、どんな事ですか。』

『大騒ぎッて云ふ事だよ。』

『では、大騒ぎッて最初から言へばいゝぢやないか。丁々發止、一上一下、だなんてむづかしい事を云はないで……』と云つて青蓮院は怒つたやうな顔をしてゐました。

『御免下さい。今は馬鹿な人間共の間でさへ、漢字制限論といふのが流行つてゐるのです。それに僕のやうな賢い猿がそんな難かしい事を云つたのは悪うございました。』

『謝罪るなら赦してやる。次のお話をなさい！』

青蓮院は本當に立腹してゐるらしく叱りました。

『辨慶と牛若丸の戰爭が、あまり面白かつたので、ヴィクトリア女王樣は、《もう一つお芝居をして下さい》と仰しやいました。そこで今度は（足柄山の金太郎）を御覽に入れました。定九郎先生が金太郎になつて、赤頭巾がお猿になつたのです。そして二疋がお相撲の稽古をして御覽に入れました。大山兵曹は、はッけよい、のこッた、のこッたと云つて行司をしてゐましたが、どうしても勝負がつかないので、二疋を引分けてみますと、定九郎先生も紅頭巾君も、汗びッしよりになつて、へと〳〵に弱つて腰が立たなくなつてゐました。で、二疋はヴィクトリア女王樣から御褒走を戴いて元氣をつけましたが、女王樣は非常に感心なすつたと見え、二疋にお褒美を下さいました。

『お褒美に蜜柑でも臭れたのですか。』と法性院は尋ねました

『定九郎先生を海軍大將にして、アドミラル、ホレイチオ・ネルソンといふ名をつけて臭れました。それから赤頭巾君は陸軍大將にして貰つて、鐵騎兵隊長ヂエネラル・オリバル・クロムウエルといふ名を貰ひました。』

『えらい出世をしたものですネ。御褒美に名前をつけて貰つただけですか。其他にお菓子の一箱も貰はなかつたのですか。』と青蓮院は訊きました。

『鐵十字といふ勳章と、大將の大禮服とを貰ひました。』

『大禮服ッてどんなものだい？　鐵十字ッてのは果物の名ですかと』吉水院は尋ねました。

『いゝえ、大禮服といふのは、ぴか〳〵光る立派な着物です。勳章といふのは、金で作つた裝飾で、それをかけてゐる人は偉い人だといふ徽號なんです。』

『人間は偉くなつたら、どんなになるのです？　羽でも生えて飛ぶやうになるのですか。』

『いゝえ、そんな事はない。偉くなつて大禮服を着て、勳章を胸の所へかけてゐると、家來共が敬禮といふのをするのです。』

『敬禮をして貰ふと、どんなに面白い事があるのですか。』

『面白い事も何にも無いんでせう。けれども、敬禮をして貰ふと、嬉しいんでせうよ。』

『人間のする事だもの、吾々には解らないさ。所が其のネルソンとクロムウエルは大禮服といふのを着て、どうしたんだい？』

法性院は欠伸をしながら問ひました。

『定九郎のネルソン將軍と、赤頭巾のクロムウエル將軍は、軍艦へ大威張りで歸りました。すると軍艦にゐる兵隊さんは皆な鐵砲を持つて出て來ました。そしてネルソン將軍とクロムウエル將軍のお歸りを待ち受けて、皆な敬禮をしました。クロムウエルも、ネルソンも大山兵曹に伴れられて、大威張りで兵隊さんの並んでゐる前を通つて自分の室へ入つて行きました。』

『それからどうなりましたか。』

法性院は頭を搔きながら訊きました。

『それから、ネルソンとクロムウエルとは軍艦に乘つて日本へ歸つたのだが、軍艦が紀州の熊野浦へ着いた時、二人はロンドン塔の上で熊野猿に聞いた事のある那智の瀧を見たいと思つたので、朝夙く大山兵曹の寢てゐるうちに、そうッと軍艦を脫け出して、熊野の山の中へ入つてしまつたのです。』

『今頃どこに居るのだらう？　一度會つてみたいものだネ。』と吉水院は言ひました。

其時法性院は一同を見廻して、

『皆さん、どうです、最前私が言つたやうに、これから皆なで、あの稻荷さんへ押かけて行つて、あしこに居る狐を向ふの山へ追つ拂つて、油揚や握り飯を奪つてやらうぢやないですか。』

と、云ひました。（つゞく）

お子様の夏の必要品

◆四階の小兒部にはお子様方の暑中の御用品が残らず取揃へてあります、帽子、洋服を始め海水着其他澤山あります◆

お嬢さま方のお帽子として最新型であります、四圓八十錢位、その他種々取揃へてあります

坊ちやま用として喜ばれてゐる帽子です、二圓六十錢也、その他型の異つたものが種々御座います

暑中のお召ものとして二三十向の最も絶好な簡單な服で御座います二圓十錢位◆

◆文化的お召物としました便利で身輕なお子様服が四階に澤山に陳列してあります◆

◆酷暑の夜は兎角寝冷からお體を損ねます、最も許せた寝巻も冷え知らず一圓十五錢

三越呉服店

◆東京市駿河町◆

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由・畫……山本鼎先生選

幼年詩……若山牧水先生選

綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなもの、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何遍出してもかまひませんが、**姓名**は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の**賞品**を差上げます。次號締切は七月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は十一月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選

童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹册　參拾錢　送料壹錢
三ケ月分三册（送料共）九拾錢
半年分六册（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二册（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號新年號は特別號で四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい▽送金は振替が一番便利で御座います

〔注意〕▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです▽第何卷第何號よりと書いてください▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年七月六日印刷納本（毎月一回）
大正十二年八月一日發行（一日發行）

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎

東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉

東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市外田端三百五十一番地
發行所　金の星社

振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

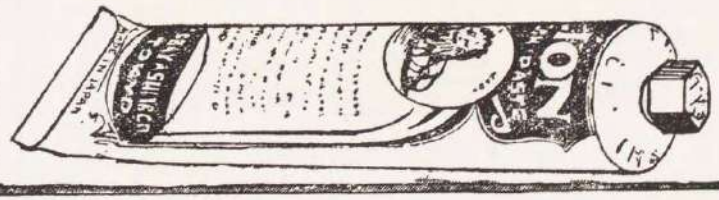
K2A-24

「姉ちゃん、あたし、あまくつて、おいしいはみがきがほしいわ。」

「さう！ではねえ、

ライオンねりはみがきを

おつかひなさい。ライオンねりはみがきは、ほんとに、おいしい、すずしいはみがきですから。」



『金の星』第五卷第八號（大正十一年六月十三日第三種郵便物認可）
大正十二年七月六日印刷納本
大正十二年八月一日發行（毎月一回一日發行）
（定價金三十錢 送料一錢）